

5. 赤前Ⅲ遺跡

5-1. 調査の概要と基本層序

赤前Ⅲ遺跡は宮古市遺跡コード番号LG-54-1025として登録されている。赤前Ⅲ遺跡は山麓から西に延びる尾根状の緩斜面と周辺の湿地などを含む低地で構成される。前述したように当遺跡ではこれまで二度の調査が行われている。平成9年度（1997）の調査は、前回の調査地点から標高で8mほど下がった尾根の先端部を横断する格好で行われた。

<検出遺構と基本層序>

A区（第168図）

A区は、赤前Ⅳ八枚田遺跡C区の低湿地の続きである。

縄文時代前期を主体とした遺物包含層が検出している。

基本層序

I層 やや締りのある黒褐色土である。盛土による耕作土層である。

Ⅱ層 黒色土で、多くの遺物を含む。旧表土層である。

Ⅲ層 やや締った黒褐色土で、やはり多数の土器が出土している。

Ⅳ層 明るめの黒褐色土で、大小の礫を多く含み、上面から土器が出土している。

B区（第169図）

B区は平坦な尾根の先端部にあたる。

縄文時代前期の竪穴住居跡1棟と土坑跡2基、平安時代の竪穴住居跡3棟、製鉄関連遺構1基、中近世？の土坑群などが出土している。

基本層序

B区堆積土層は3層に大別される。

I層 締りのない暗褐色土で、耕作土層である。

Ⅱ層 黒褐色土で、旧表土層である。B区の西側に堆積していた層である。

Ⅲ層 地山への漸移層である褐色土層である。

C区（第170図）

B区尾根の西側の低地である。

畑になっていた緩斜面から縄文時代の陥穴状土坑が出土している。

基本層序

I層 粗く締りのない暗褐色土で、耕作土層である。

Ⅱ層 やや固めの黒褐色土層である。旧表土層である。

Ⅲ層 軟らかめの褐色土層である。地山への漸移層である。

D区（第171図）

D区は、B区西隣の尾根の斜面にあたり、平安時代の道状遺構を検出している。

基本層序

I層 やや締りのある褐色土である。耕作土で、陶磁器、鉄滓などが出土している。

Ⅱ層 明褐色の盛土層である。D区とC区の間を流れる沢に土管を埋設した際の堆積層と思われる。

Ⅲ層 固く締った暗褐色土層である。

Ⅳ層 やや固く、密な黒褐色土層である。

Ⅴ層 やや締った暗褐色土である。

Ⅵ層 固く、疎な黄褐色土である。地山への漸移層である。

埋土層の対応関係は、A、B、C区のⅡ層はそれぞれ対応し、D区のⅢ層に対応する。またA区Ⅲ層は八枚田遺跡C区のⅢ層に対応する。

A区土層観察表

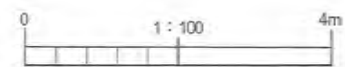
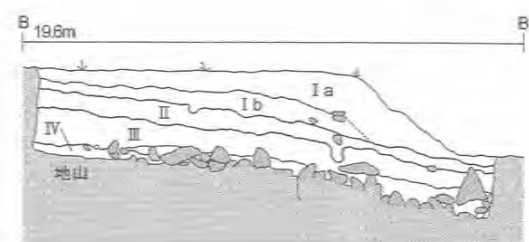
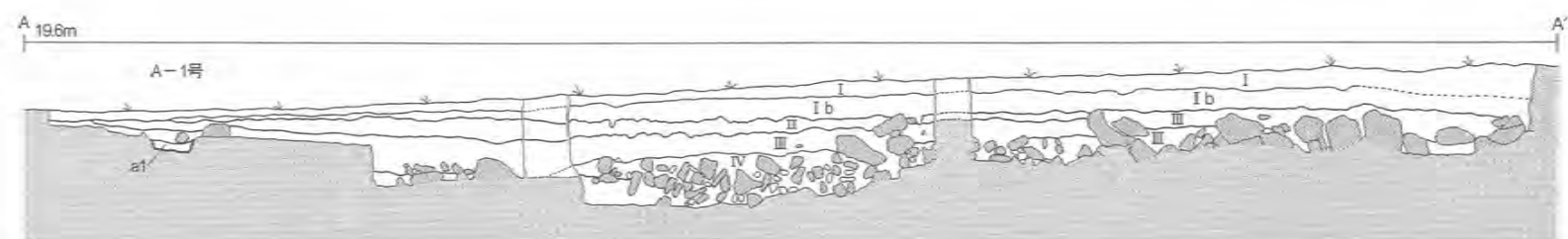
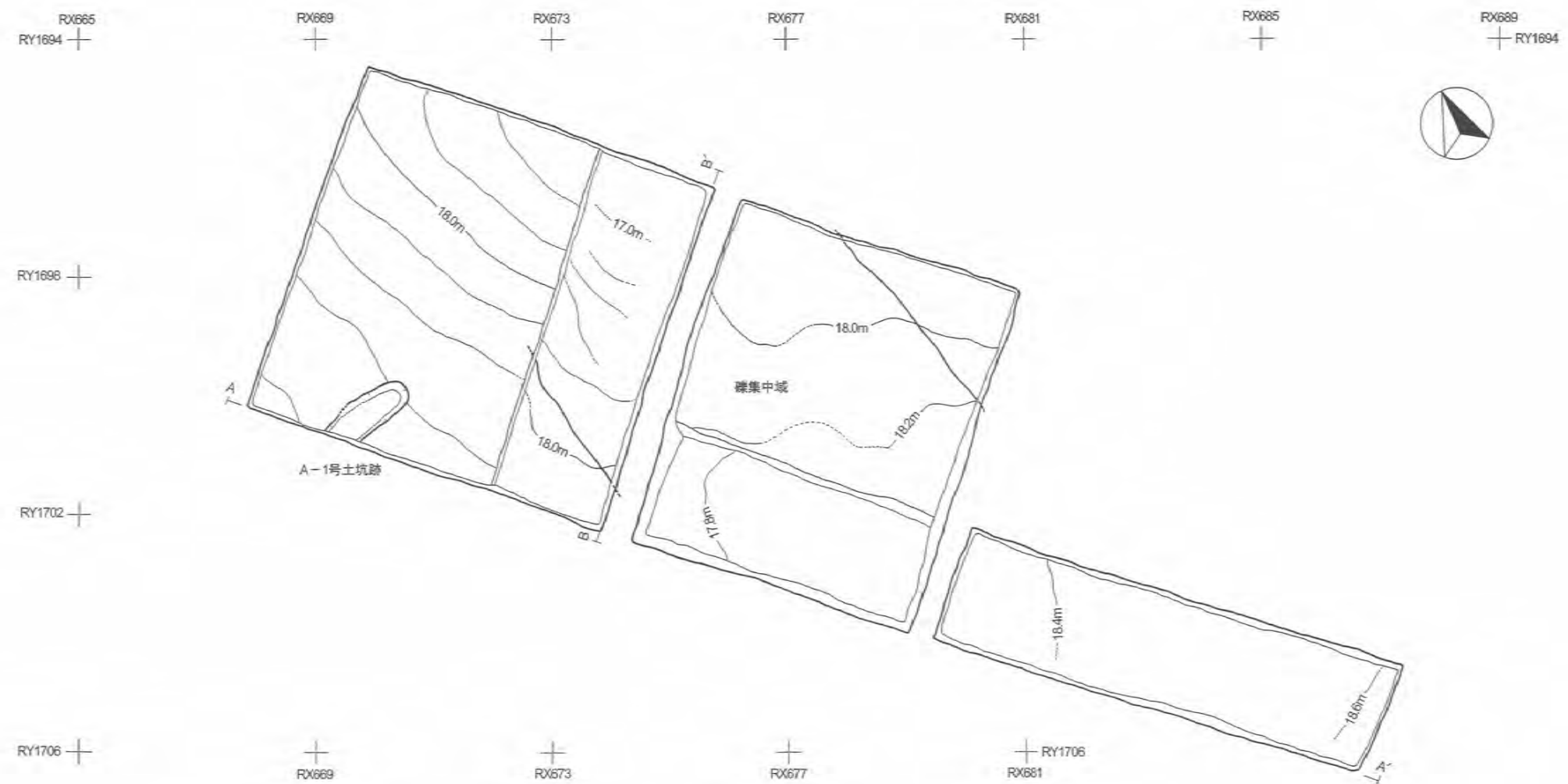
層名	基本土	混入土	備考
I	10YR2/3 黒褐 砂壤土	10YR4/4 5%	中～疎
I b	10YR2/3 黒褐 (明) 砂壤土	10YR2/1 10%	中、疎
Ⅱ	10YR2/1 黒 埴壤土	10YR3/3 10%	中、中 → 土器多
Ⅲ	10YR2/2 黒褐 砂壤土	10YR2/3 10%	中、中 → 土器多
Ⅳ 礫層	10YR3/2 黒褐 砂壤土	10YR3/1 10%	中～固、疎 → 上面から土器片

A-1号土坑跡土層観察表

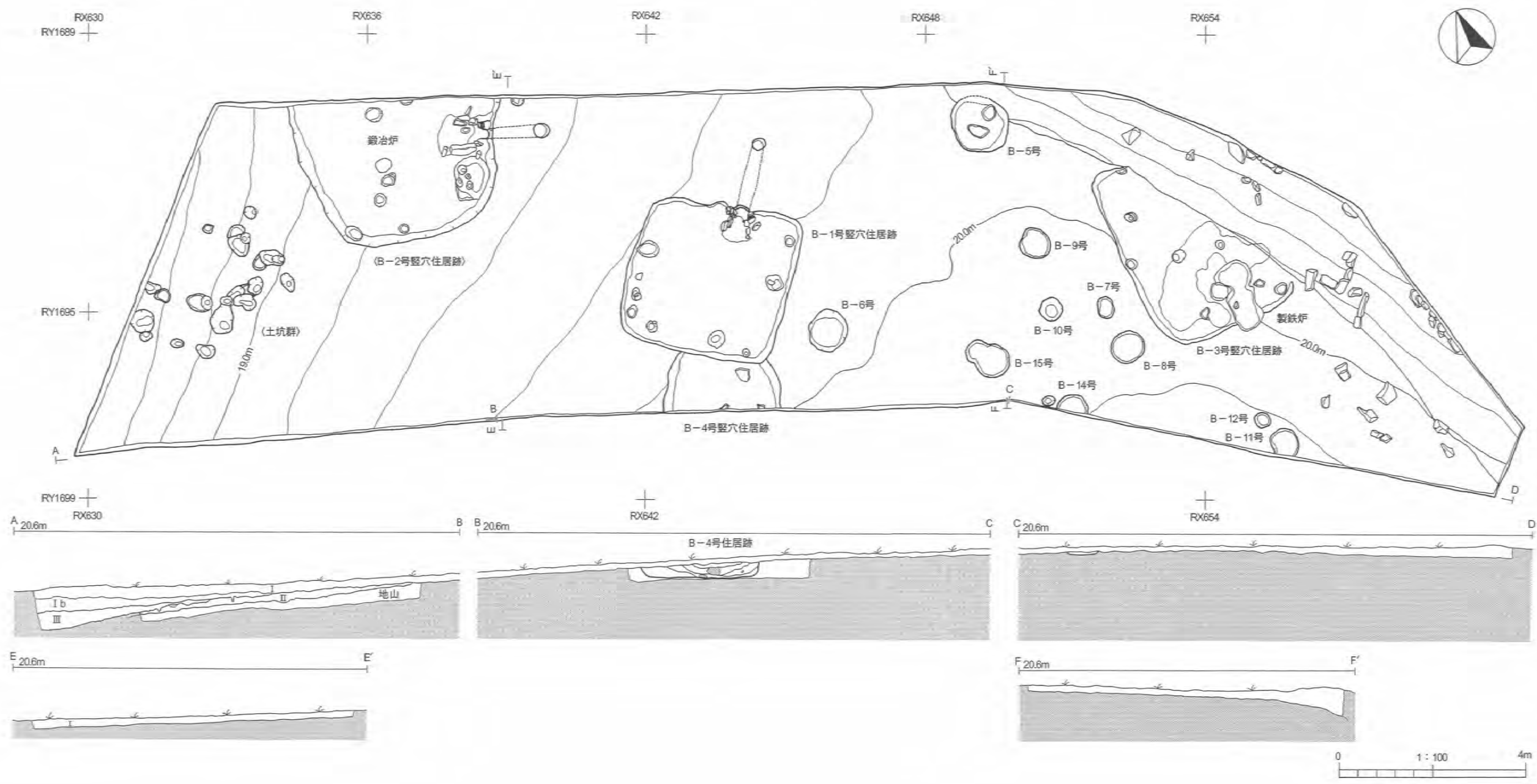
層名	基本土	混入土	備考
a 1	10YR3/3 黒褐 埴壤土	10YR4/3 5%	固、疎

B区土層観察表

層名	基本土	混入土	備考
I	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR5/6 3%	軟、疎
I b	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR5/6 15%	中、中
Ⅱ 黒色土	10YR2/3 黒褐 砂壤土	10YR3/2 15%	中、中 → 土器片
Ⅲ 地山漸移層	10YR4/6 褐 砂壤土	10YR3/3 15%	中～軟、中
地山	10YR4/6 褐 砂壤土	10YR4/4 10%	固、密



第168图 A区全体图



第169図 B区遺構配置、土層断面

RX608
RY1694

RX612

RX616

RX620

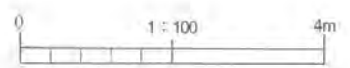
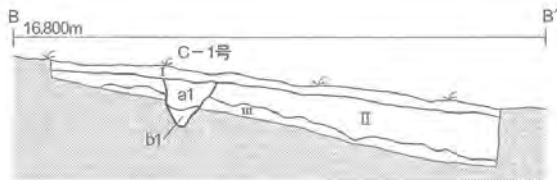
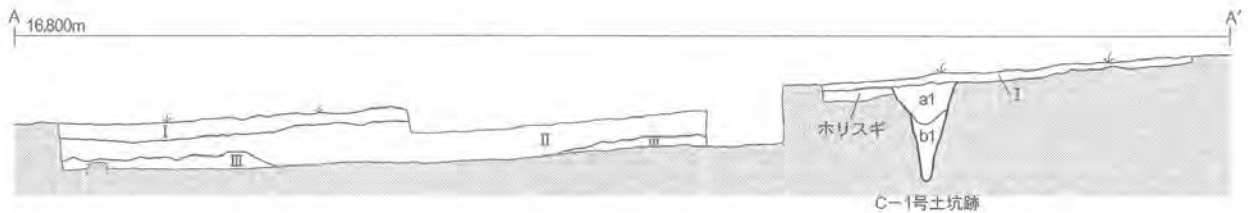
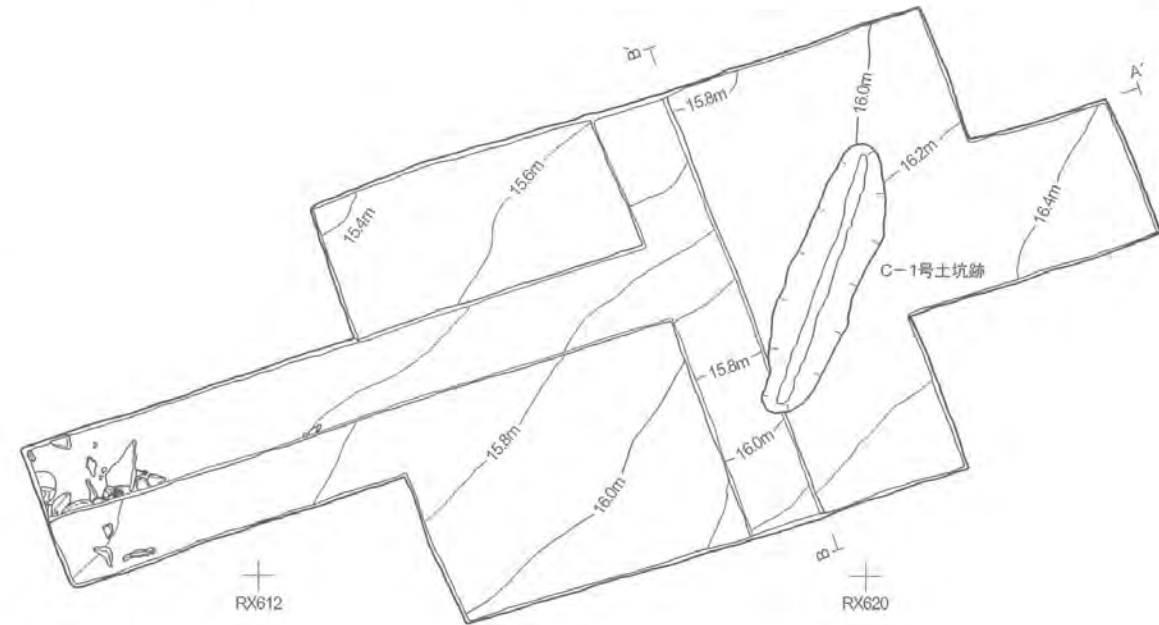


RY1698

RY1702

RX612

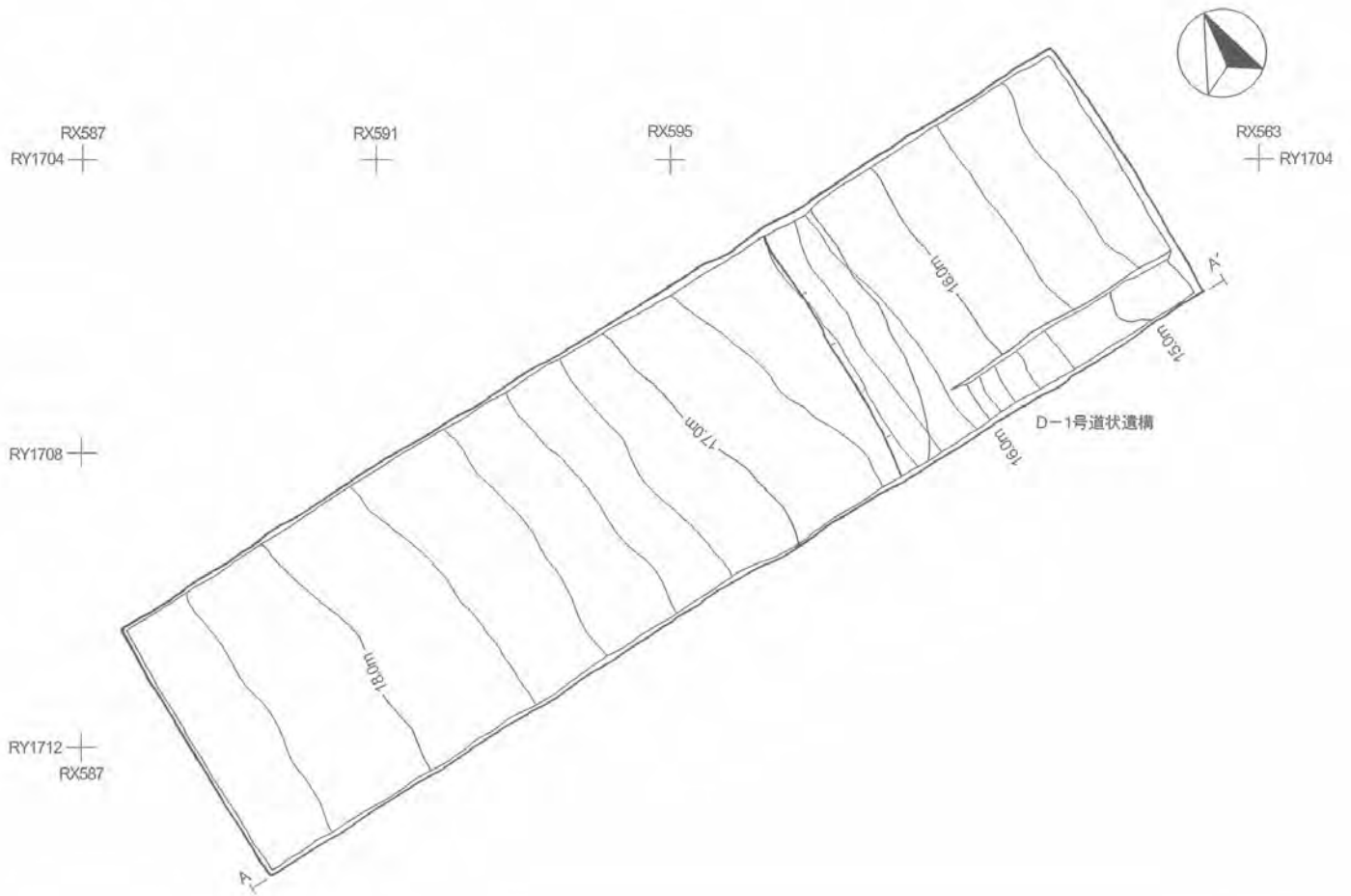
RX620



第170図 C区遺構配置図

C区土層観察表

層名	基本土	混入土	備考
1層	10YR3/3 暗褐 砂壤土	10YR4/4 10% 10YR5/6 3%	軟、疎
2層	10YR2/3 黒褐 埴壤土	10YR3/4 20%	やや固、密 → 土器片
3層漸移層	10YR4/6 褐 埴壤土	10YR4/4 15%	軟、中



第171図 D区全体図

D区土層観察表

層名	基本土	混入土	備考
1層	10YR4/6 褐 砂壤土	10YR4/4 10% 砂壤土	中、中 → 陶磁器、鉄滓など
2層	10YR4/6 褐(明) 砂壤土	10YR4/3 10% 砂壤土	中、疎 → 炭粒多
3層	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR4/4 10% 砂壤土	中、中 → 炭粒少
3b層	10YR3/3 暗褐 砂壤土	10YR4/3 10% 砂壤土	中、中 → 炭微
4層	10YR2/3 黒褐 砂壤土	10YR2/1 10% 砂壤土	軟、疎
5層	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR2/3 15% 砂壤土	中~固、中~密
5b層	10YR3/2 黒褐 砂壤土	10YR2/3 10% 砂壤土	中~固、中 → 炭粒微
6層	10YR2/3 黒褐 砂壤土	10YR4/2 10% 砂壤土	中~固、中~密
7層	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR3/2 10% 砂壤土	中、中~密
8層	10YR5/6 黄褐 砂壤土	10YR3/4 10% 砂壤土	固、疎

5-2. 検出遺構と遺物

(1) 縄文時代

a. 住居跡

B-4号竪穴住居跡 (第172図)

〈検出状況〉 B区中央部の南に位置する。B-1号住居跡に切られる。住居のほぼ半分の検出である。炉跡、柱穴、周溝などは検出しなかったが、形状から住居跡と判断した。

〈形状・規模〉 平面形は円形と推定される。規模は、径2.5m、壁高は、東壁30cm、西壁20cmである。

〈床面〉 平坦である。

〈埋土〉 5層に大別されるが、いずれも締りのある密な層である。上層が暗～黒褐色土、中層が褐色土、下層が灰黄褐～褐色土で構成される。C層から土器片が出土し、D層は炭を多く含む。

出土遺物 (第173図)

1～7は縄文土器である。深鉢の口縁部と体部である。単節斜縄文により施文され、胎土は繊維を含む。

8は敲打磨石である。A面が機能面で、B面は調整磨面である。9～13は剥片石器である。9は石鏃である。基部は平基で、側縁は平側である。平面形は正三角形型である。10～13は石匙である。10、11は縦型で、刃部の末端が尖る。10は両面の全面を、11は両面の周縁部を加工している。12、13は横型である。12は刃部末端は尖らず、片面全面と裏面の周縁が加工される。13は刃部の先端が尖り、両面の周縁が加工されている。

b. 土坑跡

B-5号土坑跡 (第172図)

〈検出状況〉 B区北東、平坦部の際に位置する。地山面から検出する。

〈形状・規模〉 平面形は不整形で、規模は径1.2m、深さ25cmである。

〈床面〉 起伏があり、北側に向かって下がる。

〈埋土〉 3層に大別される。A1層をのぞき締りがあり、密な層である。遺物はA層、とりわけA2層から多く出土した。

出土遺物 (第174図)

1～5は縄文土器で、深鉢の口縁部、体部である。胎土はいずれも繊維を含む。1、2は口唇部を玉縁状に成形し、口縁部はRL単節縄文を2段に横走させ、体部は同縄文を斜走させている。1、2は同一個体と思われる。3は口唇部に縄文の回転圧痕を施されている。4、5は体部で、いずれもLR単節を横走させており、5は補修孔をもつ。6は敲打磨石である。B面が機能面で、A、C面は調整磨面である。

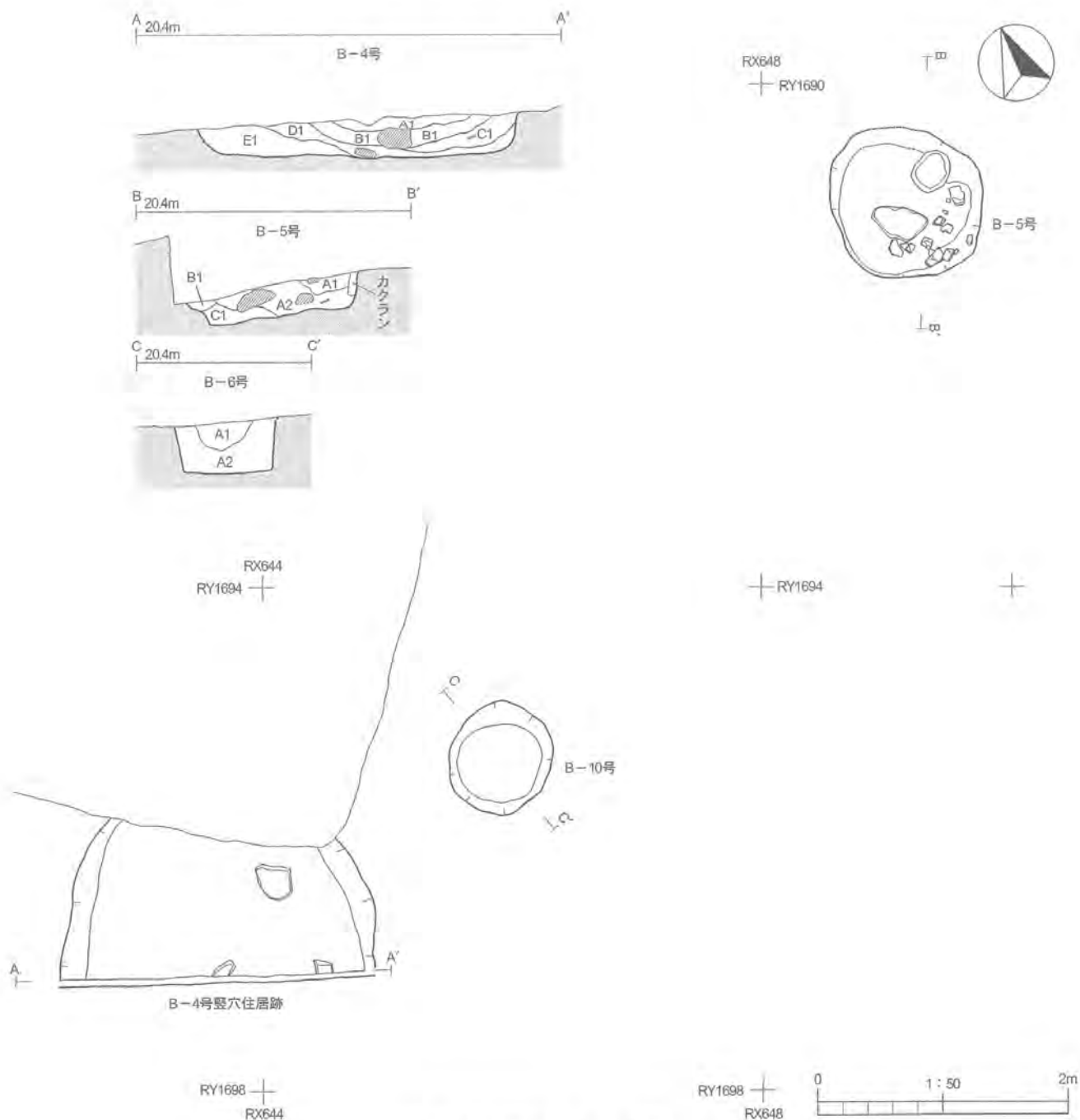
B-6土坑跡 (第172図)

〈位置〉 B区B-4号竪穴住居跡の北東1.5mに位置する。

〈形状・規模〉 平面形は円形で、規模は90cm×80cm、深さ40cmである。床面は平坦である。

〈埋土〉 締りがあり、密な暗～褐色土である。

遺物は出土していないが、埋土層がB-4号住居跡、B-5号土坑と類似しており、縄文時代の土坑と判断した。遺物は出土していない。

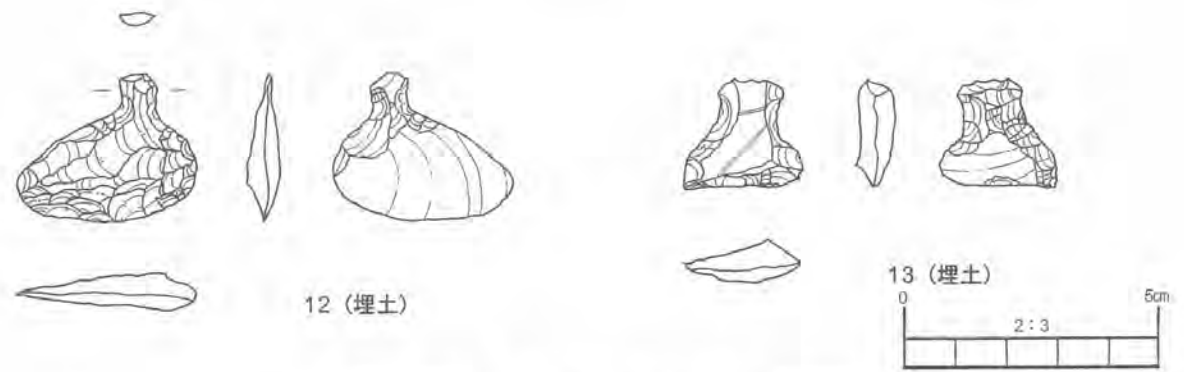
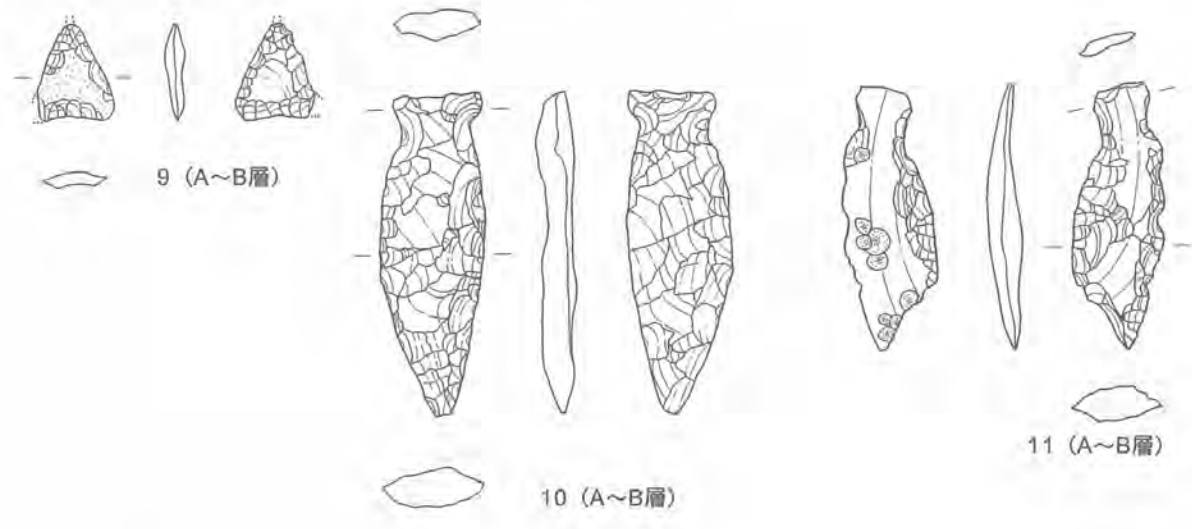
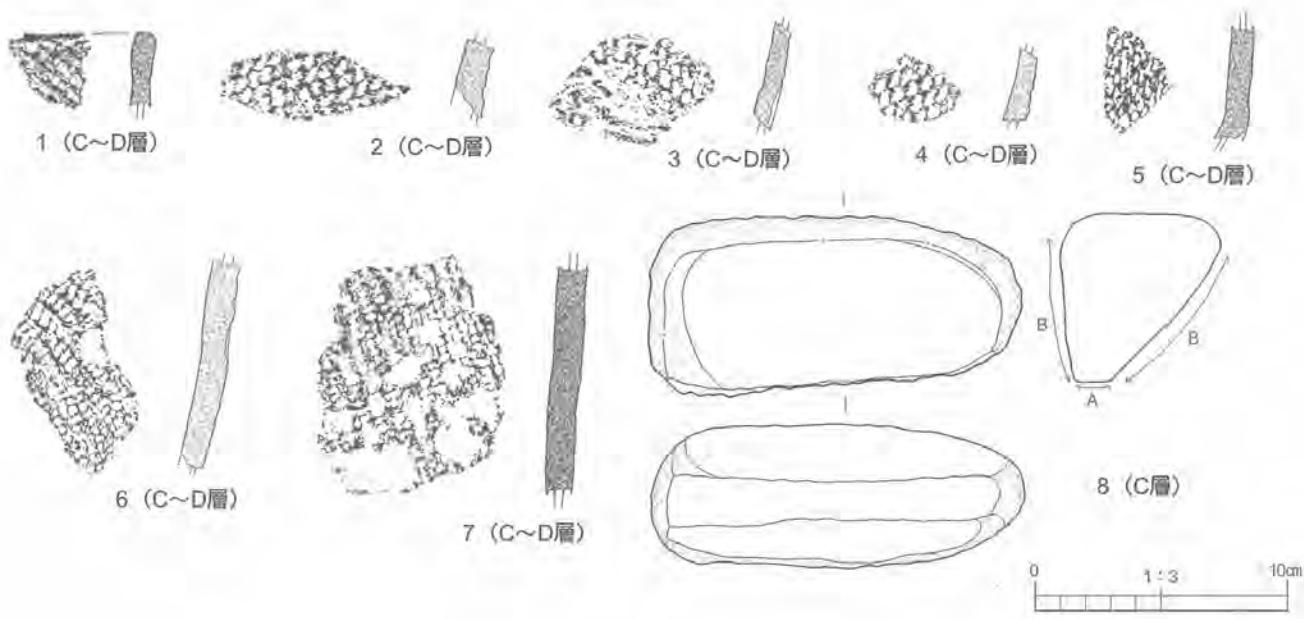


第172図 B-4号竪穴住居跡、B-5号、B-10号土坑跡

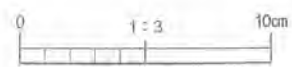
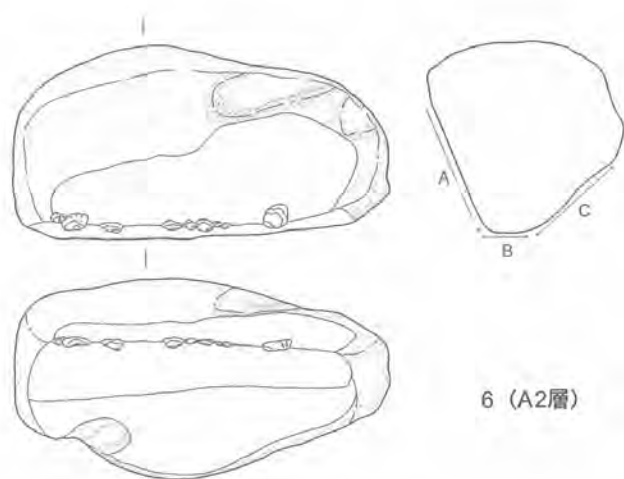
A-1号土坑跡 (第168図)

<検出状況> A区の西の緩斜面に位置する。検出面はIV層上面である。

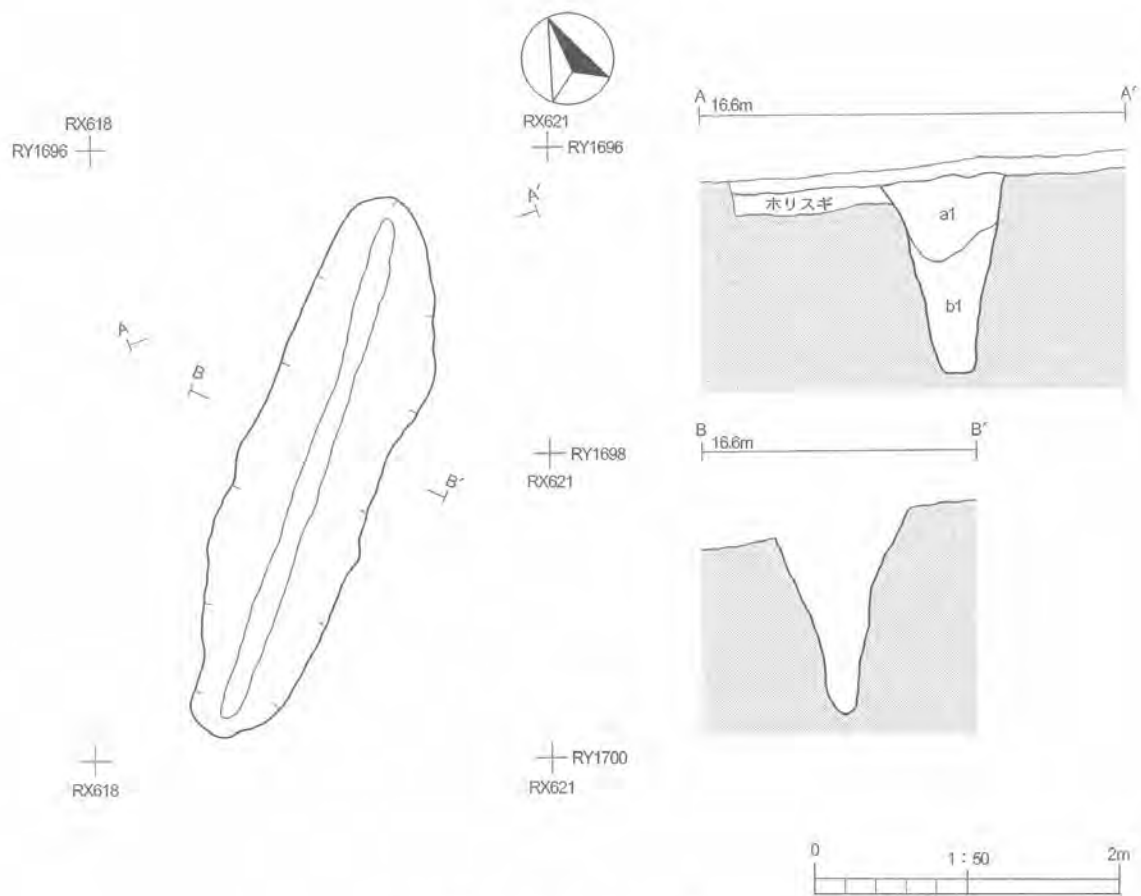
<形状・規模> 形状は溝状に長い、長楕円形である。幅60cm、深さ20cmである。縄文土器片とフレイクが1点ずつ出土している。



第173図 B-4号竖穴住居跡出土遺物



第174图 B-5号土坑迹出土遗物



第175図 C-1号陥穴状土坑跡

c. 陥穴状土坑跡

C-1号陥穴状土坑跡 (第175図)

<検出状況> C区東、緩斜面に位置する。前述したようにB区の尾根から一段降りたところに緩斜面が形成され、緩斜面は沢にむかって傾斜している。土坑はその緩斜面上に等高線に沿って掘り込まれている。検出面はⅡ層上面である。

<形状・規模> 平面形は長円形で、断面はV字状に掘り込まれる。規模は長軸3.7m、短軸0.9m、深さ1.2mである。

<埋土> A層はⅠ層の耕作土層が混じる暗褐色土で、土師器、陶磁器の小片を含む。B層はやや締りのある黄褐色土で、遺物は出土していない。

B-4号住居跡土層観察表

層名	基本土	混入土	備考
I表土			
A1	10YR3/3 暗褐 埴壤土	10YR2/3 3% 埴壤土	固、中～密
B1	10YR3/2 黒褐 埴壤土	10YR2/3 10% 埴壤土 10YR5/6 5% 埴壤土	固、密 → 炭粒多
C1	10YR4/4 褐 埴壤土	10YR5/6 10% 埴壤土	固、密 → 土器片、炭粒少
D1	10YR4/2 灰黄褐 埴壤土	10YR4/4 10% 埴壤土 10YR5/6 5% 埴壤土	固、密 → 炭粒多
E1	10YR4/4 褐 埴壤土	10YR5/6 10% 埴壤土 10YR3/4 10% 埴壤土	固、密 → 炭粒微

B-5号土坑跡土層観察表

層名	基本土	混入土	備考
a1	10YR3/4 暗褐 埴壤土	10YR4/3 10% 埴壤土	軟、中 → 円礫
a2	10YR3/3 暗褐 埴壤土	10YR3/4 10% 埴壤土	中～固、中～密 → 縄文多
b1	10YR4/3 にぶい黄褐 埴壤土	10YR4/4 10% 埴壤土	中～固、中～密
c1	10YR4/6 褐 埴壤土	10YR4/4 10% 埴壤土	固、密 → 炭微

B-6号土坑跡土層観察表

層名	基本土	混入土	備考
a1	10YR3/3 暗褐 埴壤土	10YR4/6 15% 埴壤土 10YR5/8 5% 埴壤土	中、中 → 炭微
a2	10YR4/4 褐 埴壤土	10YR3/3 15% 埴壤土	中、中

C-1号陥穴状土坑跡土層観察表

層名	基本土	混入土	備考
a1	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR2/3 15% 砂壤土 10YR5/6 5% 砂質埴土	軟、疎
b1	10YR5/6 黄褐 砂壤土	10YR3/4 20% 埴壤土	中、中

(2) 平安時代

a. 住居跡、製鉄遺構

B-1号竪穴住居跡 (第176図)

<検出状況> B区の中央に位置する。B-4号竪穴住居跡を切る。

<形状・規模> 平面形は隅丸の正方形である。規模は3.5m×3.3m、壁高は東側で30cm、西側で15cmである。

<埋土> 4層に大別される。A1、B1層は竪穴全体に堆積し、C層は竪穴の南側に堆積する。D層は床面全体を覆っている。

<柱穴> 床面の周縁部で11基の小土坑を検出している。柱あたりが確認できたのはP1、P7である。

(cm)

PIT	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11
径	25	15	30	10	25	20	20	40	10	18	20
深	10	5	20	5	8	15	10	15	5	6	5

<床面> 平坦である。周溝、貼床は検出していない。

<カマド> (第177図) 北側と西側の壁の中央部で検出している。南側のカマド(カマドI)の焚口には石組みと焼土が残存しているが、西側のカマド(カマドII)には焼土のみが残る。カマドIIは旧カマドである。

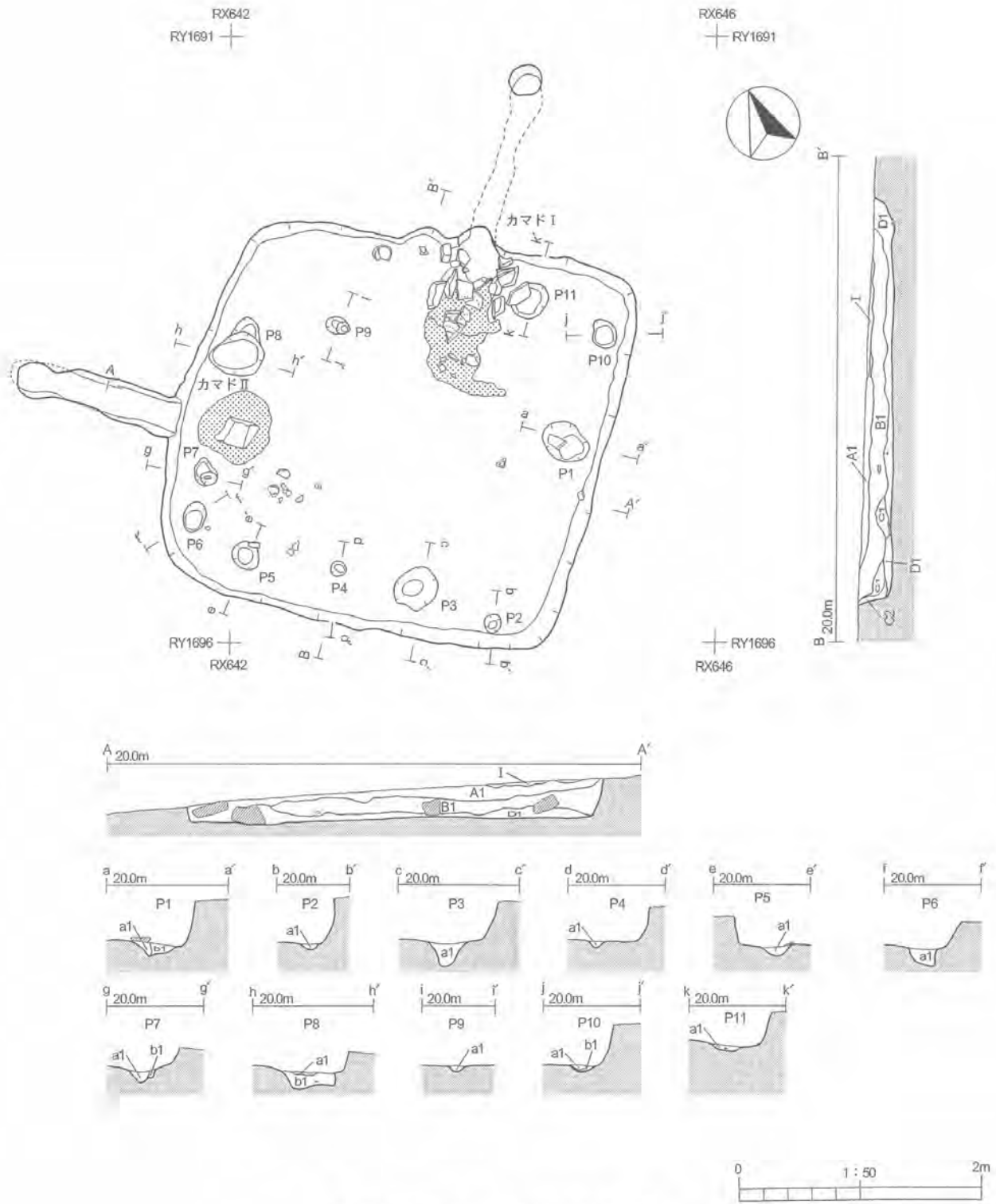
カマドI— くり貫き式である。火床部は掘り窪められ、袖石を埋設して据えている。煙道は煙出しにむかって下降して掘られ、煙出しはやや外傾して立上がる。規模は、火床部が50cm×40cm、煙道の径は20cm、煙出しの径は20cmである。K1層が固く焼き締った焼土層、K2層は袖石の埋土層、K3、4層は煙出し、煙道の埋土層である。

カマドII— くり貫き式である。火床部は掘り窪められている。袖石を埋設した跡が検出している。煙道は煙出しにむかって下降して掘られ、煙出しは垂直に立上がる。規模は、火床部が50cm×50cm、煙道の径は約20cm、煙出しの径は30cmである。K1層は地山ではなく、やや締った褐色土層である。K2、3層は煙出し、煙道の埋土である。K5層が固く焼き締った焼土層で、K6層は袖石埋設穴の埋土である。

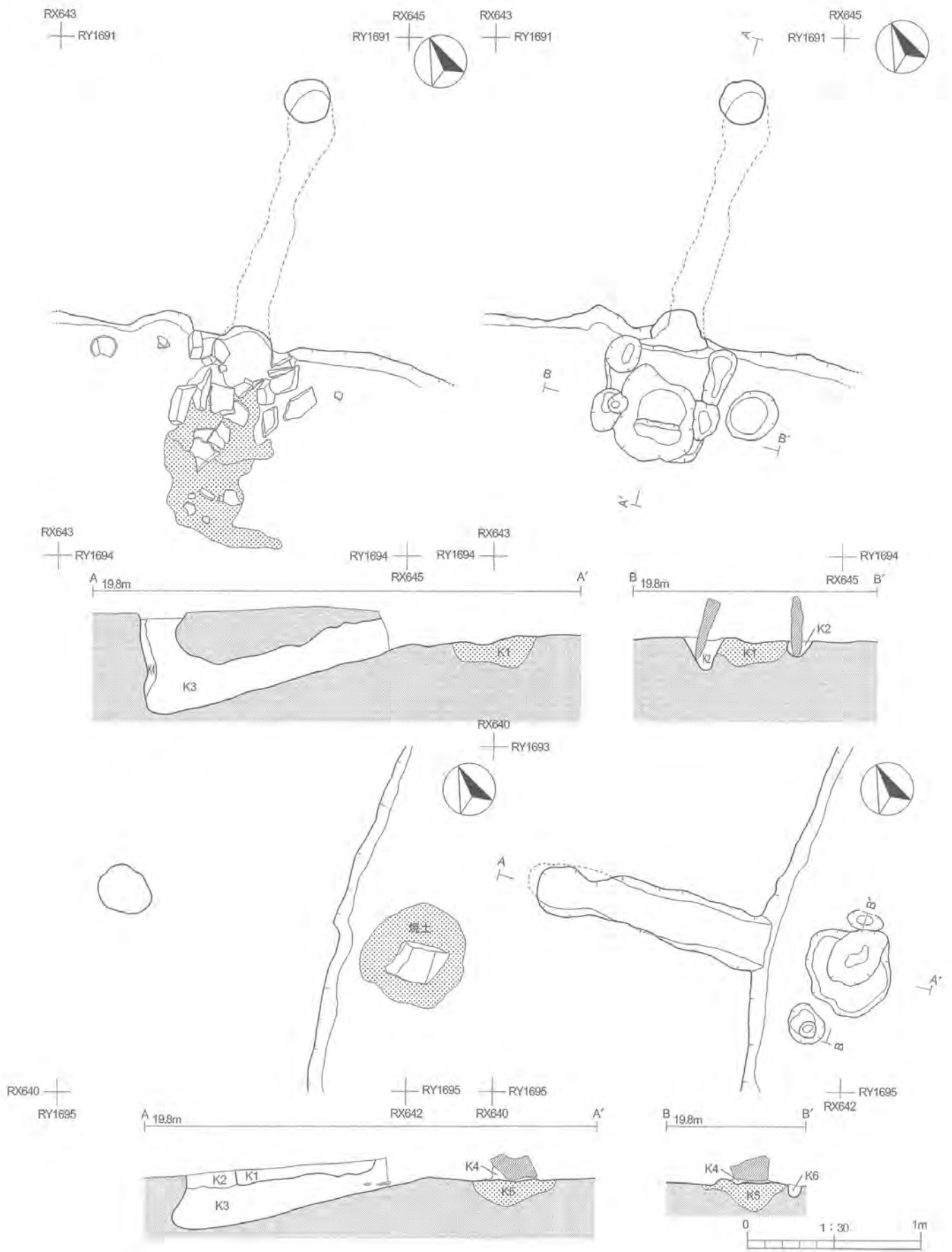
出土遺物 (第178~180図)

1~14は土師器である。1~3はロクロ使用の坏で、いずれも黒色処理されている。1は底面は回転糸切りで、底部からふくらみをもって立上がり口縁部は外反する。2も底面は回転糸切りであるが、底部がわずかに張出す。底部からふくらみをもって立上がる。3は口縁部がわずかに内反する。4~9は甕の口縁部である。8を除いて口縁部は短い。4~6、9はふくらみをもって外反しながら立上がり、8は直線的に立上がる。最大径を胴部にもつもの(4、5、8、9)と口縁部にもつもの(6、7)に分れる。8が球胴甕、その他は長胴甕と思われる。10~14は底部である。10は底面に木葉痕をもち、底部の張出しは弱い。長胴甕である。11は底面に木葉痕をもち、底部は明瞭に張出す。12、13は張出しをもたない。14は明瞭な張出しをもち、底部から大きなふくらみをもって立上がる。

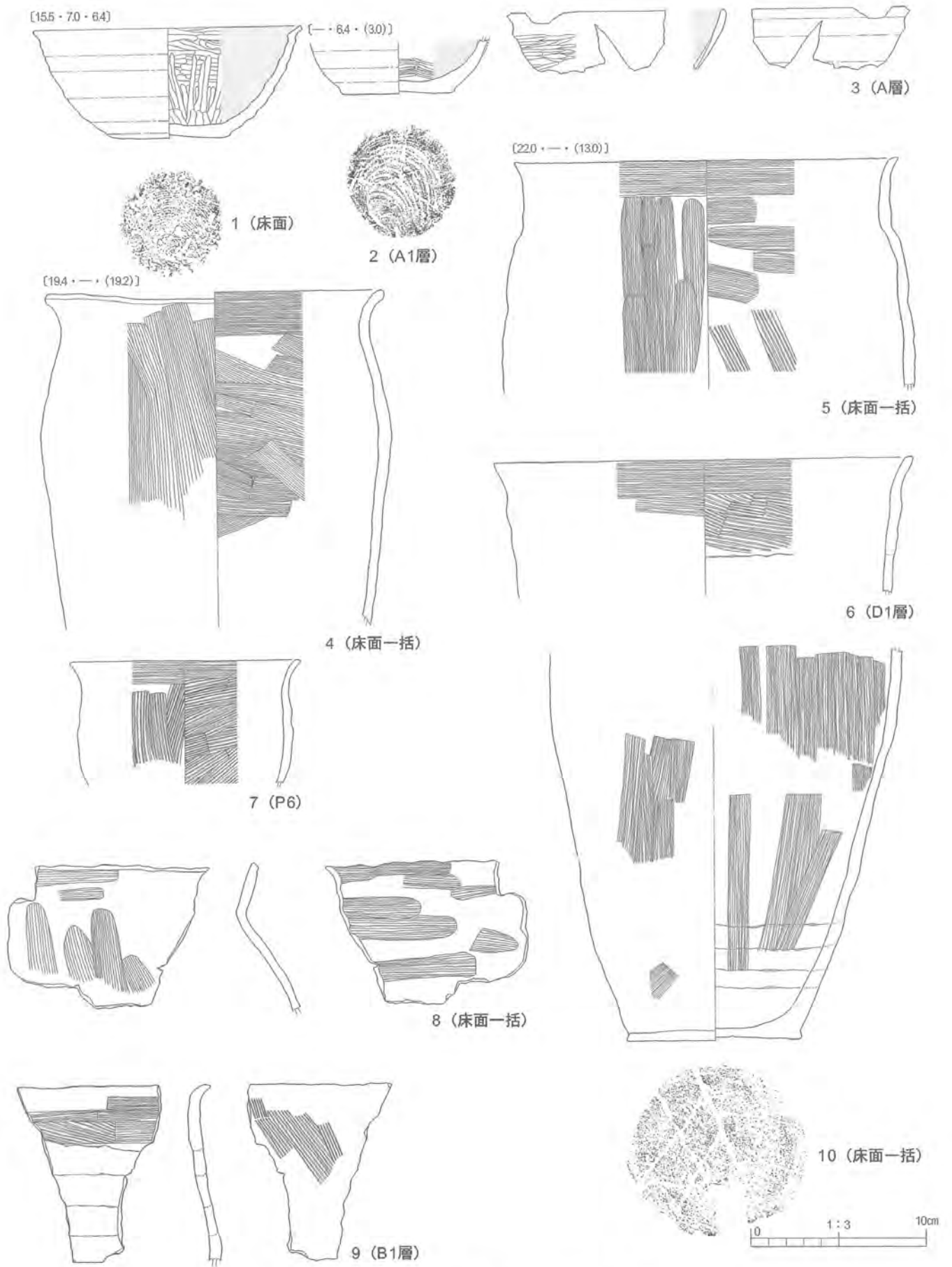
15~17は石器である。15は砥石である。機能面はA、Bの二面である。16は石鏃である。平



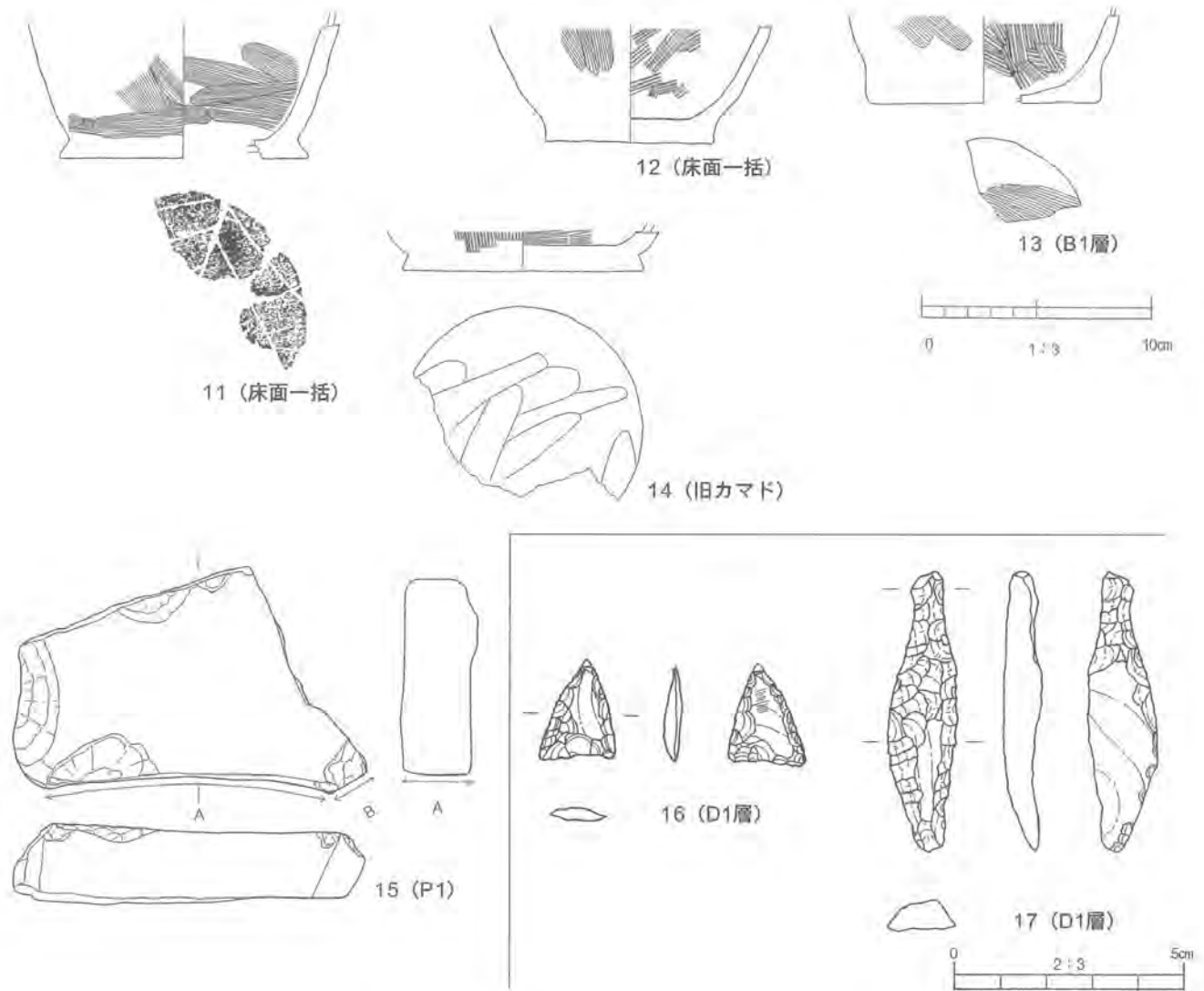
第176図 B-1号竖穴住居跡



第177図 B-1号竪穴住居跡カマドI、II



第178図 B-1号竖穴住居跡出土遺物(1)

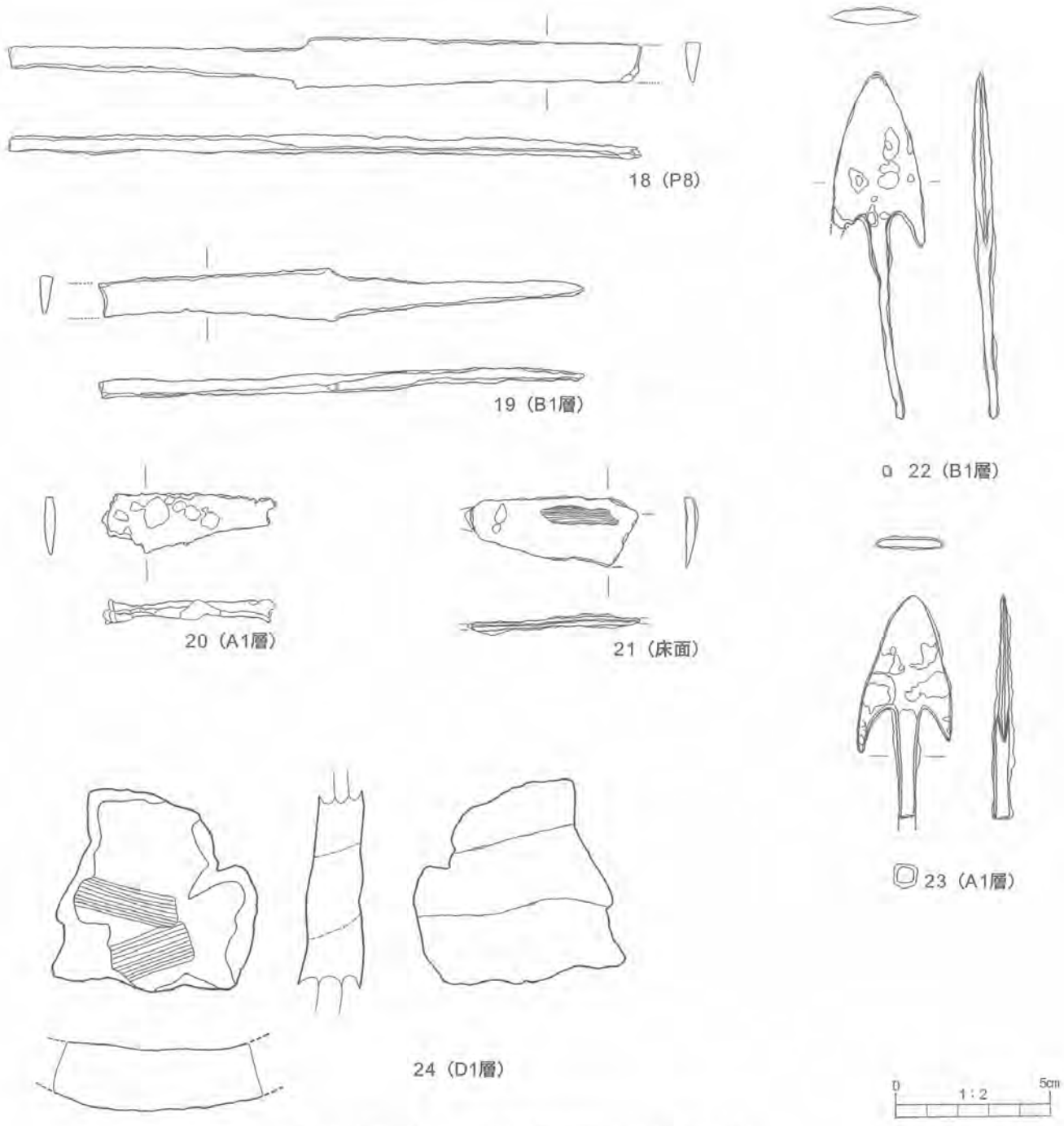


第179図 B-1号竖穴住居跡出土遺物(2)

基で、側縁は平側、二等辺三角形型である。17は石匙である。縦型で、刃部の末端は尖り、両面の周縁部が加工されている。

18～23は鉄製品である。18、19は刀子の刃部と茎である。18は長さ20.4cm、^{まち}区の幅は1.6cmある。19は長さ15.7cm、区の幅は1.7cmである。20は刀子の区で、21は刀子の刃部である。22、23は鉄鎌である。22は逆刺を一部欠損しているがほぼ完形と思われる。長さ11.2cm、幅3cmである。23も22と同形の鉄鎌である。長さ7.1cm、幅3cmである。

24は土製品である。曲面をつけて成形しており筒状の製品と思われる。同じ土製品が赤前IV八枚田遺跡の製鉄炉跡から出土している。



第180図 B-1号竖穴住居跡出土遺物(3)

B-1号住居跡土層観察表

層名	基本土	混入土	備考
A1	10YR2/2 黒褐 砂壤土	10YR4/2 10% 砂壤土 10YR5/6 2% 砂壤土	中、中 → 土師、鉄製品など
B1	10YR2/1 黒 砂壤土	10YR5/6 20% 砂壤土 10YR6/6 5% 砂壤土	中、中
C1	10YR1.7/1 黒 砂壤土	10YR3/2 10% 砂壤土	軟、疎
C2	10YR4/3 にぶい黄褐 砂壤土	10YR5/6 10% 砂壤土	軟、疎
D1	10YR3/2 暗褐 砂壤土	10YR4/4 10% 砂壤土 10YR2/1 10% 砂壤土	中、疎 → 灰、鉄製品

B-1号住居跡柱穴土層観察表

層名	基本土	混入土	備考
P1 a1	10YR3/3 暗褐 砂壤土	10YR5/6 5% 砂壤土	固、密
# b1	10YR5/6 黄褐 砂壤土	10YR5/4 20% 砂壤土	中、中
P2 a1	10YR3/3 暗褐 砂壤土	10YR4/6 15% 砂壤土	軟、疎
P3 a1	10YR2/2 黒褐 砂壤土	10YR3/4 10% 砂壤土	軟、疎 → 炭少
P4 a1	10YR3/3 暗褐 砂壤土	10YR5/6 10% 砂壤土	中～固、疎
P5 a1	10YR2/2 黒褐 砂壤土	10YR2/2 5% 砂壤土	中、中 → 土師片
P6 a1	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR5/6 20% 砂壤土	中～固、中 → 土師片
P7 a1	10YR2/3 黒褐 砂壤土	10YR5/6 5% 砂壤土	軟、中
# b1	10YR4/3 褐 砂壤土	10YR5/6 10% 砂壤土	中～固、中
P8 a1	10YR2/3 黒褐 砂壤土	10YR5/6 10% 砂壤土	軟、疎
# b1	10YR4/3 褐 砂壤土	10YR5/6 15% 砂壤土	中、中 → 刀子
P9 a1	10YR4/3 褐 砂壤土	10YR3/2 10% 砂壤土	中～固、中 → 炭少
P10 a1	10YR3/2 黒褐 砂壤土	10YR6/4 5% 砂壤土	中～固、炭少
# b1	10YR4/4 褐 砂壤土	10YR3/3 10% 砂壤土	中～固、中～密 → 炭微
P11 a1	10YR4/4 褐 砂壤土	10YR3/4 15% 砂壤土	中、中 → 土器片
		5YR6/4 5% 砂壤土	

B-1号住居跡カマドⅠ土層観察表

層名	基本土	混入土	備考
K1	5YR5/8 明赤褐 砂壤土	5YR4/8 15% 砂壤土	固、密
K2	10YR2/3 黒褐 砂壤土	10YR4/6 15% 砂壤土	中、疎 → 袖石埋土
K3	10YR2/2 黒褐 砂壤土	10YR3/3 10% 砂壤土	軟、疎
		10YR4/6 10% 砂壤土	
K4	10YR4/4 褐 砂壤土	10YR3/4 5% 砂壤土	中、疎

B-1号住居跡カマドⅡ土層観察表

層名	基本土	混入土	備考
K1	10YR4/6 褐 砂壤土	10YR3/3 15% 砂壤土	中、中
		10YR5/6 10% 砂壤土	
K2	10YR3/3 暗褐 砂壤土	10YR4/4 10% 砂壤土	中、疎
		7.5YR2/3 3% 砂壤土	
K3	10YR5/4 にぶい黄褐 砂壤土	10YR3/4 30% 砂壤土	中、疎 → 土師片
		10YR4/4 10% 砂壤土	
K4	10YR4/4 褐 砂壤土	7.5YR4/3 15% 砂壤土	小、中
		10YR3/4 10% 砂壤土	
K5	5YR4/8 明赤褐 砂壤土	5YR4/6 15% 砂壤土	固、密
K6	10YR2/3 黒褐 砂壤土	7.5YR3/2 10% 砂壤土	軟、疎

B-2号竪穴住居跡（第181図）

〈検出状況〉 B区の西に位置する。尾根の緩斜面を掘り込んで構築されている。検出面は地山面である。住居のおよそ半分の検出である。東の壁にカマドが設けられ、床面から鍛冶炉が出土している。貼床が検出されたが、周溝は出土していない。

〈形状・規模〉 平面形は隅丸方形である。規模は東西で4.5m、壁高は東壁50cm、西壁30cmである。

〈埋土〉 4層に大別される。A層は締りのない黒褐色土で、自然堆積層である。B層は焼土塊などを含む明黄褐色の固い粘土層で、人為的に投棄されたものである。C、D層は締りのない暗褐色土を主体とした自然堆積層である。

〈柱穴〉 床面から6基の土坑が検出しているが、P6をのぞきいずれも小土坑で柱痕は確認されていない。

(cm)

PIT	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 7	P 10	P 6
径	25	25	15	30	15	18	25	80×75
深	5	9	5	5	7	5	5	22

〈貼床〉 南側と西側の床面で検出している。いずれも床面の西と南に位置する不定形の土坑跡を埋めて施されている。南の土坑の場合は粘土層（b1）を貼っているが、西の土坑では粘土層は確認できなかったが、形状、埋土から判断した。

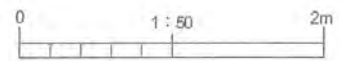
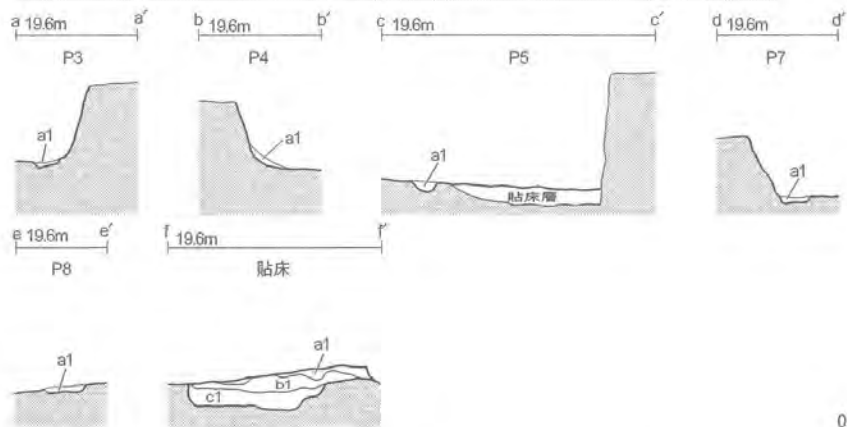
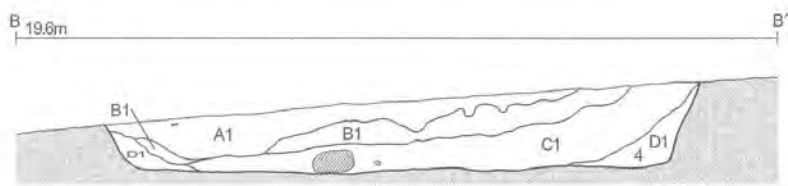
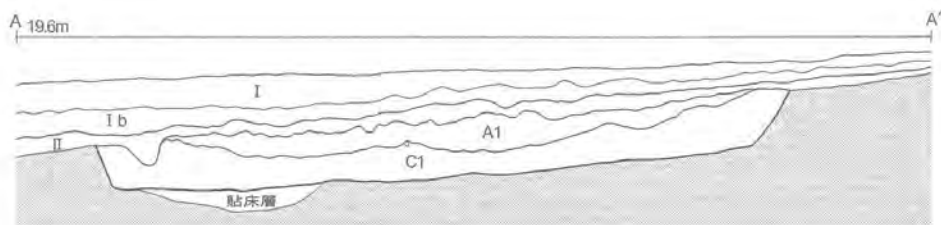
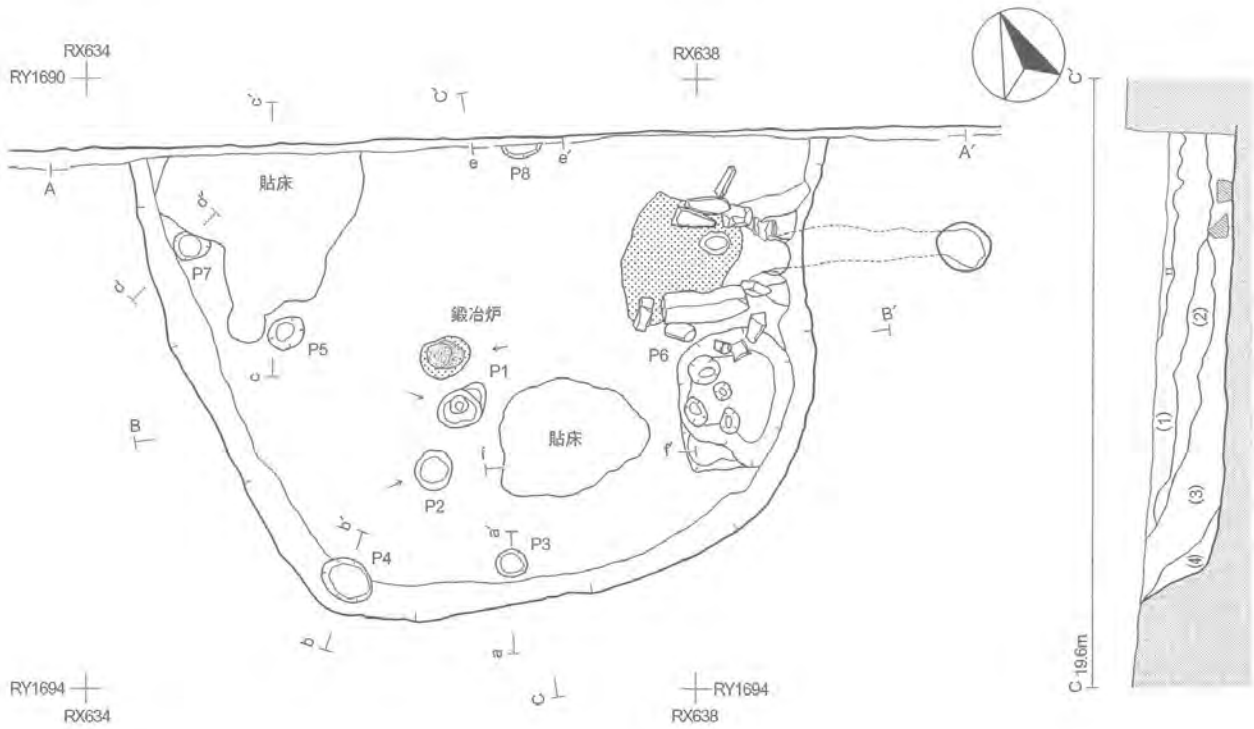
〈カマド〉（第182図） 東壁の南寄りに位置する。くり貫き式である。火床部は、掘り窪めて、袖石を埋設して据えている。煙道は煙出しにむかって水平に掘り込まれ、煙出しはほぼ垂直に立上がる。規模は、火床部が、70cm×55cm、煙道は径が20cm～30cm、煙出し径は30cmである。K2層が固く焼き締った焼土層で、層厚は約10cmである。K5層は締りのある褐色土で、袖石の埋設土である。

鍛冶炉（第182図） カマドから西に約1mの所に位置する。平面形は楕円形で、規模は32cm×25cm、深さ6cmである。埋土は3層で構成される。K1層は炭を多く含むやや締りのない黒褐色土で、鍛造剥片が出土している。K2層は固く焼けた灰色層が層状に混じる還元焰焼成層、K3は固く焼き締った酸化焰焼成層である。炉は掘り方をもち、全体に粘土を貼りつけて炉を作っている。また南隣のP1の埋土からも鍛造剥片が出土している。

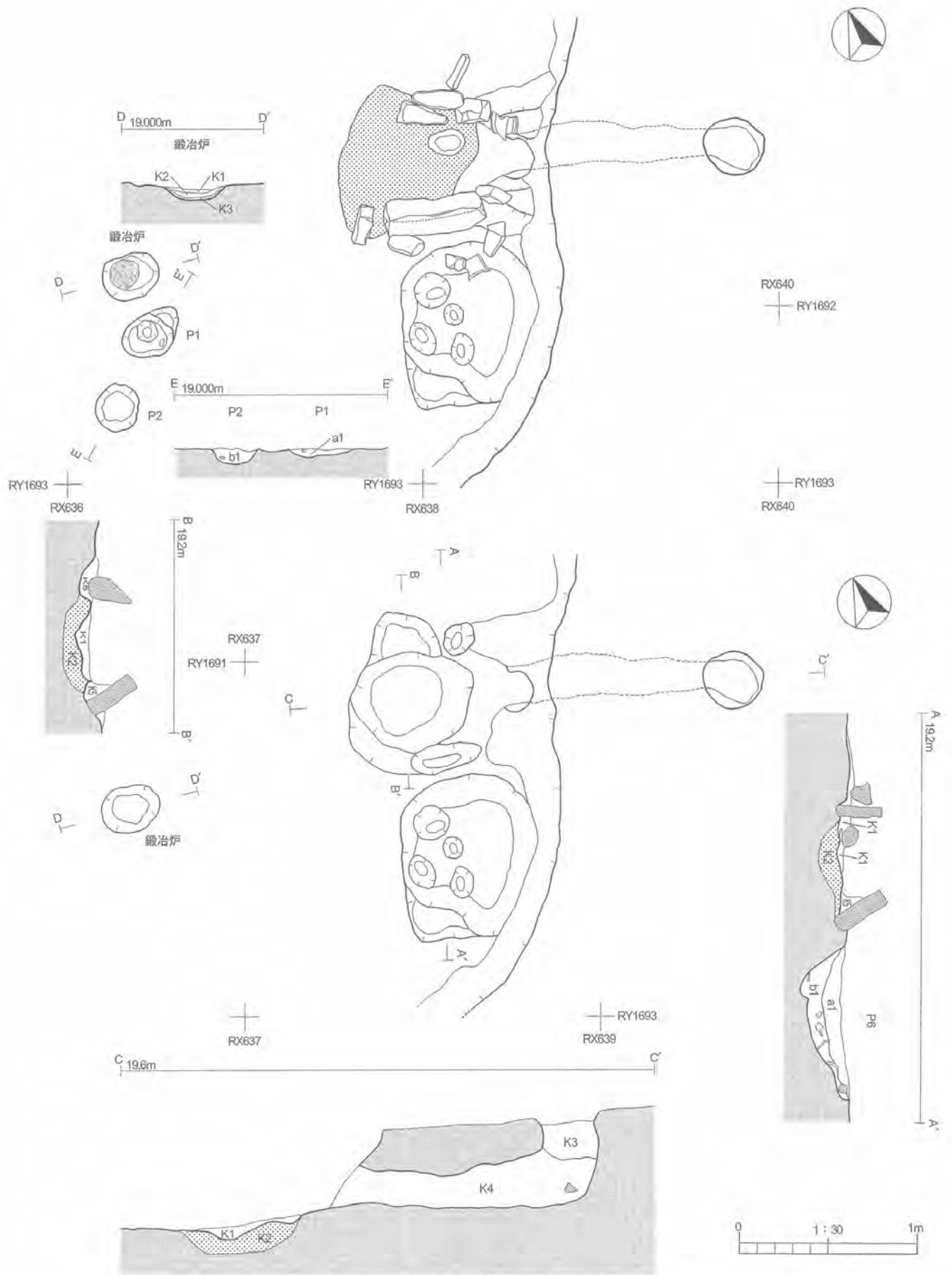
〈土坑P6〉 カマドの南に位置する比較的大きな土坑である。平面形は不整円形で、規模は90cm×75cm、深さ20cmである。底面にはさらに小土坑が掘られている。埋土は明瞭に2層に分れる。a1層は暗褐色土、b1層はにぶい赤褐色土で、多くの土器片のほかに粘土塊なども含む。

出土遺物（第183～184図）

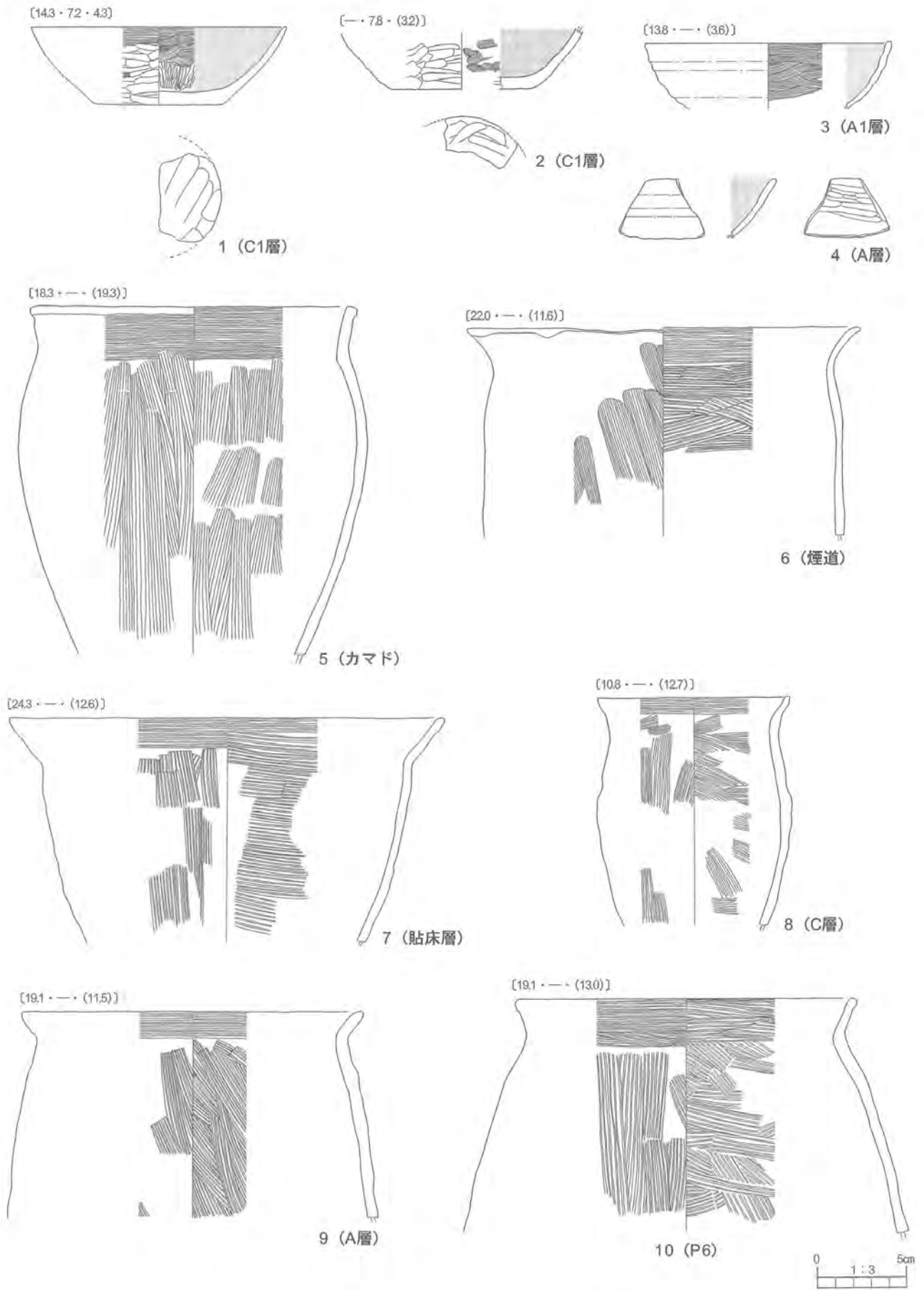
1～16は土師器である。1～4は坏である。いずれも黒色処理を施されている。1、2は平底で、1は底部からわずかに内湾しながら立上がり、2は直線的に立上がる。3、4はロクロ使用の坏である。いずれもやや内湾しながら立上がる。



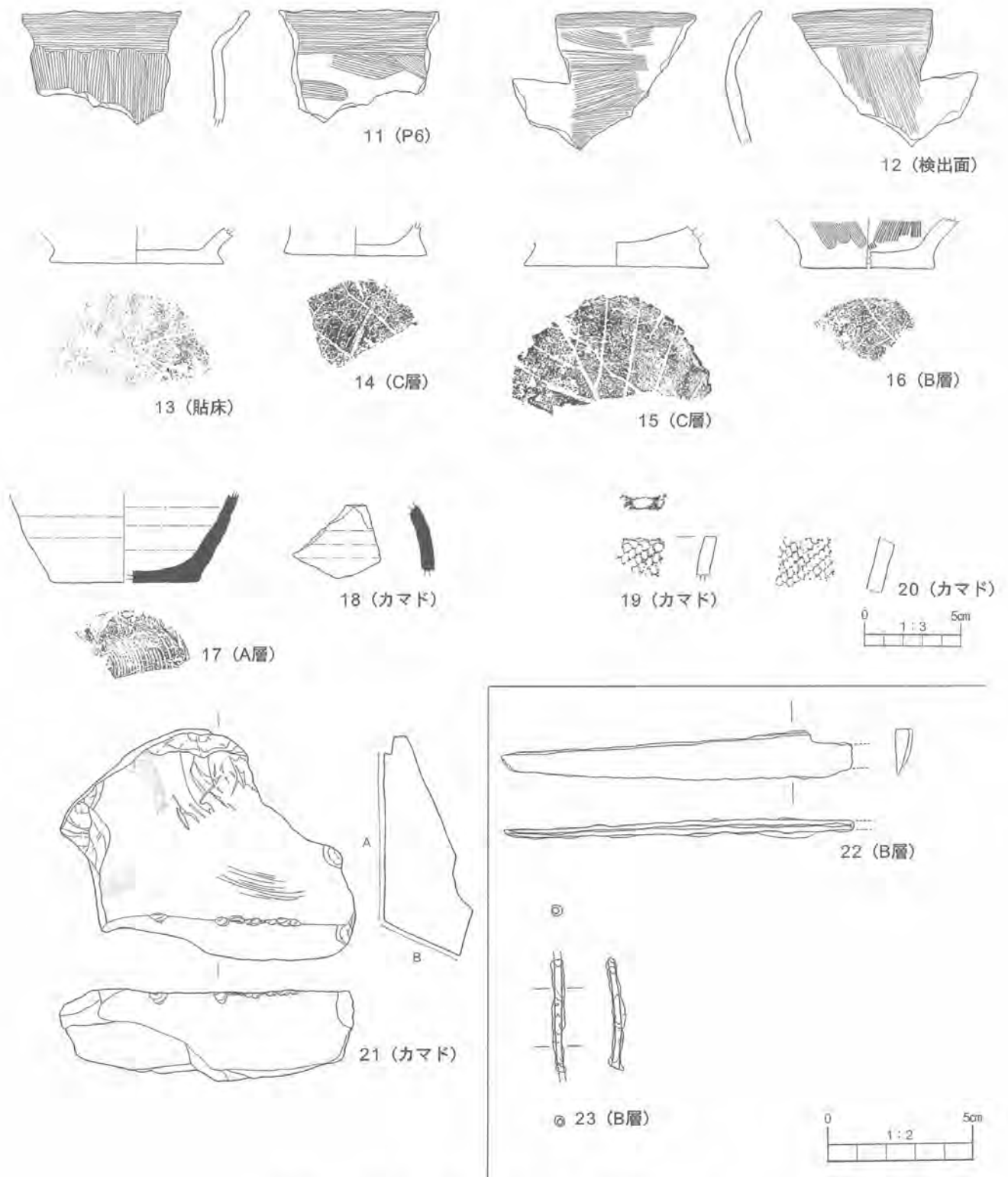
第181图 B-2号竖穴住居跡



第182図 B-2号竖穴住居跡カマド、鍛冶炉



第183図 B-2号竖穴住居跡出土遺物(1)



第184図 B-2号竖穴住居跡出土遺物(2)

5~16は甕である。5は最大径を体部にもつ長胴甕である。口縁部は直線的に立上がり、わずかに外反する。6は最大径を口縁部にもつ長胴甕である。口縁部は膨らみをもって外反する。7も最大径を口縁部にもつが、胴部は底部にかけて急にすぼまる。口縁部は直線的に立上がり、外反する。8は小形の甕で、口縁部と胴部の径がほぼ同じの長胴甕である。9、10は胴部は強

く張出し、口縁部は短く、直線的に立上がり、外反する。11は胴部の張出しの弱く、口縁部は内湾しながら立上り、7と同一タイプと思われる。12の口縁部は外反して直線的に立上がっている。最大径を口縁部にもつと思われる。13～16は底部である。いずれも底面に木葉痕をもつ。13～15は明瞭な張出しをもつが、16の張出しは弱い。

17、18は須恵器である。17は甕の底部か。底部は回転系切りしたあとで、周縁部をケズリ調整している。胎土は灰色で、焼成良好である。18は体部片で外面をケズリ調整されている。

19、20は縄文土器である。外反する深鉢土器の口縁部と体部である。口唇部に楕円の押圧痕を施し、地文はLR単節を横走させる。

21は砥石である。A、Bの2面を機能面とし、A面には擦痕を残す。

22、23は鉄製品である。22は刀子の刃部と茎の一部である。刃渡り約11cm、区の幅は1.5cmである。23は丸い棒状の製品で、径は2mmである。

B-2号住居跡土層観察表

層名	基本土	混入土	備考
I	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR4/4 10% 砂壤土	中、中 → 土師、陶磁器など
I b	10YR3/3 暗褐 砂壤土	10YR4/3 10% 砂壤土	中、中 → 土師、陶磁器など
II	10YR2/3 黒褐 砂壤土	10YR2/2 10% 砂壤土	中～軟、中 → 土師、鉄滓など
1層	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR5/6 10% 砂壤土	軟、中 → 土師、焼土、炭
2層(黄粘土層)	10YR6/6 明黄褐 砂壤土	10YR3/4 15% 砂壤土	固～軟、密 → 焼土塊多
3層	10YR2/3 黒褐 砂壤土	10YR3/4 10% 砂壤土	軟、中 → 坏など
4層	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR4/6 20% 砂壤土	軟、疎 → 土師片など

B-2号住居跡柱穴土層観察表

層名	基本土	混入土	備考
P1 a1	10YR2/3 黒褐 砂壤土	10YR2/1 15% 砂壤土	中～固、中 → 17-17焼土、粘土少
P2 b1	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR4/6 5% 砂壤土	中～固、密 → 炭多、土器片
P3 a1	10YR4/3 にぶい黄褐 砂壤土	10YR5/6 10% 砂壤土	中、中 → 炭少
P4 a1	10YR4/4 褐 砂壤土	10YR5/6 3% 砂壤土	軟、疎 → 炭少
P5 a1	10YR3/3 暗褐 砂壤土	10YR4/6 15% 砂壤土	中、中 → 土器片
P6 a1	10YR3/3 暗褐 砂壤土	10YR4/4 15% 砂壤土	軟、中 → 土器片
" b1	10YR4/3 にぶい黄褐 砂壤土	10YR5/6 10% 砂壤土	軟、中～疎 → 粘土、土器片多
P7 a1	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR2/2 10% 砂壤土	中、疎
P8 a1	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR5/6 10% 砂壤土	中、中
P9 a1	10YR2/3 黒褐 砂壤土	10YR5/6 15% 砂壤土	中～固、中～密 → 炭少
P10 a1	10YR2/3 黒褐 砂壤土	10YR5/6 15% 砂壤土	軟、疎
P11 a1	10YR2/3 黒褐 砂壤土	10YR5/8 20% 砂壤土	固、密 → 焼土塊多 → 粘床層
" b1	10YR5/8 黄褐 砂壤土	10YR3/3 20% 砂壤土	固、密 → 粘床層
" c1	10YR2/3 黒褐 砂壤土	10YR5/8 15% 砂壤土	中、中～密 → 炭少?1

B-2号住居跡カマド土層観察表

層名	基本土	混入土	備考
K1	7.5YR4/3 褐 砂壤土	5YR4/4 15% 砂壤土	中、密
K2	2.5YR4/6 赤褐 砂壤土	2.5YR4/4 10% 砂壤土	固、密
K3	10YR4/6 褐 砂壤土	10YR3/4 10% 砂壤土	中、中
K4	10YR2/3 黒褐 埴壤土	10YR4/4 15% 埴壤土	軟、疎 → 土師製片
K5	7.5YR4/4 褐 砂壤土	5YR4/4 10% 砂壤土	中～固、中～密

B-2号住居跡鍛冶炉土層観察表

層名	基本土	混入土	備考
K1	10YR2/3 黒褐 砂質埴土	10YR2/1 15% 砂質埴土	中、中 → 炭多、スケール?
K2	10YR2/1 黒 砂質埴土	5Y5/2 15% 砂質埴土	固、密 → 還元焼成
K3	5YR4/4 にぶい赤褐 砂質埴土	7.5YR5/6 10% 砂質埴土	固、密 → 酸化焼成

B-3号製鉄遺構 (第185図)

〈検出状況〉 B区の東に位置する。竪穴は尾根の平坦面の際に築かれている。製鉄炉と竪穴で構成される。検出当初廃棄された竪穴住居あとを利用して炉を構築したものと考えたが、埋土状況に時間差が認められなかった。竪穴を伴った製鉄炉跡と判断した。竪穴の西側と南北の壁の一部を検出したが、東側の壁は確認できなかった。製鉄炉は、竪穴の南側に位置し、壁を一部壊して築いている。周溝が西側と北側で検出している。カマド、貼床は検出していない。

〈形状・規模〉 竪穴の平面形は隅丸方形である。規模は南北4.1m、東西は最大幅で3.0mである。壁高は南と西で20cmである。

〈埋土〉 A、B層ともに締りがなく、粗い堆積層であるが、とりわけB層は焼土、炭を多く含む。

〈柱穴〉 床面から5基の小土坑が検出したが、柱あたりが確認できたのはP 3、P 4である。

(cm)

PIT	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
径	17	15	20	30	20	13	12
深	7	10	10	40	5	8	12

〈床面・周溝〉 床面は平坦である。周溝の規模は、幅約10cm、深さ4～8cmである。

製鉄炉跡 (第186図)

〈検出状況〉 南壁の中央部に位置する。炉の東西に石が配置され(西の石は地山に含まれる石である)、周辺には鉄滓、羽口片を含んだ焼土塊、炭などが広がっていた。炉の焼土面とか下部構造などは確認できなかったが、形状、遺物などから製鉄炉と判断した。

〈形状・規模〉 炉は壁と直交して掘り込まれている。平面形態は、下膨れの方形で、南側が隅丸方形、北側が円形である。底面は北側は平坦であるが、南側は小土坑が掘り込まれている(攪乱?)。規模は1.5m×60cm、深さは20cm～30cmである。

〈埋土〉 炉の埋土はいずれも締りがなく、粗い土層で、鉄滓、羽口、粘土塊、焼土塊などを多く含んでいる。埋土から少量の鍛造剥片が出土しているが、前述したB-2号住居の鍛冶炉ほどの密度ではない。また周辺に広がる炭塊からも少量の鍛造剥片が出土している。

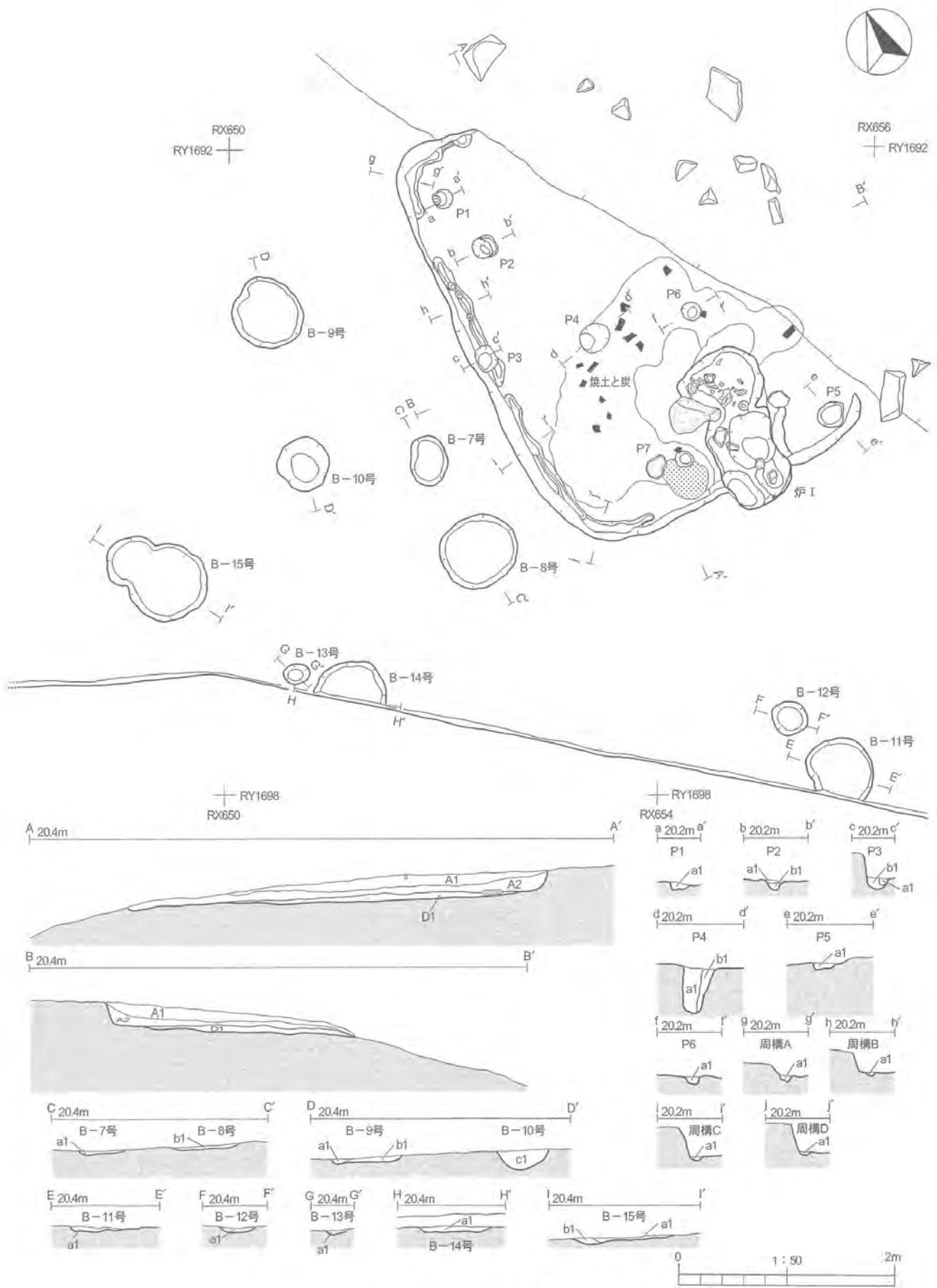
焼土I (第186図)

炉の西側に位置する。平面形は不整形で、浅い掘り方をもつ。P 7に北端を切られている。規模は38cm×35cm、深さ7cmである。C層が焼土層であるが、焼き締ってはいない。

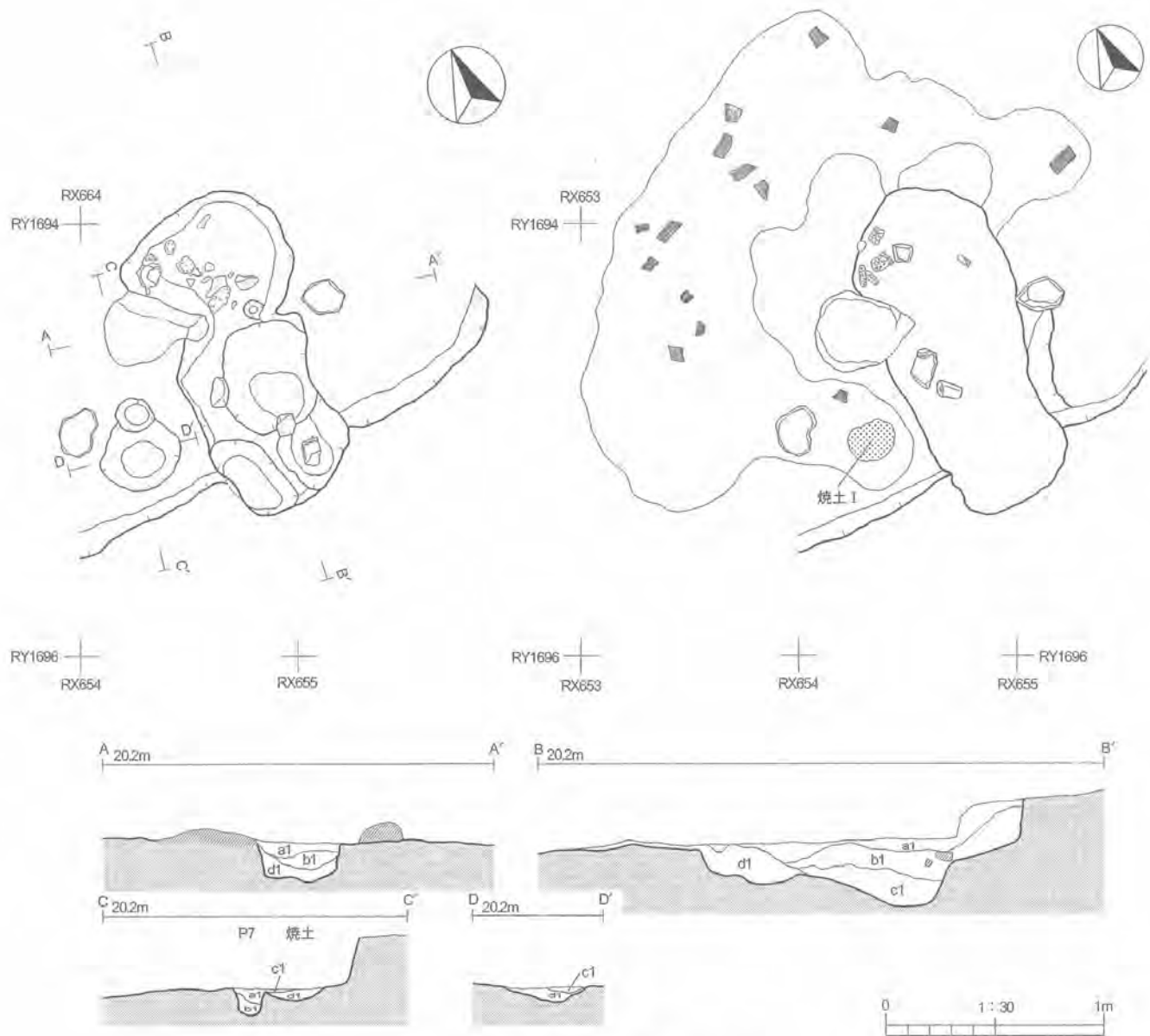
出土遺物 (第187、188図)

1、2は甕の口縁部で、沈線に交互刺突が施される。B層からはこの他にも同種の弥生土器小片が9点出土している。3～7は土師器である。3、4は炉内から出土した土師器甕の体部である。4には鉄錆が付着する。5～7は土師器甕の底部である。いずれも底部は強く張出し、6、7は底面に木葉痕をもつ。8は須恵器である。長頸壺の頸部である。9は砥石である。三面を使用し、各面に鉄錆が付着する。鉄錆はトーンで示した。

10～12はふいごの羽口である。10は完形にちかい。長さ13cm、外径7.4cm、孔径2.6cmである。11の孔径は約3.0cmと推定される。12は楕円形で、長軸で外径6.6cm、3.8cmである。



第185図 B-3号製鉄遺構と周辺の土坑



第186図 B-3号製鉄炉跡

13~16は鉄製品である。13は角釘である。14は半円の円盤状で、先端部は折り曲げられている。

B-3号製鉄遺構周辺の土坑群（第185図）

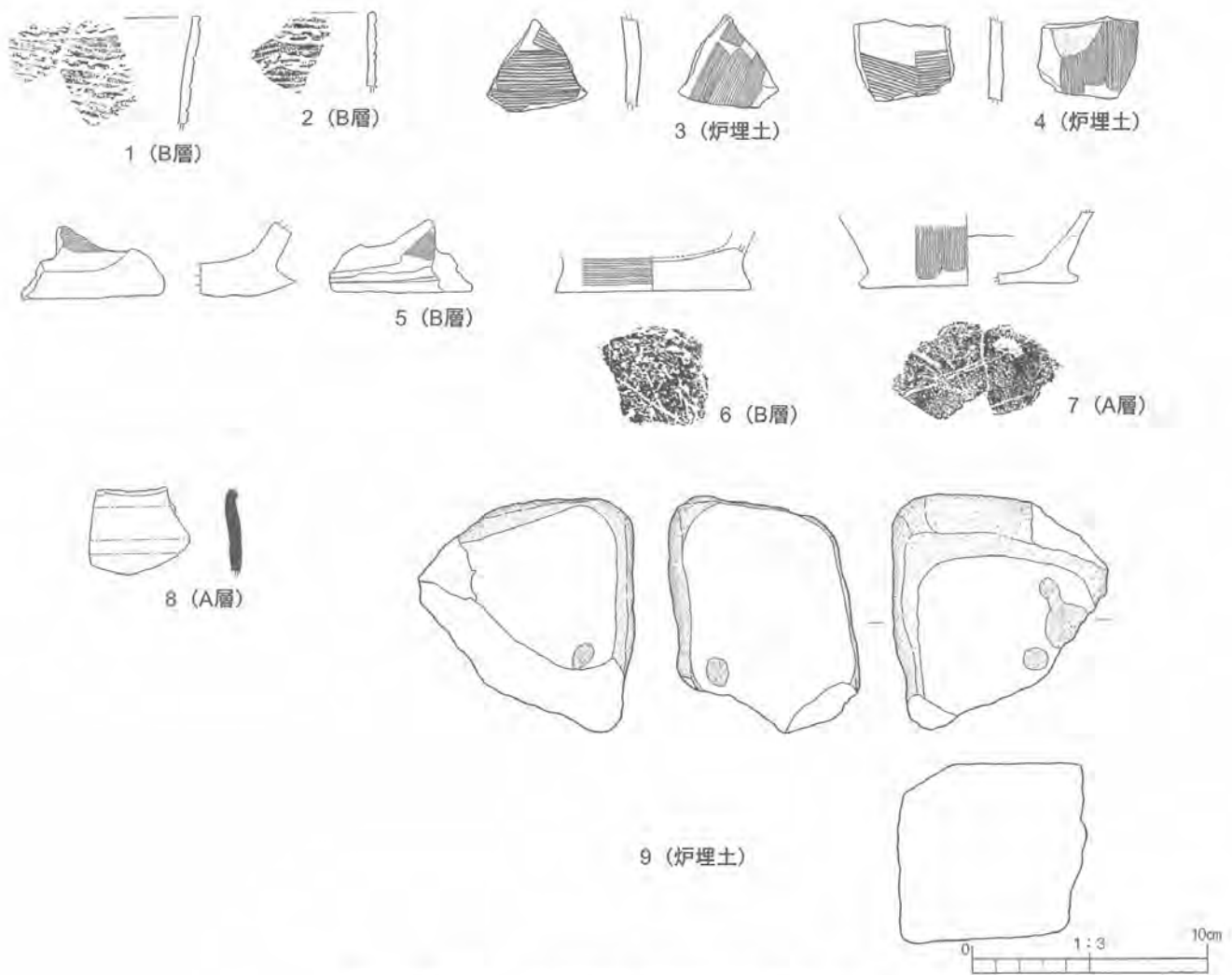
B-3号製鉄遺構の周辺からは9基の土坑が出土している。いずれも規模が小さく、埋土状況もほぼ同じである。その性格は不明であるが、B-7号、B-10号からは鉄製品が出土している。

(cm)

PIT	B-7	B-8	B-9	B-10	B-11	B-12	B-13	B-14	B-15
径	48×35	70×55	68×60	50	58	33	25×10	58	100×72
深	4	4	5	18	5	4	5	5	6

出土遺物（第188図15、16）

15は刀子の刃部と思われる。16は角釘である。



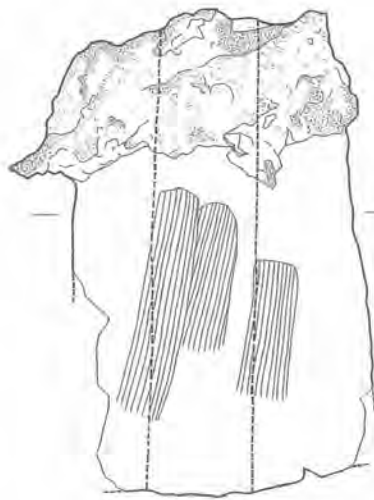
第187図 B-3号竖穴住居跡出土遺物(1)

B-3号製鉄遺構竖穴土層観察表

層名	基本土	混入土	備考
A1	10YR2/2 黒褐 砂壤土	10YR5/3 5% 砂壤土	軟、疎 → 羽羽、須恵など
B1	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR5/6 10% 砂壤土	軟、疎 → 焼土、炭

B-3号製鉄遺構柱穴・周溝土層観察表

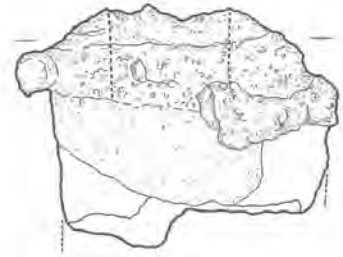
層名	基本土	混入土	備考
P1 a1	10YR2/3 黒褐 砂壤土	10YR4/6 10% 砂壤土	中~固、中 → 炭少
P2 a1	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR4/6 10% 砂壤土	中、中
# b1	10YR4/4 褐 砂壤土	10YR3/4 10% 砂壤土	中~固、中
P3 a1	10YR2/2 黒褐 砂壤土	10YR2/3 10% 砂壤土	中、中~密
# b1	10YR3/3 暗褐 砂壤土	10YR5/6 5% 砂壤土	中、中
P4 a1	10YR3/3 暗褐 砂壤土	10YR4/6 15% 砂壤土	軟、疎 → 炭粒多
# b1	10YR4/6 褐 砂壤土	10YR3/4 10% 砂壤土	中、疎 → 炭粒少
P5 a1	10YR4/6 褐 砂壤土	10YR3/4 15% 砂壤土	中、中~密
P6 a1	10YR3/3 暗褐 砂壤土	10YR4/4 10% 砂壤土	中、中 → 鉄滓
# b1	10YR4/6 褐 砂壤土	10YR2/3 10% 砂壤土	中、中 → 鉄滓
周溝F a1	10YR4/6 褐 砂壤土	10YR3/4 10% 砂壤土	中、中
周溝G a1	10YR3/3 暗褐 砂壤土	10YR4/4 10% 砂壤土	中、中
周溝H a1	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR2/3 10% 砂壤土	中、中
周溝I a1	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR4/6 10% 砂壤土	中、中



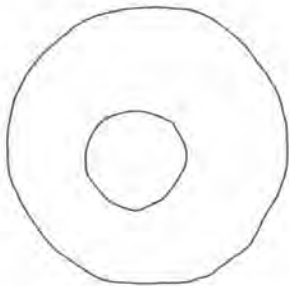
10 (B-3号、炉)



11 (B-3号、A1層)



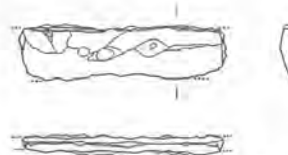
12 (B-3号、A1層)



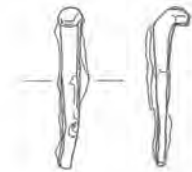
13 (B-3号、検出面)



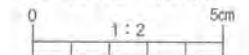
14 (B-3号、検出面)



15 (B-7号)



16 (B-10号)



第188図 B-3号竖穴住居跡、B-7号、B-10号土坑跡出土遺物(2)

製鉄炉跡、焼土I、P7土層観察表

層名	基本土	混入土	備考
製鉄炉 a1	10YR2/3 黒褐 砂壤土	10YR4/3 10% 砂壤土	中、疎 → 鉄滓、炭多
製鉄炉 b1	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR5/6 10% 砂壤土	軟、疎 → 鉄滓
製鉄炉 c1	10YR2/2 黒褐 砂壤土	10YR3/4 10% 砂壤土	中、中 → 鉄滓
製鉄炉 d1	7.5YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR5/6 15% 砂壤土	軟、疎 → 鉄滓、粘土塊多
P7 a1	10YR2/2 黒褐 砂壤土	7.5YR2/3 10% 砂壤土	中、中
" b1	10YR3/3 暗褐 砂壤土	10YR4/6 10% 砂壤土	軟、疎
焼土I c1	7.5YR2/3 暗褐 砂壤土	5YR4/6 15% 砂壤土	軟、中 → 炭少
焼土I d1	10YR3/3 暗褐 砂壤土	10YR4/6 10% 砂壤土	軟、疎 → 炭多

B-3号製鉄遺構周辺土坑群土層観察表

層名	基本土	混入土	備考
B-7号 a1	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR5/6 15% 砂壤土	中、中 → 鉄製品
B-8号 b1	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR5/6 5% 砂壤土	中、中 → 炭少
B-9号 a1	10YR4/6 褐 砂壤土	10YR4/3 10% 砂壤土	中、中
# b1	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR5/6 10% 砂壤土	中、中 → 炭微
B-10号 c1	10YR4/4 褐 砂壤土	10YR5/6 10% 砂壤土	中、中 → 土器片
B-11号 a1	7.5YR4/3 褐 砂壤土	10YR4/6 10% 砂壤土	軟、中
B-12号 a1	10YR4/6 褐 砂壤土	10YR3/4 10% 砂壤土	中、中
B-13号 a1	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR3/4 暗褐 砂壤土	中、中 → 炭微
B-14号 a1	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR3/4 暗褐 砂壤土	中、中
B-15号 a1	10YR4/4 褐 砂壤土	10YR4/4 褐 砂壤土	中、中 → 炭微
# b1	10YR4/6 褐 砂壤土	10YR4/6 褐 砂壤土	中、中 → 炭微

b. 道状遺構 (第189図)

<検出状況> D区の尾根斜面の下位に位置する。検出面はV層上面である。等高線に沿う方向に直線的に掘り込まれている。

<形状・規模> 壁は外傾し、壁高は30cmである。床面には幅約2mの平坦面が作られ、そこから沢までは緩斜面をなして下っていく。

<埋土> 埋土は2層に大別される。Ⅲ層はやや締る暗褐色土、Ⅳ層は締りのない黒褐色土である。前述したようにⅢ、Ⅳ層は旧表土層である。

出土遺物 (第190図)

1、2ともⅢ層から出土したものである。1は土師器甕の底部で、明瞭な張出しをもち、底面は平滑である。2は須恵器の体部片で、内面にケズリ調整痕をもつ。

埋土遺物から古代の遺構と判断した。

(3) 土坑群

B区西土坑跡 (第191図)

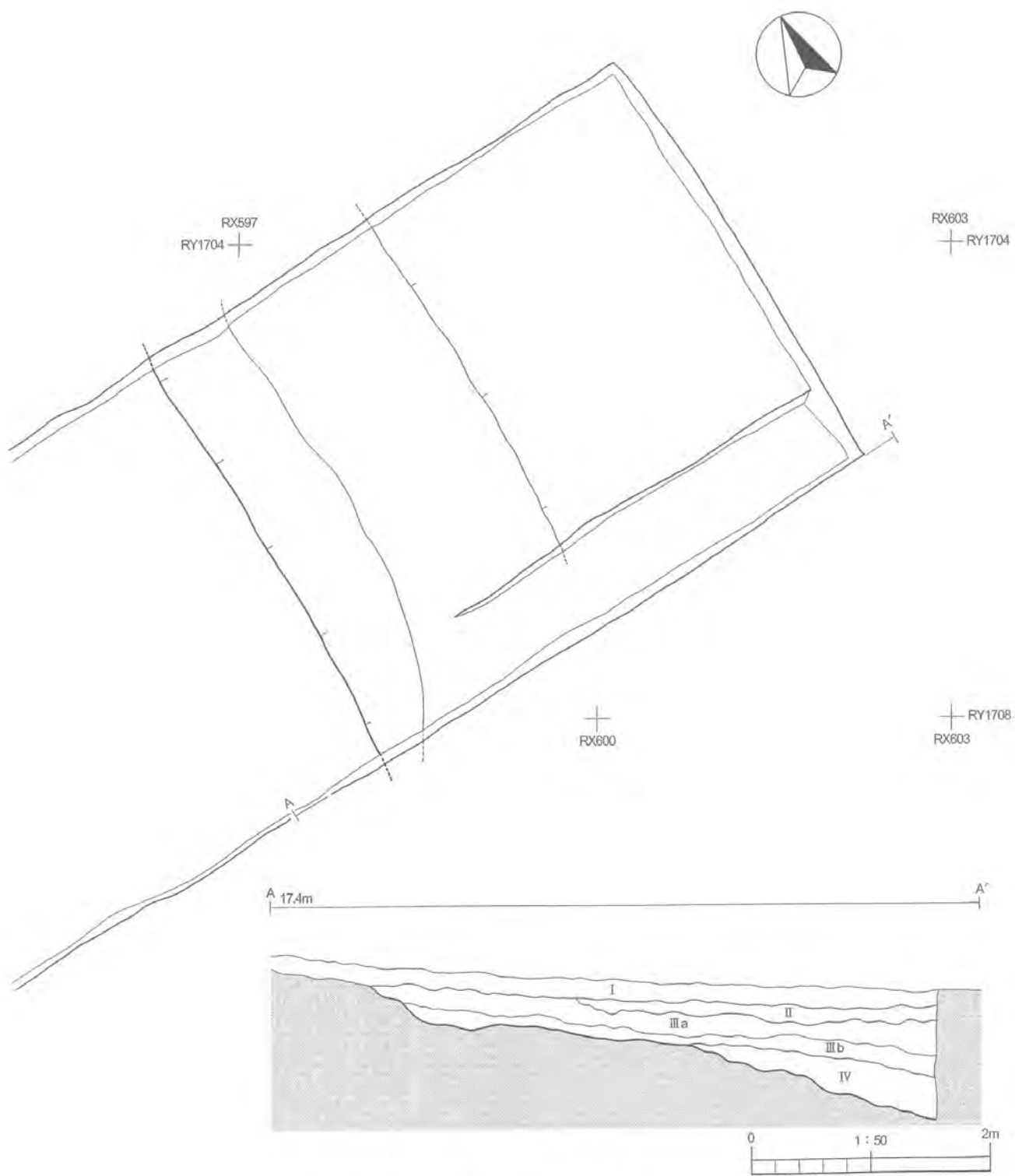
B区西、斜面に位置する。およそ緩斜面から急斜面の境目にあたる。

<形状・規模> 平面形は円形、不整円形のものがあり、浅い小土坑を伴うものが多い。規模は、柱痕が確認されたもので径約30cm、深さ20cm～40cmである。また柱痕の方向は垂直ではなく、斜面の下方にむかって傾く。

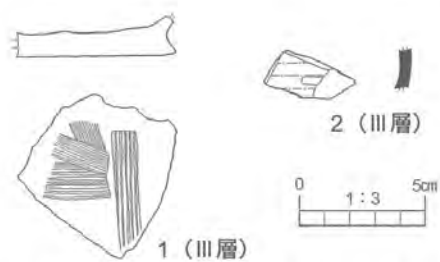
<埋土> 大半がやや締りのある黒～暗褐色土で構成されている。土器などの遺物は出土していない。

<配置> 柱痕の確認された土坑あるいは比較的深い土坑は、ほぼ等高線に沿う方向に並んでいる。

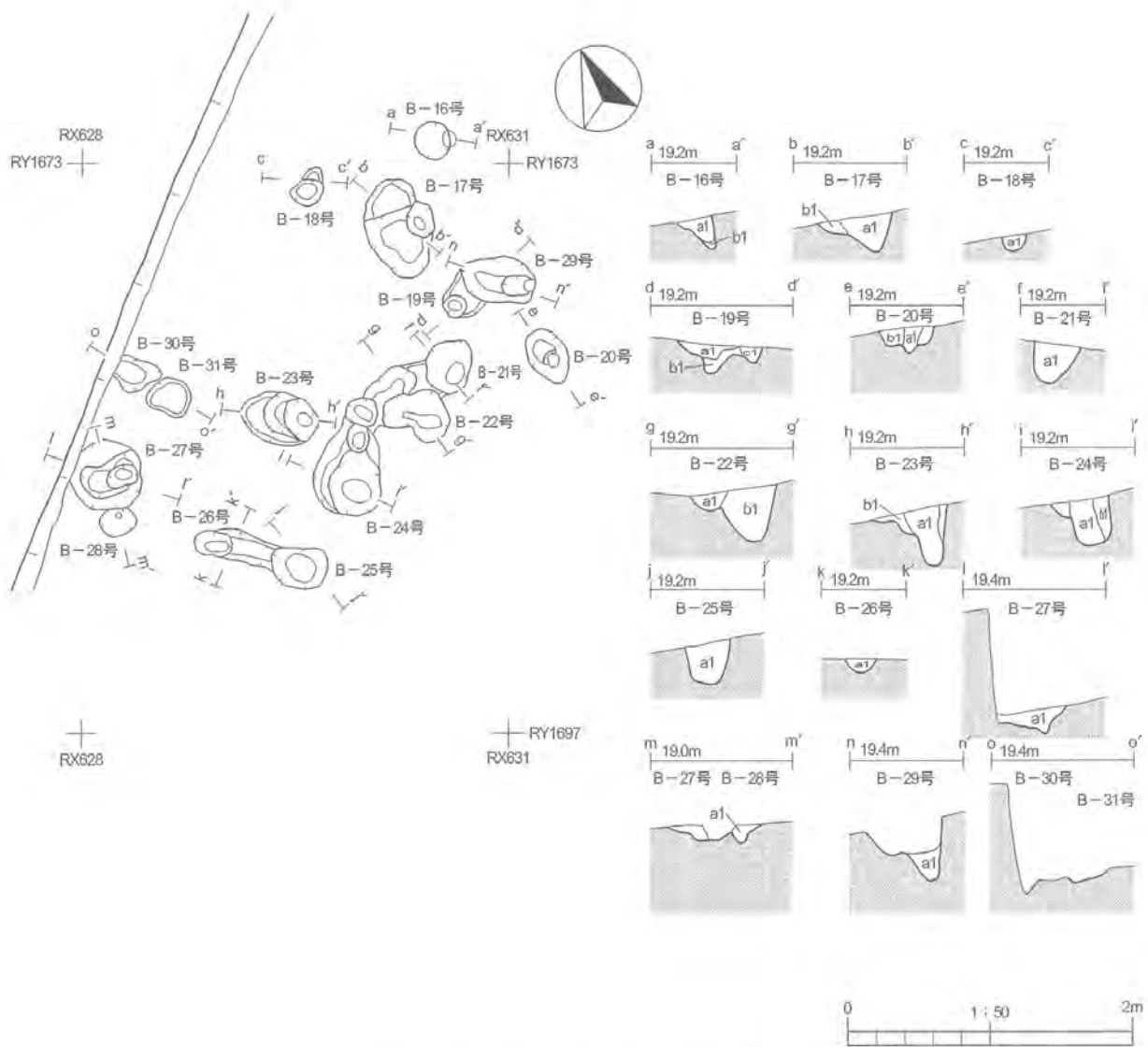
当初掘立柱建物跡とも考えたが、位置、配置、埋土状況からみて中世以降の柵列などが想定できるのではないと思われる。



第189图 D-1号区道状遺構



第190图 D区道状遺構出土遺物



第191図 B区西の土坑群跡

土坑計測表

(cm)

PIT	B-16	B-17	B-18	B-19	B-20	B-21	B-22	B-23
径	25	50×45	20	15	40×28	40×30	50×30	55×40
深	24	25	10	10	20	30	40	42

(cm)

PIT	B-24	B-25	B-26	B-27	B-28	B-29	B-30	B-31
径	45×40	40×28	25×17	50	25×20	55×35	25×—	30×25
深	33	28	10	18	12	43	10	5

B区西土坑跡土層観察表

層名	基本土	混入土	備考
B-16号 a1	10YR4/6 褐 砂壤土	10YR3/4 10% 砂壤土	中、中～密
" b1	10YR3/1 黒褐 砂壤土	10YR2/3 10% 砂壤土	中、中 → 炭多
B-17号 a1	10YR2/3 黒褐 砂壤土	10YR3/4 15% 砂壤土	中、中
" b1	10YR4/3 褐 砂壤土	10YR4/6 10% 砂壤土	中、中
B-18号 a1	10YR4/3 褐 砂壤土	10YR5/6 10% 砂壤土	中、中
B-19号 c1	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR4/3 10% 砂壤土	中、中
B-20号 a1	10YR3/3 黒褐 砂壤土	10YR3/4 10% 砂壤土	中～固、中
" b1	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR5/6 5% 砂壤土	中、中
B-21号 a1	10YR3/3 黒褐 砂壤土	7.5YR4/4 5% 砂壤土	中、中
B-22号 a1	10YR2/3 黒褐 砂壤土	10YR3/4 10% 砂壤土	中、中
" b1	10YR4/4 褐 砂壤土	10YR4/6 10% 砂壤土	中、中
B-23号 a1	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR4/6 10% 砂壤土	中、中
" b1	10YR4/4 褐 砂壤土	10YR5/6 10% 砂壤土	中、中
B-24号 a1	10YR2/3 黒褐 砂壤土	10YR3/4 10% 砂壤土	中、疎
" b1	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR4/6 10% 砂壤土	中、中
B-25号 a1	10YR3/3 黒褐 砂壤土	10YR4/4 15% 砂壤土	中、中
B-26号 a1	10YR3/3 黒褐 砂壤土	10YR4/6 15% 砂壤土	中、中
B-27号 a1	10YR3/2 黒褐 砂壤土	10YR4/6 10% 砂壤土	中、中
B-28号 a1	10YR3/3 黒褐 砂壤土	10YR4/4 5% 砂壤土	中～軟、疎
B-29号 a1	10YR3/4 暗褐 砂壤土	10YR5/6 15% 砂壤土	中～固、中～密 → 炭微
B-30号	注記なし	注記なし	注記なし
B-31号	注記なし	注記なし	注記なし

(4) 遺構外出土遺物

A区遺物包含層

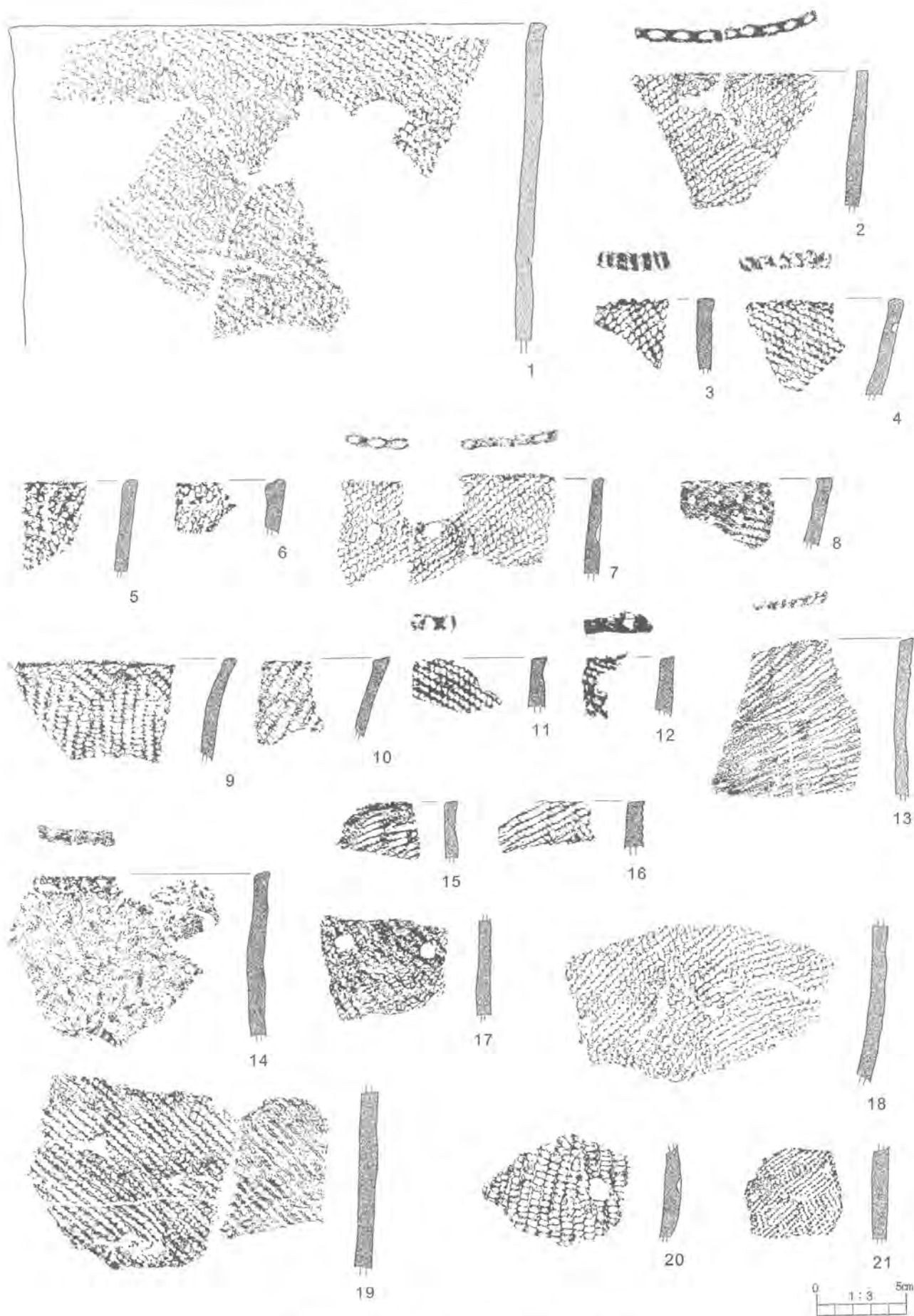
出土遺物 (第192～197図)

1～21はⅢ層から出土したものである。器形は外反する深鉢の口縁部(1～17)、体部(18～21)である。胎土は16を除いて繊維を含む。口唇部に施文されたものと(1～4、11～13)、そうでないものに分れる。

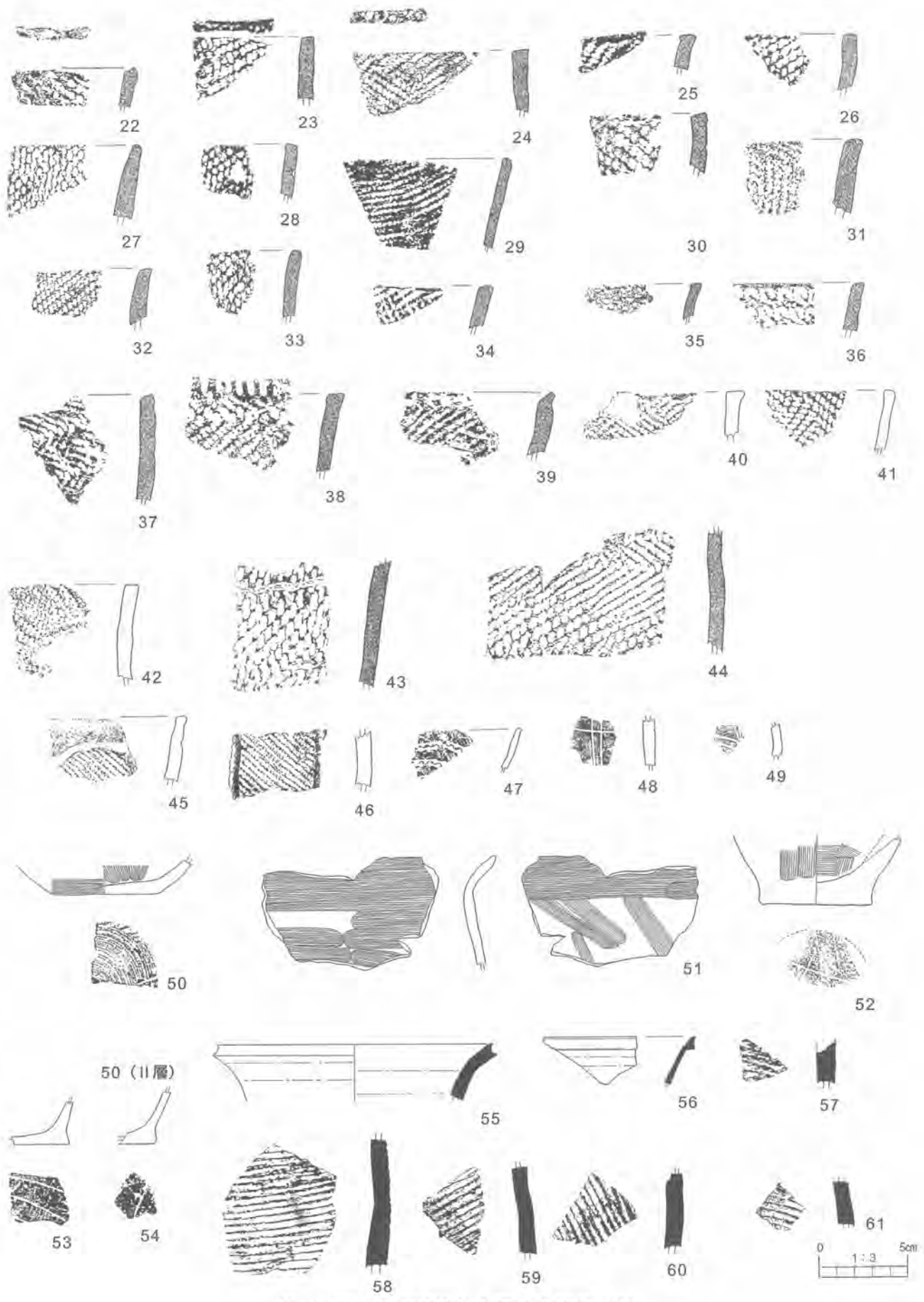
1は口唇部に縄文が回転され、地文はRL単節を横走させる。2は口唇部に楕円形の押圧痕をもち、地文はLR単節を横走させる。3は口唇部に竹管による?切れ込みが入られ、4の口唇部には縄文の押圧痕が施文される。5、6は節が不明瞭であるが、単節斜縄文による施文である。7は口唇部の一部に楕円の押圧痕を残し、補修孔をもつ。8の横位の穴は刺突痕ではなく、結節縄文の痕である。9の地文はRL単節を縦走させた上に斜走させ、10は縦位のLR単節を地文としている。11、12は口唇部に楕円の押圧痕をもち、13は口唇部に縄文を回転させ、地文はLR単節を横走させる。14は外面が剥離し地文は不明であるが、口縁部に爪形の刺突痕を残す。16の胎土の繊維はごくわずかである。17は補修孔をもち、地文はRL単節を縦走させる。18～21の体部片はいずれも単節斜縄文による施文である。

22～61はⅡ層から出土したものである。22～44は外反する深鉢の口縁部(22～42)と体(43、44)である。口縁部は口唇部に施文するもの(22～24)とそうでないものに分れる。22～39は胎土に繊維を含む。

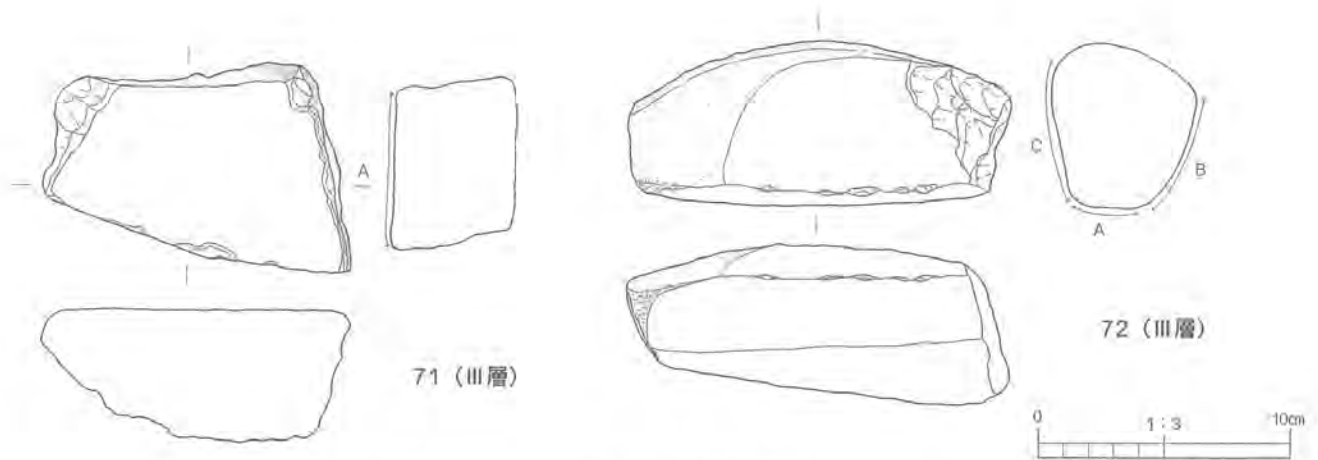
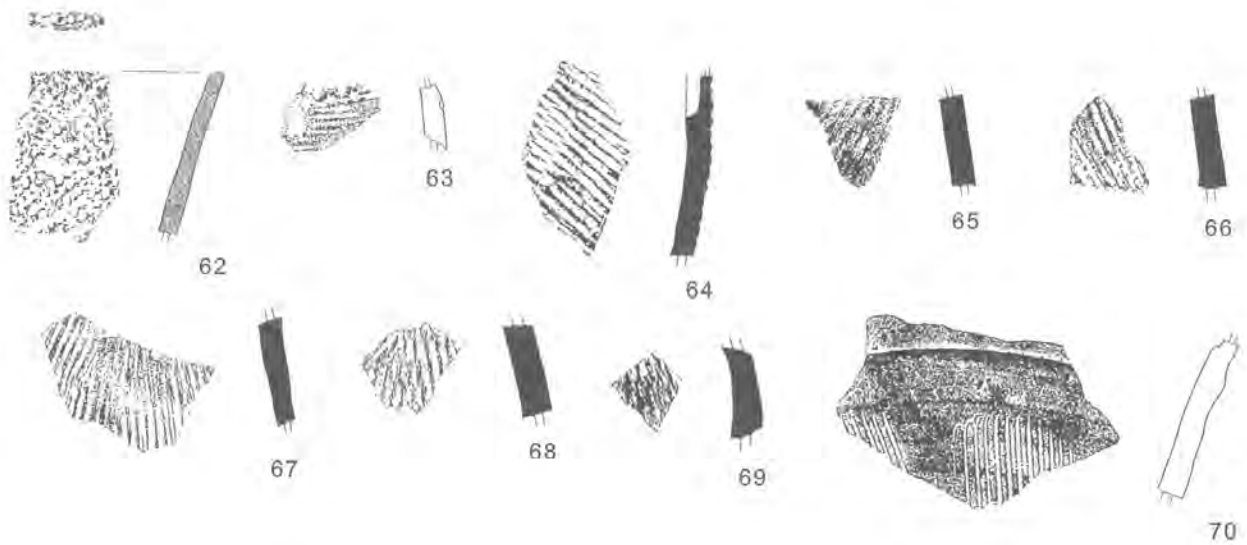
22の口唇部には楕円の押圧痕、23、24の口唇部には縄文圧痕回転が施されている。



第192图 A区遗物包含层出土遗物(1)



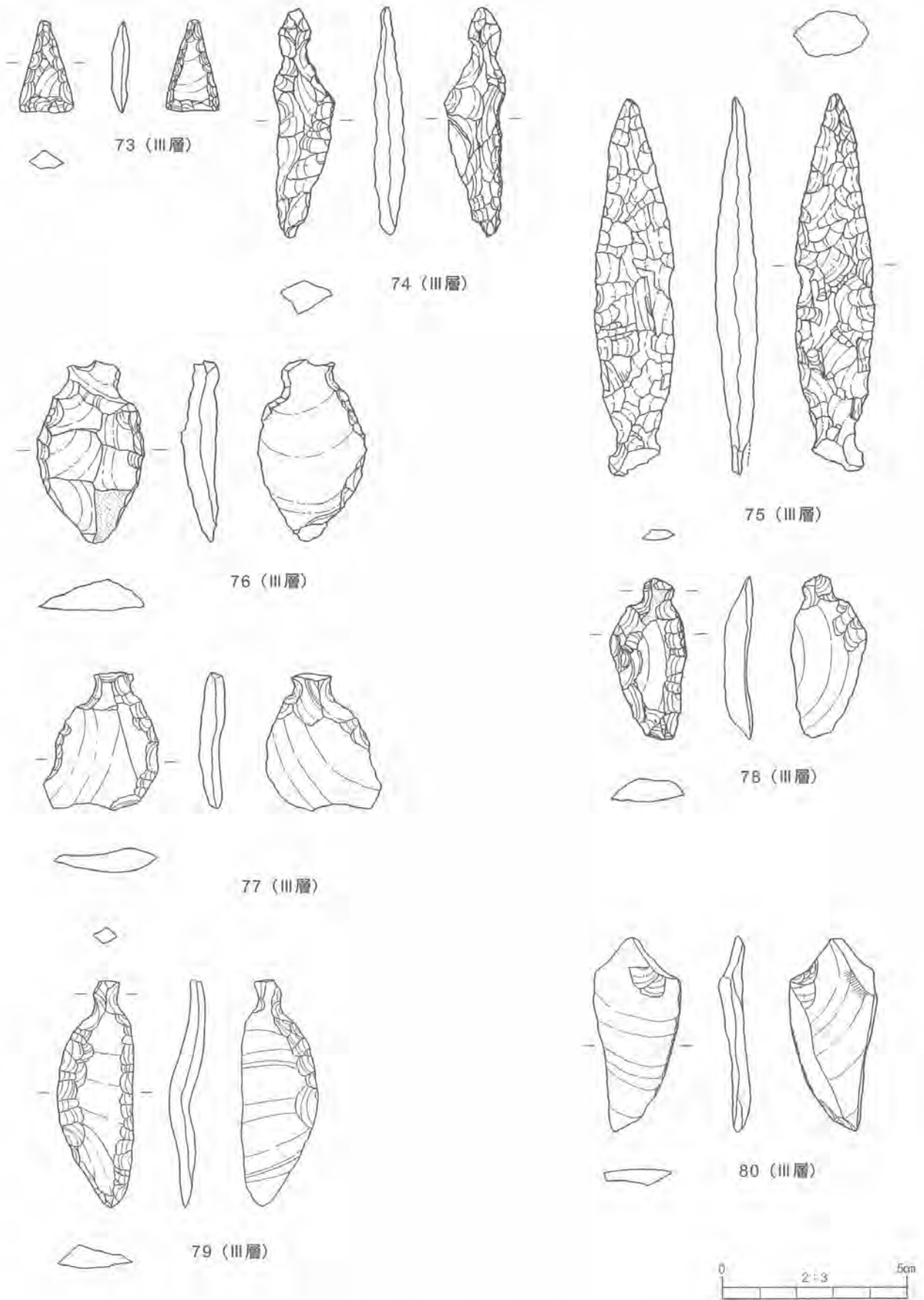
第193图 A区遺物包含層出土遺物 (2)



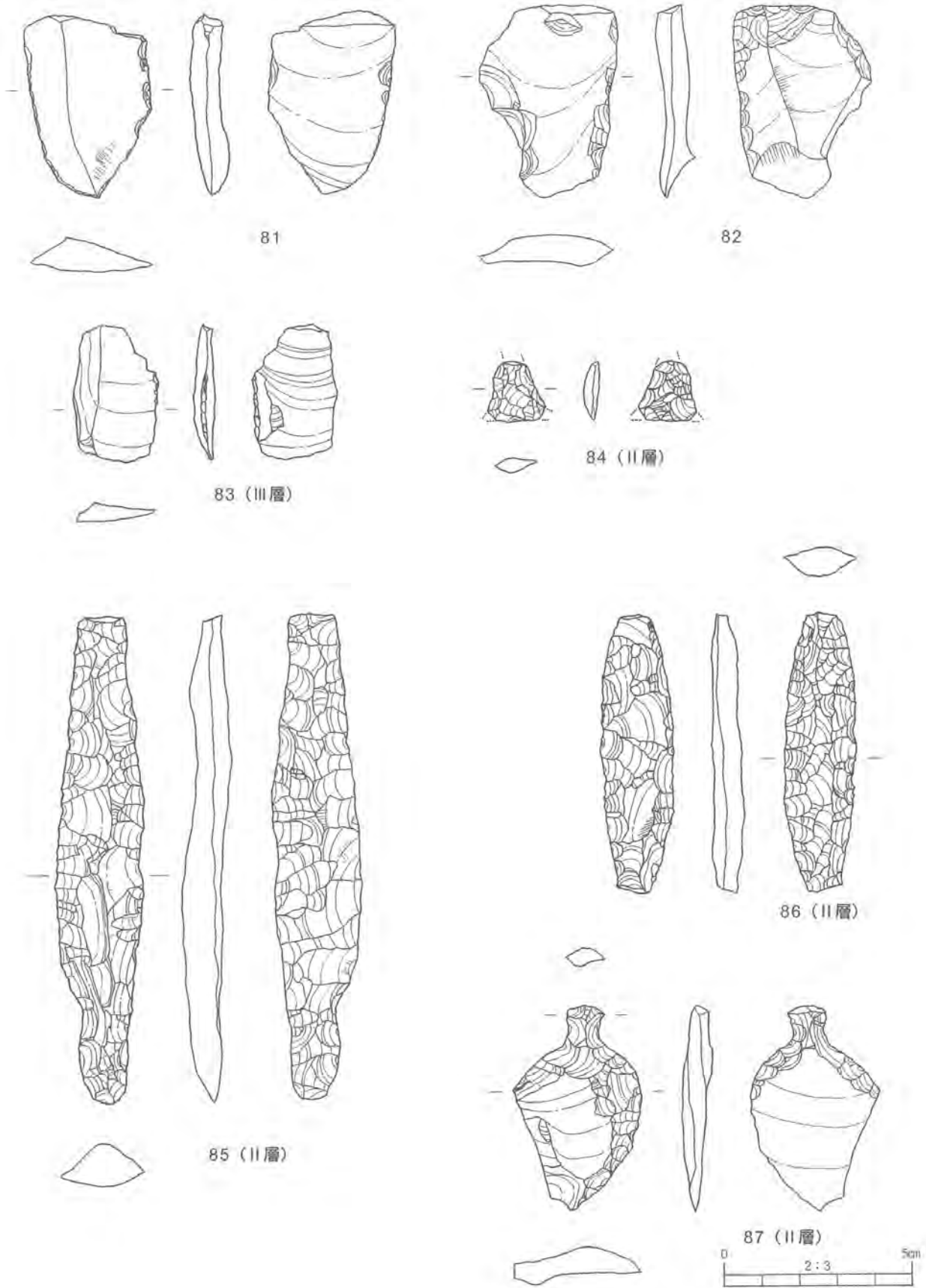
第194図 A区遺物包含層出土遺物 (3)

23の地文は複節斜縄文である。25～28は単節斜縄文による施文であるが、27の一部に複節縄文が施されている。29の口唇部の端には縄文の押圧痕（結節？）が残る。30はR L R複節を横走させる。31、32、35、36は単節斜縄文、33は複節斜縄文で施文される。37、38は羽状縄文で施文され、38の口唇部には半截竹管による切れ込みがある。39は口縁部に爪形の刺突文を施され、口縁部に楕円の押圧痕を残す。40～41は胎土に繊維を含まない。40、41は単節斜縄文、42は複節斜縄文で施文される。43は単節縄文の上に縄文束の圧痕を残し、44は羽状縄文の下に単節縄文が横位に施されている。45は深鉢の口縁部で、磨消を伴う。46は深鉢の体部で、隆沈線で施文される。47は沈線に交互刺突文で施文される。48、49は刻線のための施文である。

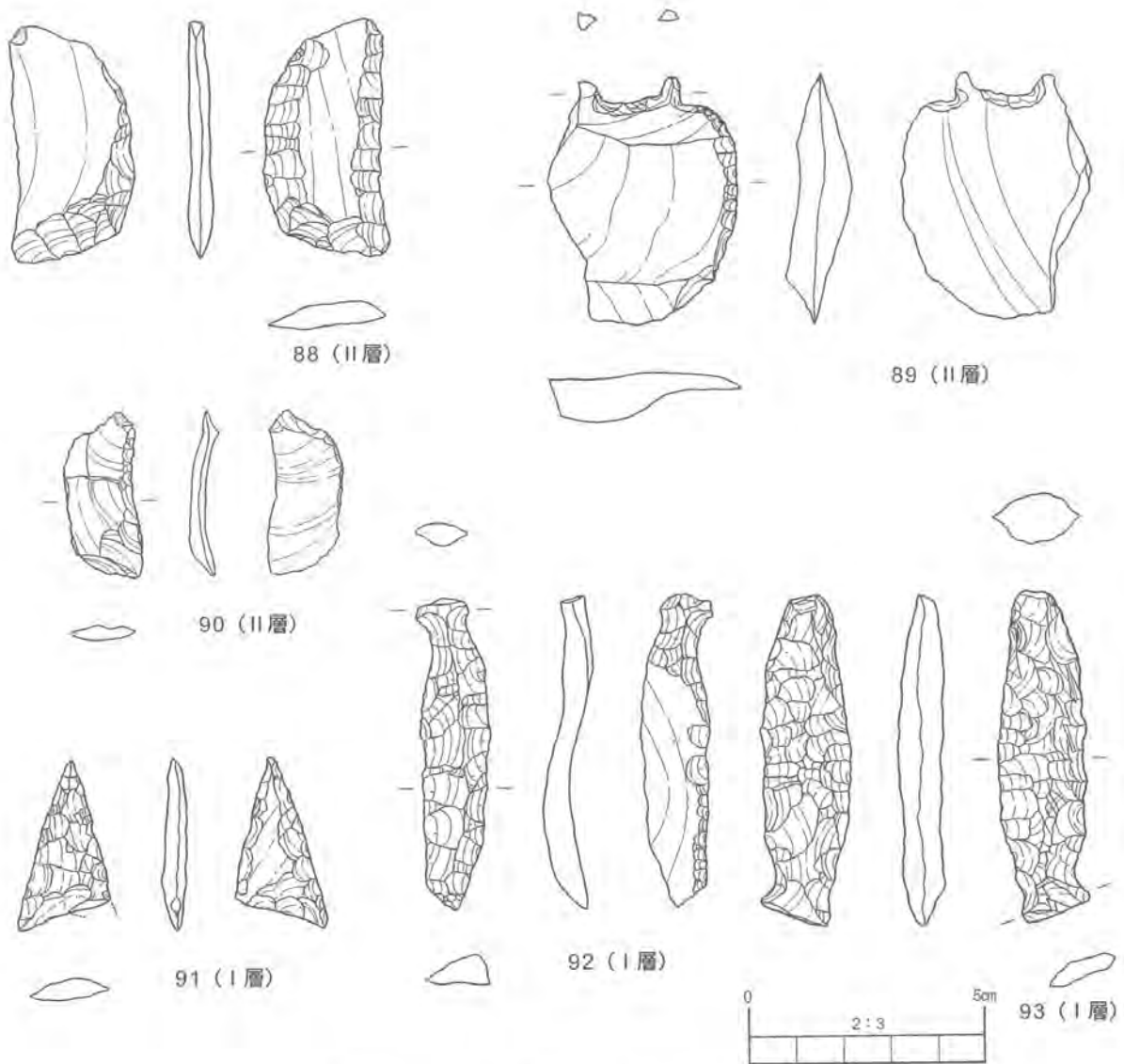
50～54は土師器である。50はロクロ使用の坏である。底部は回転糸切りで、底部から直線的に立上がる。黒色処理をされている。51は甕の口縁部で、直線的に立上がる。口縁部の短い長胴甕か。52～54は甕の底部である。いずれも底面に木葉痕をもち、張出しは弱い。



第195图 A区遺物包含層出土遺物 (4)



第196图 A区遺物包含層出土遺物 (5)



第197図 A区遺物包含層出土遺物 (6)

57～61は須恵器の体部片である。いずれも外面はタタキメ調整され、57～59は内面に小刻みに移動させるハケメ?を残す。

62～70はI層から出土したものである。62は深鉢の口縁部である。口唇部に縄文の圧痕をもち、胎土は繊維を含む。63は沈線に交互刺突文が施される。64～69は須恵器の体部片である。いずれも外面はタタキメ調整され、64、67は内面にハケメを残す。70は播鉢である。内外面に鉄釉が施されている。

71～93は石器である。

71は砥石である。矢印の面のみが機能面であるが、擦痕などは観察されなかった。72は敲打磨石である。A面が機能面で、B面は隣接する面を磨いた調整磨面と考えられる。機能面の端部に敲打痕を残す。

73～93は剥片石器である。

73～83はⅢ層から出土したものである。73は石鏃である。平基で、側縁は平側、二等辺三角形型である。74、76～79は石匙である。いずれも縦型で、77を除いて刃部の末端が尖る。74は表裏面の全面が加工される。76は片面全面と裏面の周縁部が加工される。77～79は表裏面の周縁部が加工される。75は大形の尖頭器である。尖頭部と基部が明瞭であり、基部には抉りが入る。80～83は不定形な石器である。80は刃部末端が尖り、凹刃をもつ。81は刃部末端がやや尖り、凹刃と直刃をもつ。82、83は刃部末端は尖らず、直刃をもつ。

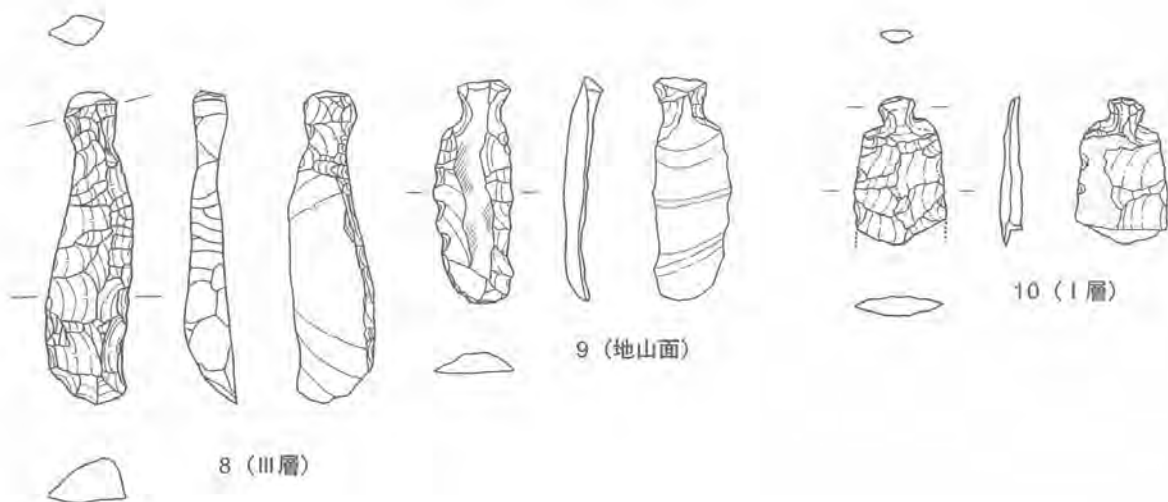
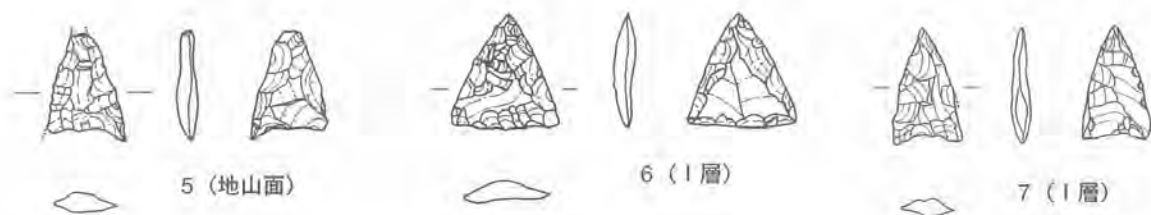
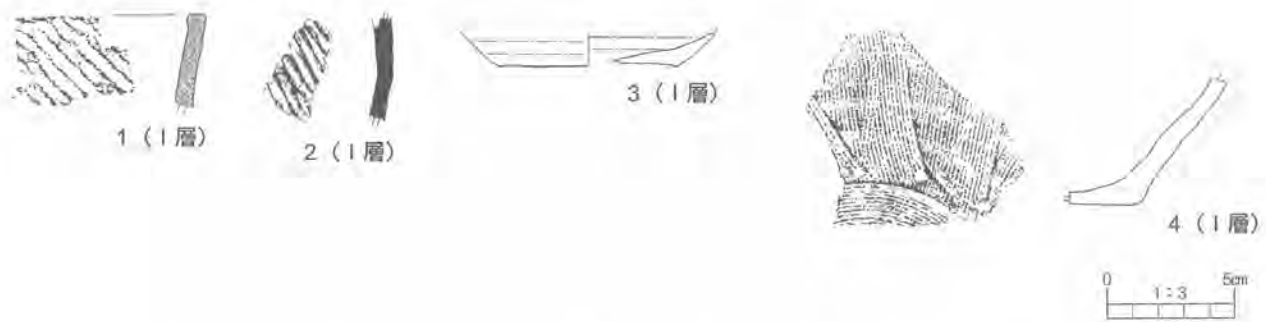
84～90はⅡ層から出土したものである。84は先端部を欠いているが、石鏃である。平基で、側縁は凹側と推定される。85、86は尖頭器である。85は大形で基部に抉りが入る。86は小形で、尖頭部と基部は明瞭ではなく、抉りも入らない。87は石匙である。縦型で、刃部の末端が尖り、両面の周縁部が加工される。88～90は不定形石器である。88は刃部末端は尖らない。両面の周縁部を加工し、凹刃と凸刃をもつ。89は刃部の末端は尖らず、上部に抉りが入る。凸刃をもつ。90は刃部の末端は尖らず、凹刃をもつ。

91～93はⅠ層から出土したものである。91は石鏃である。凹基で、側縁は平側、二等辺三角形型である。92は縦型の石匙である。刃部末端は尖り、片側全面と裏面の周縁部が加工される。93は小形の尖頭器である。尖頭部と基部は明瞭で、基部には抉りが入る。

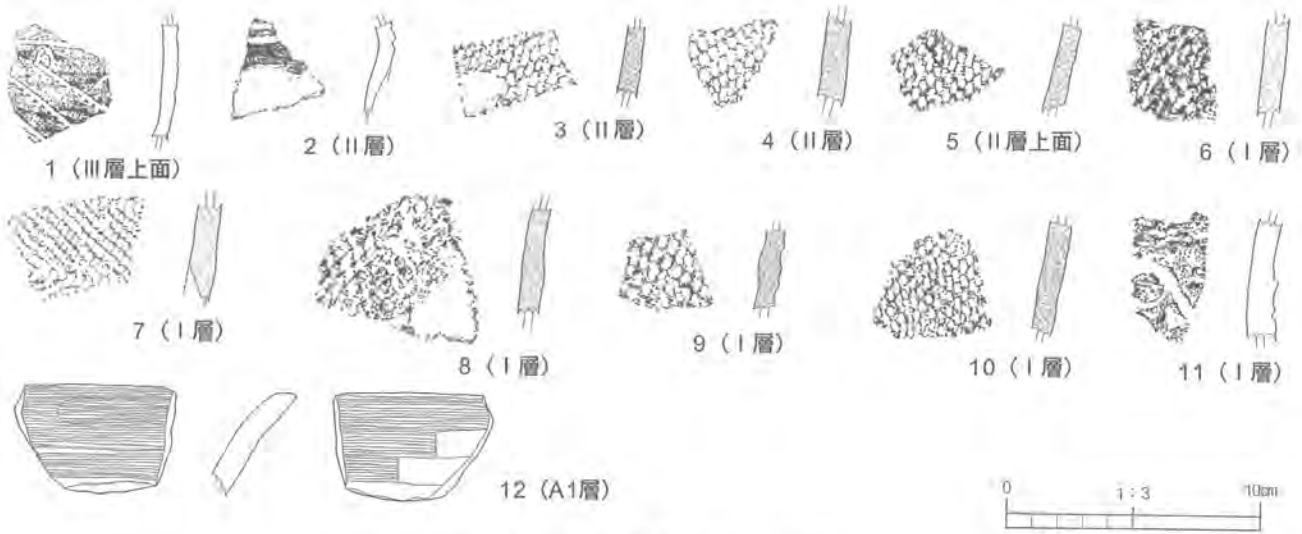
B区遺構外出土遺物（第198図）

1は深鉢の口縁部である。胎土は繊維を含み、地文はRL単節を縦走させる。2は須恵器の体部片である。外面をタタキメ調整される。3、4は陶磁器である。4は陶器の小皿で、外面無釉、内面に透明釉が施される。胎土は淡黄色で、密である。4は播鉢である。内外面に鉄釉が施される。

5～12は石器である。5～7は石鏃である。5は凹基、側縁は平側、二等辺三角形型である。6は平基、側縁は平側、正三角形型である。7は平基、側縁は平側、二等辺三角形型である。8～10は石匙である。いずれも縦型である。8、9の刃部の末端は尖らない。8は片面の全面と裏面周縁部、9は両面とも周縁部が加工されている。10は片面の全面と裏面の周縁部が加工され、一部自然面を残す。11は石ヘラである。頭部は小さく、刃部は開き、両面を剥離調整している。12は小形の磨製石斧である。磨面の稜線は明瞭である。胴部が膨らみをもち、胴部下半の幅のほうが大きい。刃縁は直線的で、左右対称ではない。



第198图 B区遺構外出土遺物



第199図 C区遺構外出土遺物



第200図 D区遺構外出土遺物

C区遺構外出土遺物 (第199図)

1、2は貝殻腹縁圧痕で施文される。3～10は深鉢土器の体部片である、いずれも胎土に繊維を含み、単節斜縄文を横走させて施文する。11は沈線と円形刺突文により施文される。12、13はI層から出土した土師器である。12は甕の口縁部で、外反して直線的に立上がる。

D区遺構外出土遺物 (第200図)

1、2は条痕文土器である。縄文早期野島式に伴う。II層と表土から出土したものである。3は陶器甕の口縁部である。口唇部は玉縁状に成形され、内外面に鉄釉が施されている。

第4表 赤前Ⅲ遺跡出土鉄滓集計表

		遺構、地区名						
形状	反応度	B-1号	B-2号	B-3号	B区	C区	D区	計 (g)
飴状	合計：H							
	合計：M							
	合計：L							
	合計：N		1020		50	20		1090
塊状	合計：H		1290	70	40			1400
	合計：M							
	合計：L	120						120
	合計：N	400	9420	110	1080	50	50	11110
炉内残留	合計：H							
	合計：M							
	合計：L							
	合計：N		780					780
炉壁を嘔む	合計：H							
	合計：M							
	合計：L							
	合計：N	80	190	100	190			560
椀形	合計：H		400					400
	合計：M							
	合計：L							
	合計：N		530	10				540
全体の合計：H			1690	70	40			1800
全体の合計：M								
全体の合計：L		120						120
全体の合計：N		480	11940	220	1320	70	50	14080

鉄滓を形状によって分類し、さらにそれらの金属鉄の残留度をメタルチェッカーによって調べたものをまとめたものである。H、M、L、Nはその反応度を示す。

H：小さな金属鉄を残留する。 M：一般の金属鉄を残留する。

L：大きな金属鉄を残留する。 N：金属鉄を含まない。

出土鉄滓の総量は、約14kgである。ほとんどがB-3号製鉄遺構から出土したものである。金属鉄を含む鉄滓の割合が低い。

5-3. まとめ

a. 縄文時代の遺構

尾根の平坦部の端に位置するが、炉跡、柱穴などは出土せず、形状から竪穴住居跡と判断した遺構である。平安時代の竪穴に北側を切られており、形状、規模は不明である。土坑は周辺部で検出している。B-1号0土坑からは遺物が出土していないが、埋土状況から、竪穴と同時期のものと考えられる。

B-4号竪穴住居跡、B-5号土坑から出土した土器は、施文は単節の縄文が全面に施されるが羽状縄文は含まず、口唇部には押圧、刻目、縄文が施され、胎土はすべて繊維を含むという諸特徴が共通している。これらの土器は「千鶴遺跡¹」でⅢ群B類に、「崎山貝塚²」でI群に分類された土器に類似し、縄文前期初頭の大木I式に伴うものと思われる。当遺跡では昭和54年に現在赤前小学校の建設に伴う調査が行われ、同時期の土器を含む遺物包含層が確認されていたが、住居跡、土坑に伴って出土したのは当遺跡では初めてのことである。

遺構の配置は尾根の東側に偏っており、東側の谷A区では、埋土3層から同時期の遺物包含層が検出しているが、西側の谷C区では遺物はほとんど出土していない。西側の谷で出土した陥穴状土坑は同時期のものと考えられるが、尾根の東側を生活面として、沢の流れる西側の谷に陥穴を配した集落の配置の一端を示すものと考えられる。

b. 古代の遺構

竪穴住居跡3棟、製鉄炉1棟、土坑跡9基、道状遺構などが出土したが、出土土器、製鉄炉については「調査のまとめ」で検討したい。ここでは住居跡、土坑跡、道状遺構などについてまとめ、あわせて昭和54年、昭和57年の調査結果³との比較検討をしてみたい。

住居跡の形状はいずれも隅丸方形であるが、規模はB-1号が小形で、B-3号、B-2号が中型の部類に入る。立地状況は尾根先端の平坦部である。B-1号を中心にして東に製鉄炉を伴ったB-3号、西に鍛冶炉を伴ったB-2号が位置するという配置である。時期は9世紀後半～10世紀前半に伴う遺構と思われる。

前回の調査では竪穴住居跡5棟が出土しており、年代は9世紀後半～10世紀前半と位置付けられている。これは今回出土した住居跡の年代と平行しており、出土遺物をみても鉄製品、フイゴの羽口など製鉄関連の遺物が共通している。前回の調査区は尾根の根元、今回の調査区は同じ尾根の先端部であり、高低差約8メートル、水平距離で約120メートル、その間には未調査域を含めてではあるが大きな空白域があり、一つの集落なのかという疑問が出てくる。しかし、前回の調査では製鉄炉が出土していないこと、他の遺跡の例に見られるように（鯉沢遺跡⁴、小堀内Ⅲ遺跡、赤前Ⅳ遺跡など）製鉄遺構は、排滓場などを必要とする事情からであろうが、集落の端の方に位置することに注目すれば、やはり一つの大きな集落を形成していたと考えてよいと思われる。さらに、これは赤前Ⅳ遺跡の遺構の配置にのところで触れたことであるが、やや規模の大きい土坑跡や、近内館山⁵（未報告）、神田沢遺跡⁶（未報告）に頻出する人ひとりすっぽり入るような土坑跡を含めて、土坑が皆無であることがあげられる。このことが時期差なのか地域差なのか不明であるが、生活形態の大きな差異を示しているのではないと思われる。以上のことから、当遺跡の集落も、年代的には赤前Ⅳ遺跡の集落のすぐ後に続く位置にあるが、

赤前IV遺跡で想定したような「製鉄を専業とする集落」という側面を、赤前IV遺跡ほど明確ではないにしろやはりもっているように思われる。

古代住居跡一覧表

遺構番号	形状	規模	柱穴数	カマドの位置	煙道	鍛冶炉	時期
B-1号	隅丸方形	3.5m×3.3m	11	北壁(新)西壁(旧)	下り勾配		平安時代
B-2号	隅丸方形	4.5m×-	6?	6?	水平	○	平安時代
B-3号	隅丸方形	4.1m×-	?	?		○	平安時代

c. 土坑跡について

土坑跡は、B区の東と西で出土している。東の浅い皿状の土坑群は、遺物などからB-3号製鉄遺構に伴うものであることは確認できたが、性格は不明である。西斜面の土坑群については掘り方がいずれも西に傾いていて、位置的にも建物ではなく柵のようなものを立てたのではないかと思われる。年代は掘り込み面から近世まで考えられる。

d. 道状遺構について

道状遺構は、沢沿いに集落にむかって掘られており、高台の集落と浜を結んだ道ではないかと思われる。現在でもその沢に土管を埋めて作った道の上をを行来している。

1. 鎌田祐二 1989「千鷲遺跡」宮古市教育委員会
2. 高橋憲太郎 1995「崎山貝塚」宮古市教育委員会
3. 竹下将男 1984「赤前遺跡群」宮古市教育委員会
4. 鎌田祐二 他 1992「鏗沢遺跡調査報告書」宮古市教育委員会
5. 6. 近内館山遺跡(1993、未報告)、神田沢遺跡(1994、未報告)においても住居跡の内外で比較的大規模な土坑が出土している。

IV 種実遺体の同定

赤前IV遺跡・赤前V遺跡・小堀内Ⅲ遺跡出土種実遺体同定

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

赤前IV遺跡・赤前V遺跡・小堀内Ⅲ遺跡出土種実遺体同定から出土した種実遺体の種類を知り、当時の植物利用に関する情報を得る。

1. 試料

試料は、各遺跡から出土した種実遺体11点である。

2. 方法

双眼実体顕微鏡下で、その形態的特徴から種類を同定する。

3. 結果

結果を表 I に示す。以下に検出された種類の形態的特徴を記す。

表 I 種実遺体同定結果

遺跡名	試料番号	遺構名	出土層位	種類 (個体数)
小堀内Ⅲ遺跡	12	D-1号住居跡	埋土焼土	イネ (3)
赤前IV八枚田遺跡	7	A-53号土坑跡	炭層	イネ (30)
赤前IV遺跡	18	A-53号土坑跡	炭層	イネ (6)
赤前IV遺跡	26	A-53号土坑跡	5層	イネ (23)
赤前IV遺跡	69	A-53号土坑跡	最下層	イネ (7)
赤前IV遺跡	33	A-1号土坑跡	炬I K 3層	イネ (2)
赤前V柳沢遺跡	14	A-3号土坑跡	焼土	オニグルミ (破片多数)
赤前V柳沢遺跡	14	A-3号土坑跡	K 2層上面	オニグルミ (破片多数)

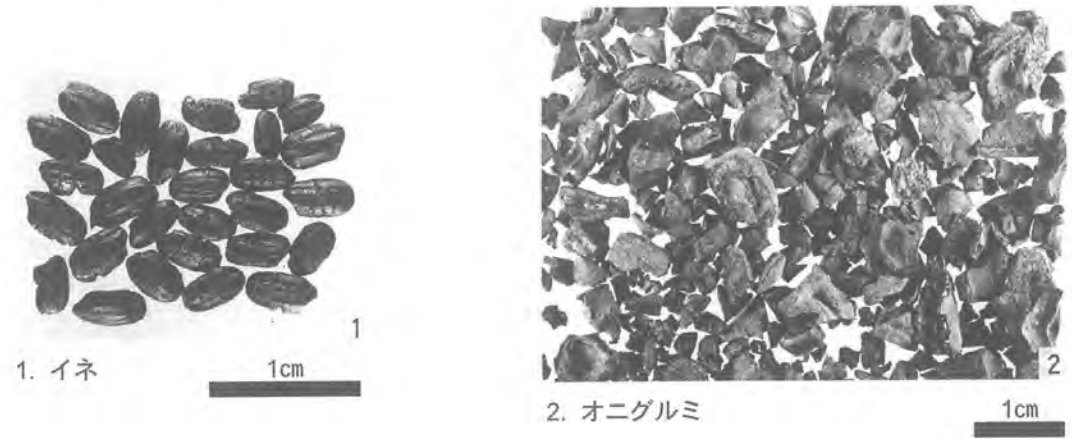
4. 考察

オニグルミは、生食可能で、かつ貯蔵も利くことから、古くから採取され食用としてりようされてきた植物である。全国各地の遺跡からこれまで多くの検出例が知られている。オニグルミの核は堅いため、火中に投じて割れやすくする方法がある。検出されたものは炭化しているが、内部まで著しく炭化していることからすると、調理のために燃やしたのではなく、子葉を取った残渣を焼却した可能性が高い。イネは、栽培のために渡来した種類で、各地の遺跡から多くの検出例がある。今回検出された炭化米は、佐藤 (1998) を参考にすれば、小型の短粒形という範疇にはいり、古代米としては多くみられる形態のものである。

<引用文献>

佐藤敏也（1998）弥生のイネ。「弥生文化の研究2 生業」、金関 恕・佐原 真編 p.97-111、雄山閣。

図版1 種実遺体



V 調査のまとめ

住居跡の形状、規模、配置などについては各遺跡の「まとめ」で取上げたので、ここでは出土土器の編年的位置付けと今回の調査の特徴的な出土遺構である製鉄関連遺構に若干の考察を加えてまとめとする。

a. 土器について

出土遺物のなかから竪穴住居跡にともなって出土した主な土器を床面出土と埋土層出土に分けて、まとめたものを別添図に掲げた。下記のグループに分類できる。

<坏>

ロクロ不使用

- A類 1. 丸底で、外面に沈線あるいは段をもつ。
2. 丸底風の平底で、外面に沈線あるいは段をもつ。
3. 平底で外面に沈線、段をもたない

ロクロ使用

- B類 1. 須恵器で、底部は回転糸切りで無調整のもの
2. 須恵器で、底部は回転糸切りで再調整されたもの
C類 1. 酸化焰焼成を受け、底部は回転糸切りで無調整のもの（内黒処理される）
2. 酸化焰焼成を受け、底部は回転糸切りで再調整のもの（内黒処理される）

<甕>

ロクロ不使用

- A類 1. 肩部に段をもち、胴部にあまり膨らみをもたないもの。
2. 肩部に段をもち、胴部につよい膨らみをもつもの。
B類 1. 肩部に段をもち、胴部にあまり膨らみをもたないもの。
2. 肩部に段をもち、胴部に強い膨らみをもつもの。
C類 1. 口縁部は短く外反し、胴部は強い膨らみをもつ
2. 口縁部は短く直立し、胴部は強い膨らみをもつ
D類 1. 口縁部は短く外反し、胴部は強い膨らみをもたないもの
2. 口縁部は短く直立し、胴部は強い膨らみをもたないもの
E類 1. 須恵器（壺も含める）

これらは次のⅠ～Ⅲ類

Ⅰ類

器種は坏のA類と甕のA類から構成される。これは、大型の丸底の坏をもつグループ（Ⅰa）と小型で平底の坏のグループ（Ⅰb）に細分される。Ⅰaは小堀内Ⅲ遺跡D-1号、Ⅰbは赤前Ⅳ遺跡B-14号に代表される一群である。全体的に見た場合次の二類わかれる。

Ⅰa類 小堀内Ⅲ遺跡B-1号、D-1号、E-2号

Ⅰb類 赤前Ⅳ遺跡A-8号、B-14号、赤前Ⅴ遺跡D-1号

これは「岩手の土器」でⅡ期に分類された土器群にあたり、前者はⅡ-1群、後者はⅡ-2群にほぼ相当するものと思われる。Ⅰ期は大むね奈良時代に相当し、Ⅰa類は8世紀前半～中

頃、I b類は8世紀後半に位置付けられる。

II類

器種は、坏のC 2類と甕のB 2類で構成される。赤前V遺跡A-1号のみが該当する。「岩手の土器」でIII-1群に分類された土器群に相当し、9世紀前半に位置付けられている。

III類

器種は、坏のC 1類と甕のC、D類から構成される。これは赤前III遺跡のB-1号に代表される一群である。甕に比べて坏の出土数が少ないのが目立つ。全体的にみた場合、やはり赤前III遺跡のB-2号が相当すると思われる。

このグループは「岩手の土器」においてIII-2群、「鏗沢遺跡」では第IV期、「磯鶏館山遺跡」ではII期に分類された土器群に平行するものと思われ、そこでは9世紀後半～10世紀前半と位置付けられている。

これは昭和54年の赤前III遺跡の調査で出土した土師器の甕に与えられた年代と重なる（「赤前遺跡群」）。

全体的に見た場合、I類からIII類へ移行、具体的には小堀内III遺跡→赤前V遺跡→赤前IV遺跡→赤前III遺跡という北から南に向かう8世紀前半から10世紀にかけての動きを見て取ることができる。

b. 製鉄遺構について

今回の調査では小堀内III遺跡で3基、赤前IV八枚田遺跡で4基、赤前III遺跡で2基の製鉄炉が出土している。製鉄炉は形状、配置などから大きくA型、B型の二つのタイプに分類できる。

A型は二つに分けることができる。

A 1型（小堀内III-D-1号、D-2号、赤前IV遺跡-A-1号、A-4号、赤前III遺跡A-2号）

竪穴住居内の床面に位置し、形状はほぼ円形で、規模は小さく、浅く掘り窪めただけの下部構造をもち、固い赤褐埴土層の上に還元焼成されたやはり固い褐灰色土層が乗るという2層構造が確認されている。

A 2型（赤前IV遺跡-A-6号）

A 1タイプと同じ構造をもつ炉であるが、住居跡というよりは工房跡と呼びたいような斜面の削平面に位置し、周辺に焼土遺構を伴っていることからA 2タイプとした。

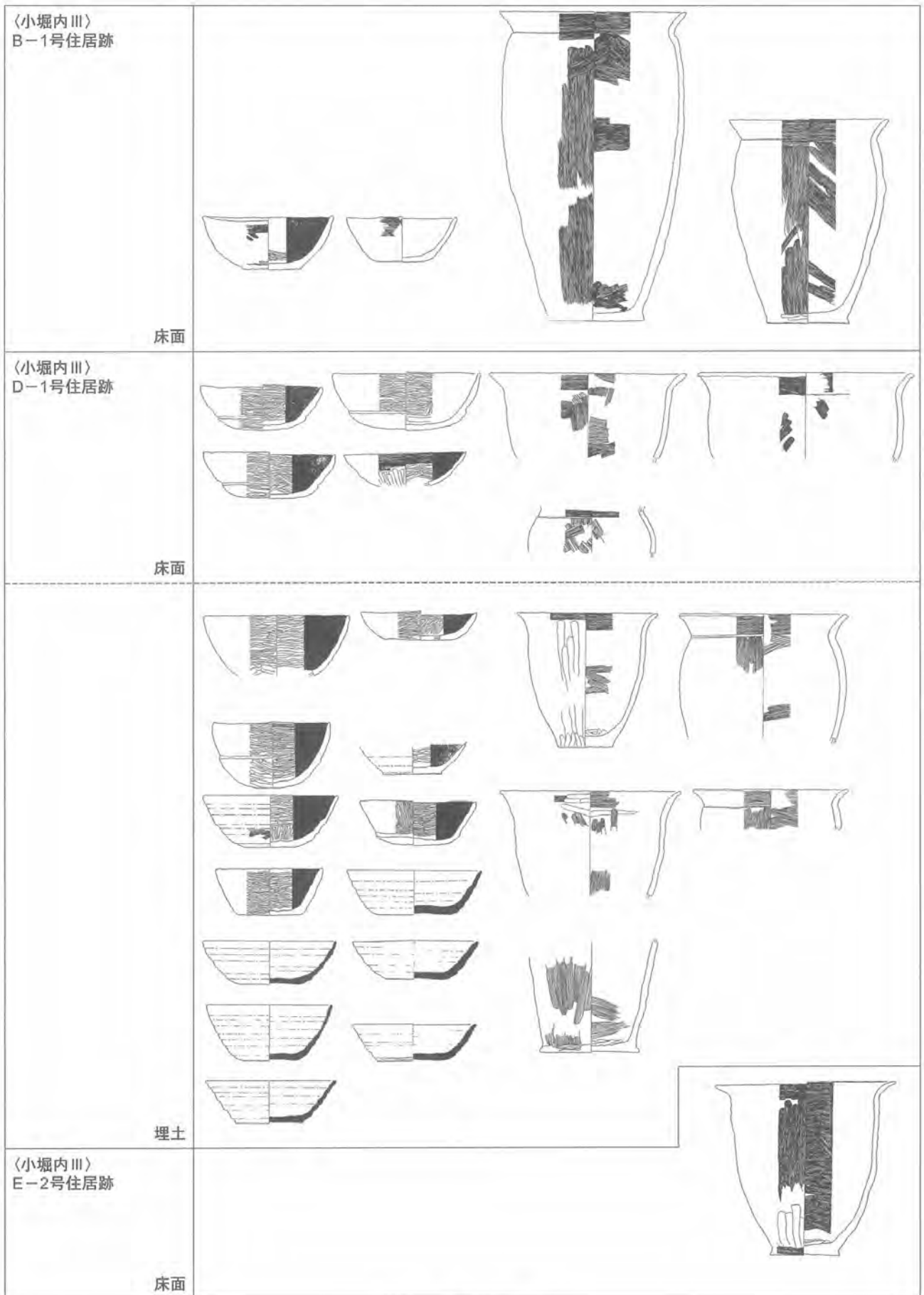
Aタイプについては、いずれも還元焼成層から鍛造剥片が確認され、さらに椀形滓、小形の羽口、鉄製品なども検出しているものもあり（小堀内III-D-1号）、鍛冶炉の1タイプと判断してよいと思われる。

A 2タイプは、やや雑にはあるが斜面を大きく削平し、炉を平坦部の斜面際に配置している。炉の周辺の焼土遺構の性格は不明であるが、西側のA-5号の壁際から出土したの細長い焼土遺構は多量の炭を含んだ層で覆われていたことから、炭窯であった可能性が高く、炉跡とセットで「工房」を構成していたものと考えられる。


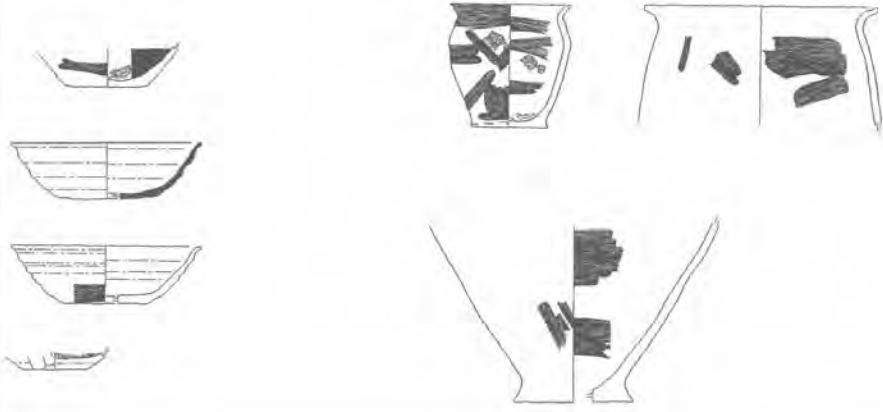
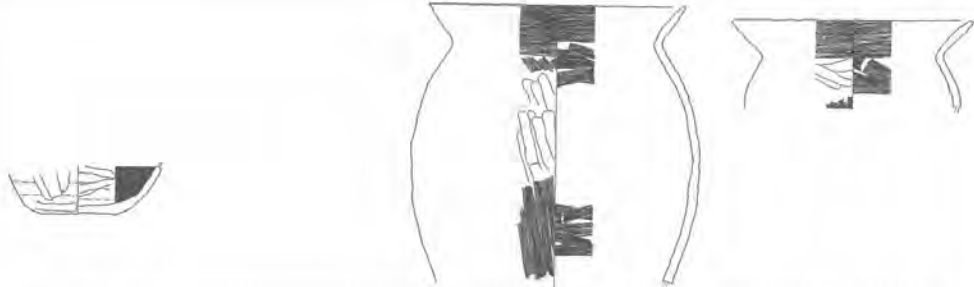
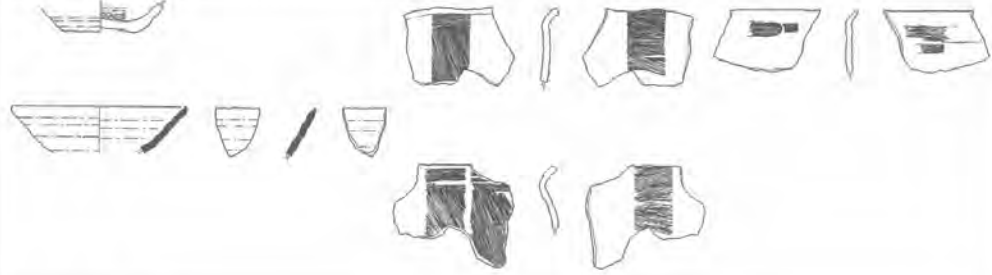
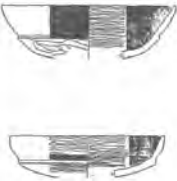


B型（小堀内III-E-1号、赤前IV-B-11号、赤前III-B-3号）

廃棄された竪穴住居跡の壁際あるいは床面を利用し、形状はほぼ楕円形である。しかし下部構造は一定していない。




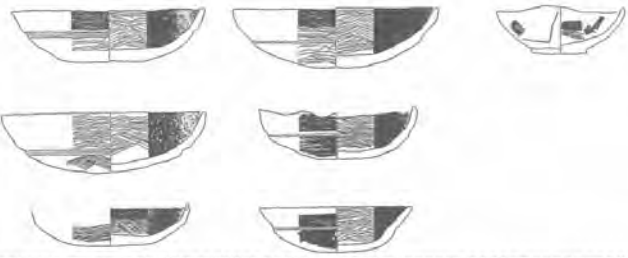

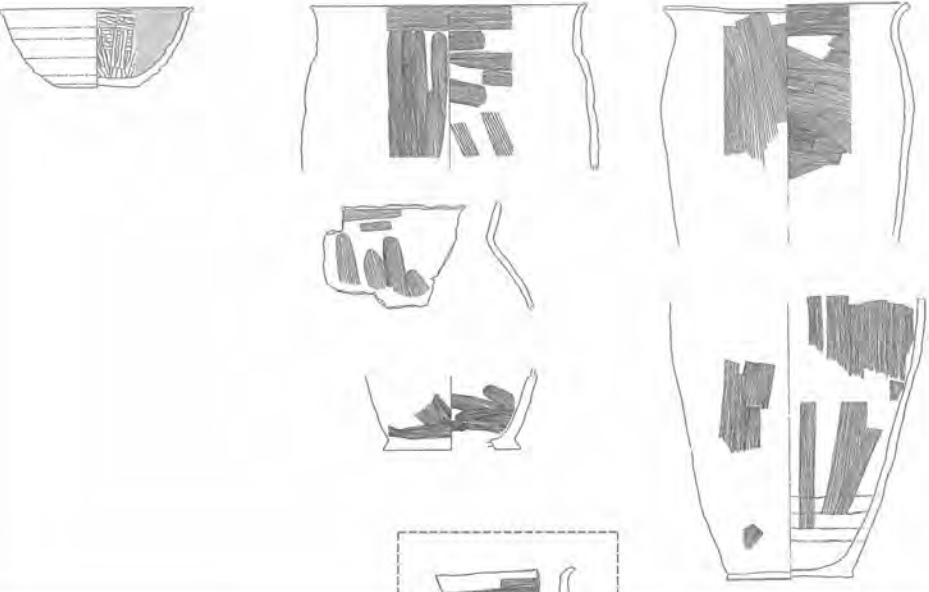

Bタイプについては、配置、下部構造、鉄滓の形状、出土量などから検討してみたい。小堀



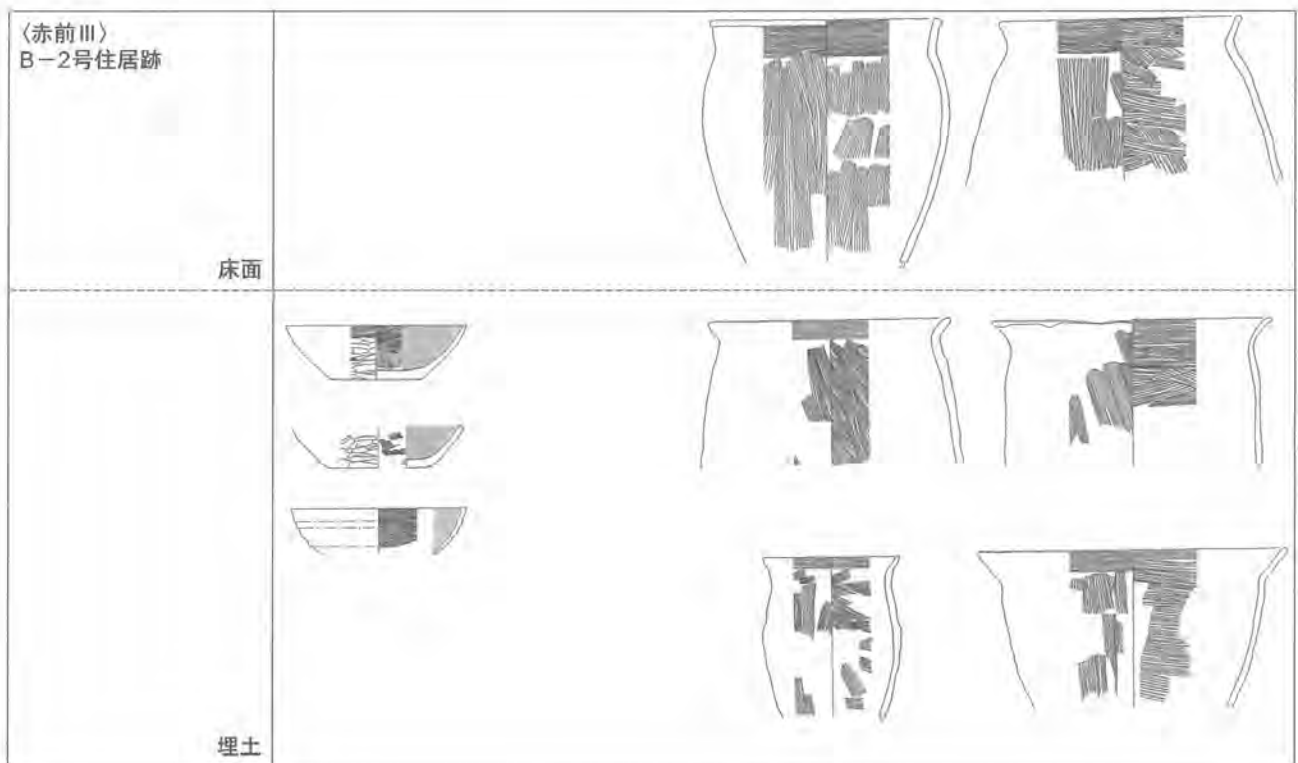
挿図2 土器集成(1)

〈小堀内Ⅲ〉 D-2号住居跡	床面 
埋土	
〈赤前Ⅴ柳沢〉 A-1号住居跡	床面 
埋土	
〈赤前Ⅴ柳沢〉 D-1号住居跡	床面 
〈赤前Ⅳ八枚田〉 A-1号住居跡	床面 
埋土	

挿図3 土器集成(2)

<p>〈赤前Ⅳ八枚田〉 A-2号住居跡</p>	<p>床面</p> 
<p>〈赤前Ⅳ八枚田〉 A-6号製鉄遺構</p>	<p>床面</p> 
<p>埋土</p>	
<p>〈赤前Ⅳ八枚田〉 B-14号住居跡</p>	<p>床面</p> 
<p>埋土</p>	
<p>〈赤前Ⅲ〉 B-1号住居跡</p>	<p>床面</p> 
<p>埋土</p>	

挿図4 土器集成(3)



挿図4 土器集成(4)

内Ⅲ-E-1号、赤前Ⅳ-B-11号、赤前Ⅲ-B-3号をそれぞれB1、B2、B3型とする。

まず配置について見てみると、B1型は竪穴床面のほぼ中央部に位置し、背面南側は斜面である。B2、B3型は共に壁際を利用しているが、B2型は壁の外側を大きく掘り込み、炉は壁の外側に位置するが、B3型はわずかに壁を掘り込んではいるが、炉は大部分が竪穴床面にかかっている。

次に下部構造を見てみたい。B1型は船底状の掘り込まれ、北半分には粘土が貼られ、堅固な構造をみせ、南半分はやや広めに深く掘り込まれただけで、所謂前庭部をなすものと思われる。B2型はやはり船底状に掘り込んではいるが、底面長軸方向にさらに溝を掘り込んでいる。炉は壁際近くに円形に石を組んで粘土を貼っている。B3型も船底状には掘られてはいるが、下部構造は残されておらず、底面は少し雑な掘り込みであるが、床面(北側)がやや深く掘り込まれている。

鉄滓の量は、B1型が約145kgである(内訳は第1表を参照)。そのなかには炉床に形成された最大厚約10cmの層状鉄滓25.5kg、炉壁と炉壁を噛む鉄滓が約17kgが含まれる。鉄塊系遺物が約45kg、鍛造剥片は検出されていない。B2型の鉄滓の総量は約10kg、飴状の鉄滓約6kgの出土が目立つ。鉄塊系遺物は約1.3kg、焼土層から約150gの粒状鉄滓(1mm~10mm)が検出されたが、鍛造剥片は確認されていない。B3型の鉄滓出土量は約14kgである。塊状鉄滓が大部分をしめているが、炉内の埋土、炉の周辺の焼土と炭の層から鍛造剥片約10gと粒状鉄滓160gが検出している。

これらことからB3型については炉の構造は不明であるが、鍛造剥片、鉄製品が出土していることから鍛冶炉の1タイプと考えたい。床面を長楕円形に掘り込んだ鍛冶炉は初見であるが、

Aタイプにくらべて鍛造剥片の出土量ははるかに少なく、同じ仕事をしていたとは考え難い。

B 2型については、比較的大形の構造、鉛状鉄滓の出土量が目立つこと、さらに鍛造剥片が出土していないことに着目したい。「山ノ内Ⅱ遺跡」⁵では、大形の鍛冶炉は鉛状鉄滓を伴うことがあり、鍛造剥片は出土しないことが指摘され、さらにこのタイプの炉は近世の大鍛冶に相当する鉄塊の精製を行っていたのではないかという想定がなされている。B 2型はこの指摘に合致しており、大形の鍛冶炉と考えてよいと思われる。

B 1型は上半部に粘土で堅固な炉床を作り、下半部を前庭部とする構造や炉壁を含めた多量の鉄滓を出土していることなどは、青猿Ⅰ遺跡の製鉄炉（前庭部にあたるとされる部分は破壊されている）、萩沢Ⅱ遺跡⁶の製鉄炉に類似する。しかし、炉の規模が小さいことと炉床の傾斜がほとんどないことが著しい違いと思われる。わざわざ水平面を選んで炉を構築して炉の傾斜角度を小さくしていること、鉄塊系遺物の出土割合が高いこと（これは萩沢Ⅱ遺跡出土の鉄滓と比較したもの）などを考えあわせると、製鉄炉とは考え難く、B 1型もやはり鉄塊の精練工程を行う大形の鍛冶炉と捉えたい。

A 1型とB 3型の炉跡は細越Ⅰ遺跡の住居跡の内外での出土例が報告されている。A 2型は、小規模ではあるが、鍛冶炉のためだけに掘られたと思われる竪穴が対岸の沼里遺跡⁷で出土しており、大鍛冶と想定されたB 1、B 2型は、鯉沢遺跡²の第1号炉、藤畑遺跡⁸の第1号炉が相当するものと思われる。いずれも廃棄された竪穴の埋土中の平坦面に構築され、藤畑遺跡のものは大量の鉄滓をとまない、金属鉄の多く残留する鉄塊系の遺物も含まれている。

当遺跡が位置する津軽石、赤前地区は製鉄関連遺構の多いことで知られており、今後も様々なタイプの炉跡・施設の出土が予想される。

製鉄遺構一覧表

遺構番号	平面形態	規模	位置	鍛造剥片	備考	時期
E-1 (小堀内Ⅲ)	楕円形	1.7m×0.8m	竪穴埋土中	検出せず。	下部構造あり。	不明
D-1 炉Ⅰ、Ⅱ (小堀内Ⅲ)	円形	28cm×22cm 25cm×22cm	竪穴床面	有	鉄製品を伴う	奈良時代
D-2 (小堀内Ⅲ)	円形	径27cm	竪穴床面	有		不明
A-1 (赤前Ⅳ)	円形	25cm×20cm	竪穴床面	○		平安時代
A-4 (赤前Ⅳ)	円形	40cm×30cm	竪穴床面	○		平安時代
A-6 炉Ⅰ (赤前Ⅳ)	円形	径50cm	竪穴床面	○	規模の大きい竪穴を伴う	平安時代
B-1 1 (赤前Ⅳ)	楕円形	1.75m×1.0m	竪穴壁面	検出せず	下部構造、石組みをもつ	平安時代
B-2 (赤前Ⅲ)	円形	32cm×25cm	竪穴床面	○		平安時代
B-3 (赤前Ⅲ)	楕円形	1.5m×0.6m	竪穴壁面～床面	○	掘り方のみ、下部構造検出せず	平安時代

c. 植物・動物遺存体について

今回の調査で出土した植物遺存体はイネとオニグルミである。

イネは、小堀内Ⅲ遺跡D-1号竪穴の焼土層（埋土下層）、赤前Ⅳ遺跡A-1号竪穴の炉Ⅲ、同遺跡のあ-53号土坑跡床面の焼土と炭の層からそれぞれ微量であるが出土している。これらの遺構はおおまかに9世紀代に位置付けられるものである。磯鷄館山遺跡では10世紀前半の土坑からのイネの出土が報告されている（「磯鷄館山遺跡 95」）。これらのイネは持込まれた可能性もあり、これだけでは当地方の農耕云々するのは尚早と思われる。

またオニグルミについても、磯鷄館山遺跡で出土例が報告されている。

穀物、果実、いずれにしてもまだ数例の報告にすぎず、農耕について云々するには今後面的にも報告例が増えることが期待される。

動物遺存体の出土は、まとめて出土したのはB1区の土坑の貝ブロックだけである。イガイ、ウバガイ、オオノガイ、チシマフジツボから構成されている。イガイが主体をなす古代の貝層は市内でも数例報告されているが、当遺跡の場合ウバガイの数が増えているところが土地柄を示してやや特徴的と言えようか。当遺跡の周辺の浜ではホッキ（ウバガイ）漁は現在でも行われている。

今回の調査の大きな収穫は、やはり古代の製鉄遺構がまとめて出土したことである。これまで津軽石、赤前地区は製鉄関連の遺構が多く存在するといわれ、そのことは表採や試掘の段階でも確認されていた。今回の調査もそれを裏付けたわけであるが、今回のように面的な広がりをもって出土した意義は大きいと思われる。これまで点でしか解らなかつたものが、線につながっていくように、古代の製鉄の技術についてはいうまでもなく、製鉄に関する集落の構成、配置などまで含めてこれまでの成果を考える大きな手が掛りとなるからである。今後さらに資料が増加することを期待するとともに今回果せなかつた県内外の資料との比較検討も課題としておきたい。

1. 高橋信夫 1982「岩手の土器」岩手県立博物館
2. 鎌田祐二 他 1992「鏗沢遺跡調査報告書」宮古市教育委員会
3. 竹下将男 他 1995「磯鷄館山遺跡発掘調査報告書」宮古市教育委員会
4. 竹下将男 1984「赤前遺跡群」宮古市教育委員会
5. 佐々木清文 他 1996「山ノ内Ⅱ遺跡調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
6. 阿部豊 1993「萩沢Ⅱ遺跡」宮古市教育委員会
7. 阿部豊 1997 未報告
8. 工藤、鎌田 1998「藤畑遺跡」

写 真 图 版



小堀内Ⅲ遺跡平成5年度調査区全景（北から）



平成6年度調査区、B、D、E区



旧道の峠に立てられた道祖神（弘化4年）

第2図版



B-1号住居跡



B-1号住居跡カマド



D-1号住居跡



D-1号住居跡、鍛冶炉、カマド

小堀内Ⅲ遺跡

第4図版



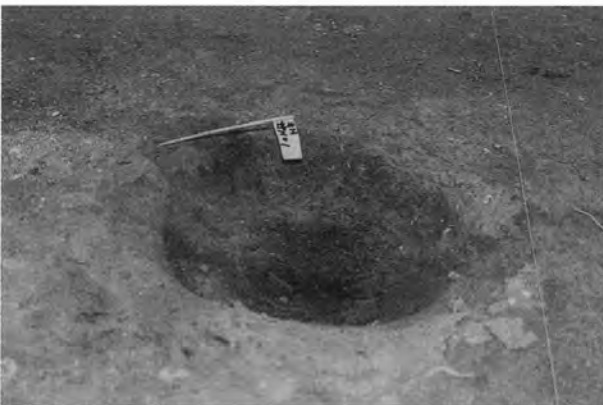
D-2号住居跡



D-2号住居跡カマド



カマド断割り



鍛冶炉跡



土器出土状況



E-1号製鉄炉跡（北から）



E-1号製鉄炉検出状況



製鉄炉完掘（南から）



炉の断割り



炉床の鉄滓

第6图版



E-1号製鉄炉跡、E-2号住居跡、E-3号土坑跡



E-2号住居跡埋土堆積狀況



E-2号住居跡遺物出土狀況



E-3号土坑跡埋土堆積狀況



E-2号住居跡、E-3号土坑跡遠景



D-3号住居跡



B区の土坑跡



D-3号住居跡カマド



B-2号、B-5号土坑跡



D-4号溝跡

第8図版

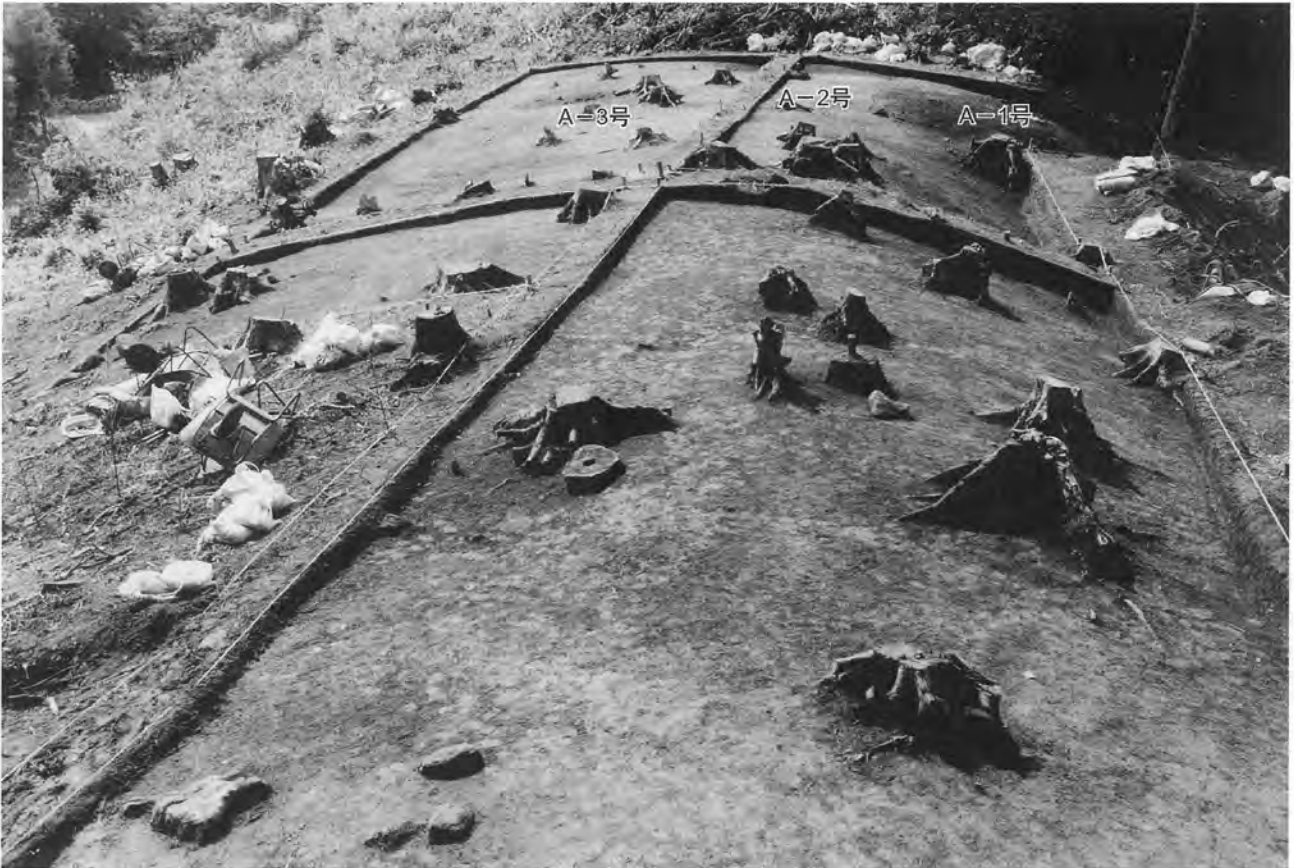


赤前VI釜屋ヶ沢遺跡調査区全景（北から）



A区全景（西から）

赤前VI釜屋ヶ沢遺跡



調査区A区全景 (東から)



C区全景 (南から)

赤前V柳沢遺跡

第10図版



D-1号住居跡



D-3区 (北から)



D-1号住居跡カマド



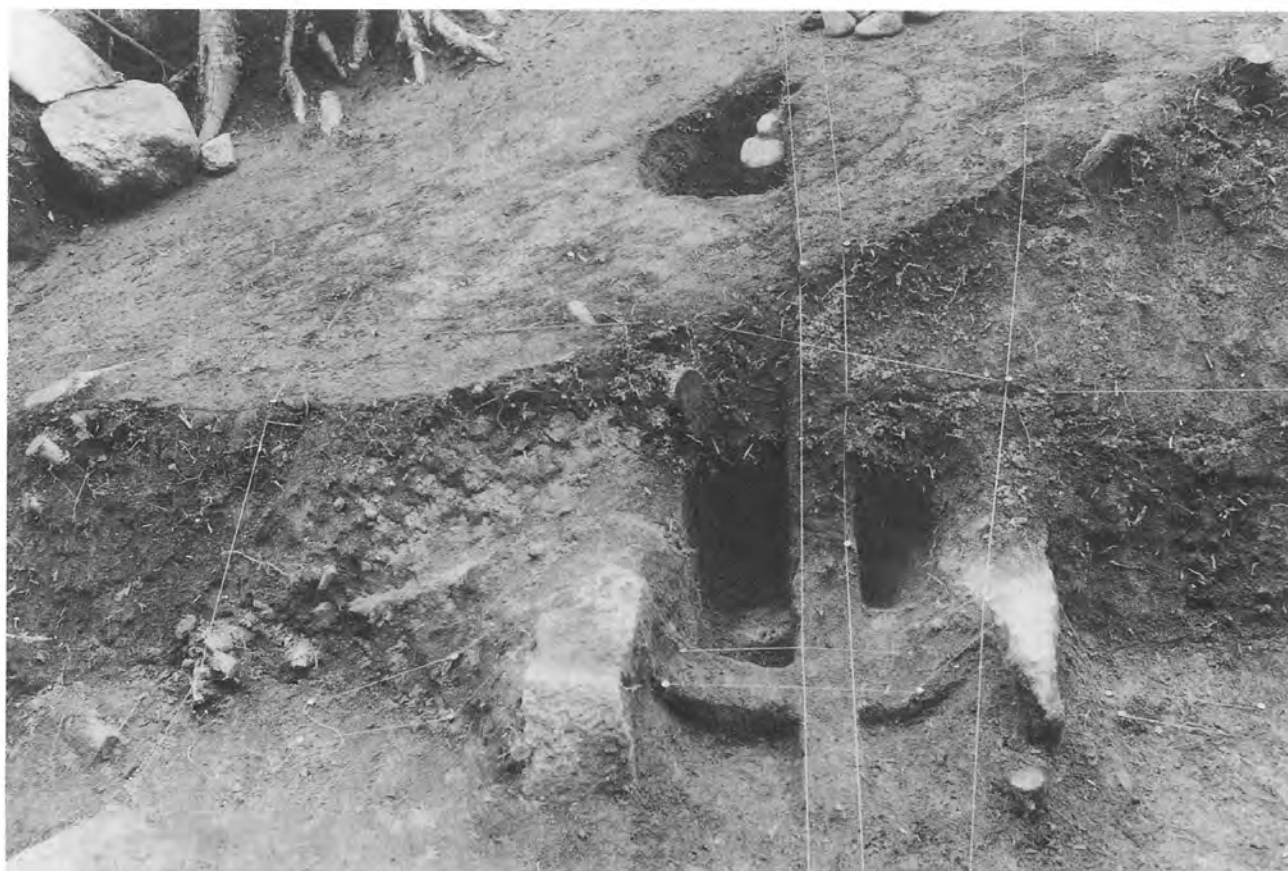
D区全景 (北から)



D区南土層堆積状況



A-1号住居跡



A-1号住居跡カマド

赤前V柳沢遺跡

第12図版



A-2号住居跡



A-3号土坑跡

赤前V柳沢遺跡



A-3号土坑跡



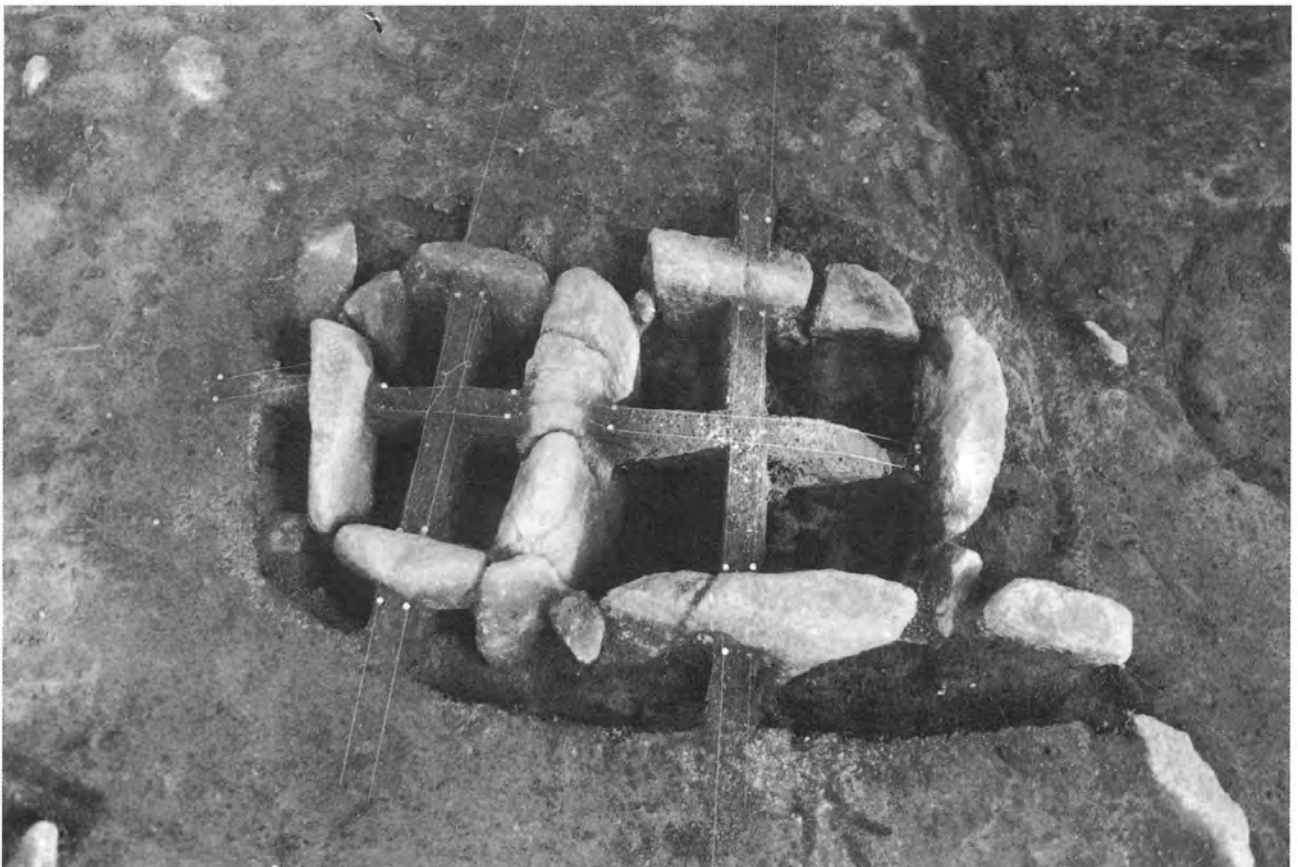
A-5溝跡、A-6焼土遺構

赤前V柳沢遺跡

第14図版



B - 4号住居跡



B - 4号住居跡

赤前IV八枚田遺跡

第15図版



B-5号住居跡



B-5号住居炉跡



B-3号住居跡埋土堆積状況



B-3号住居跡



B-14号住居跡埋土堆積状況



B-14号住居跡 (南から)

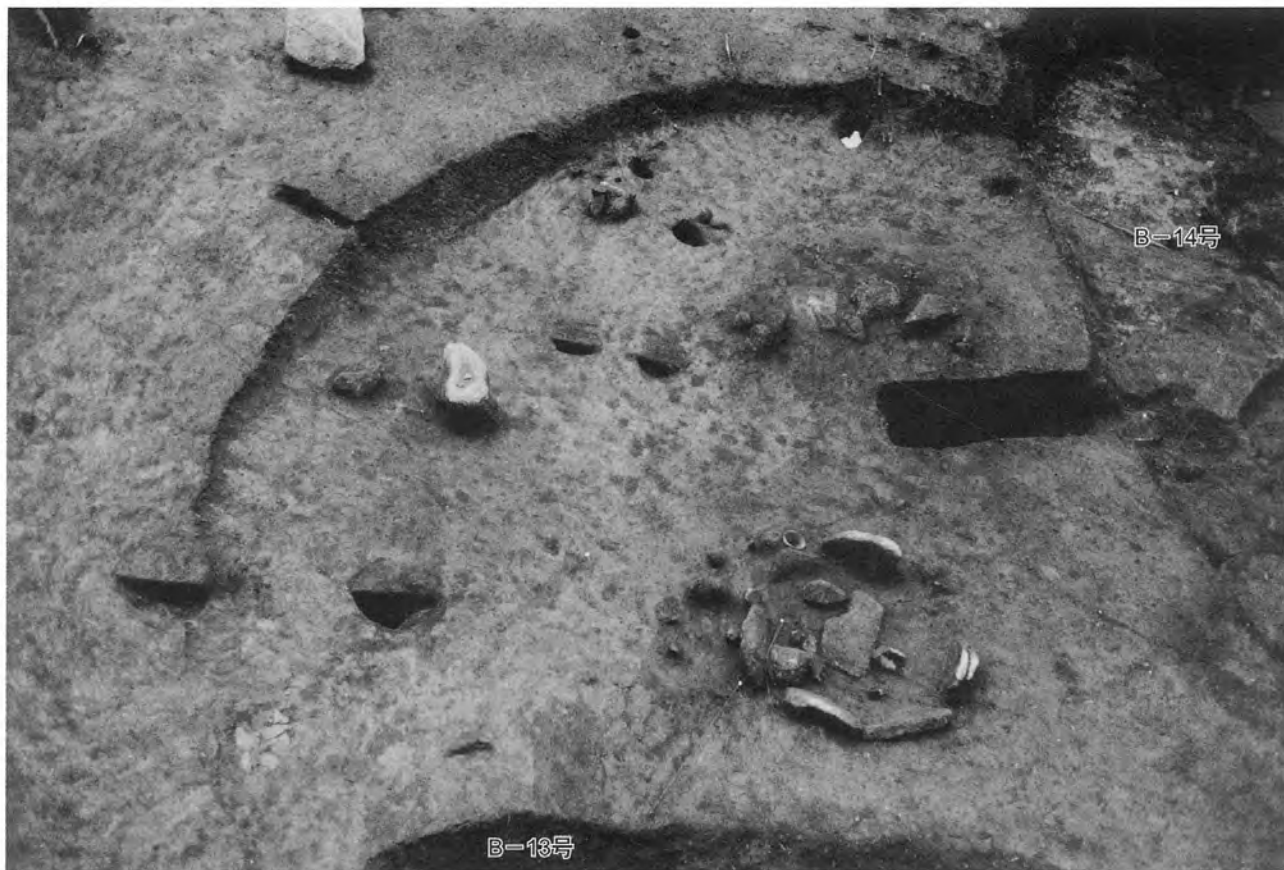


B-14号住居跡カマド



B-14号住居跡土器出土状況

第16図版



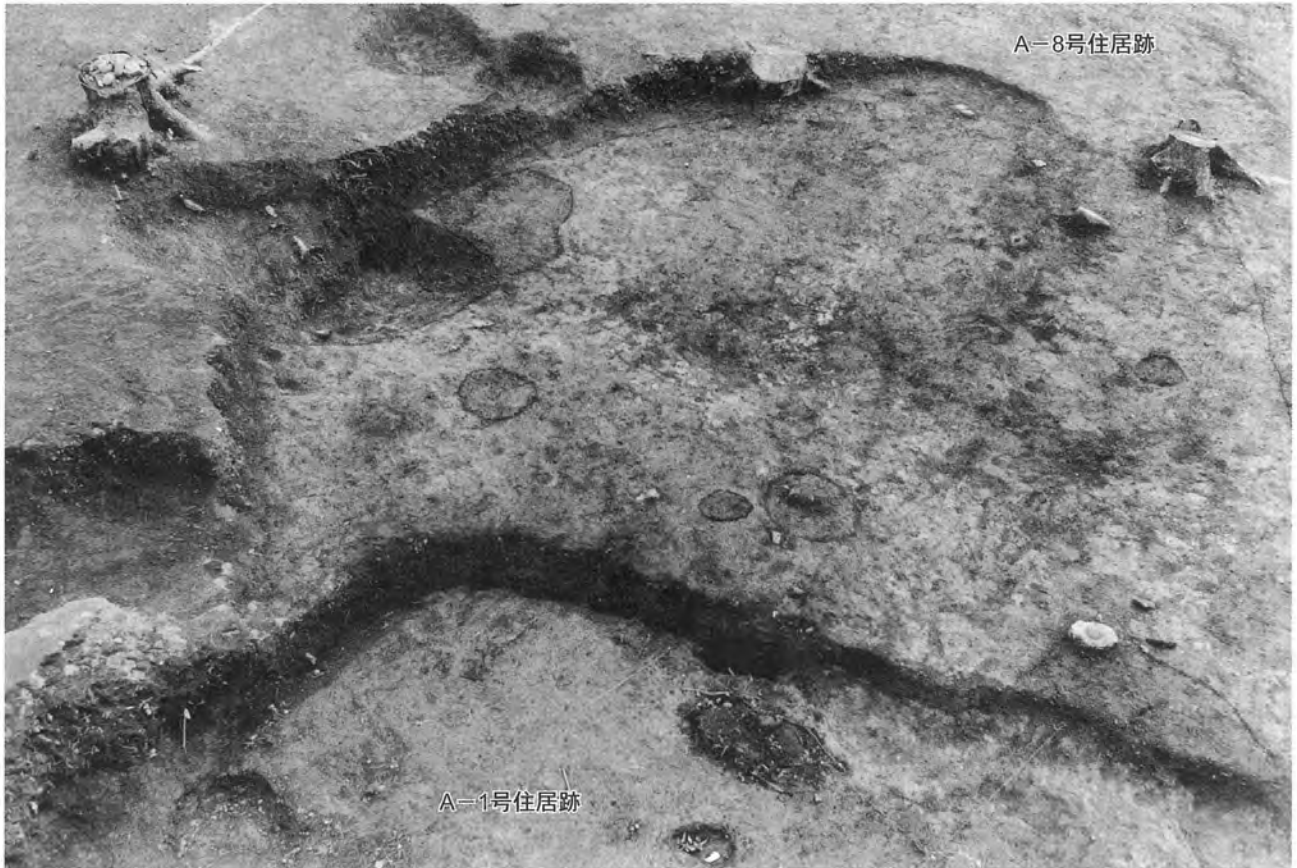
B-15号住居跡



B-15号住居炉跡

赤前IV八枚田遺跡

第17图版



A-8号住居跡



A-2号住居跡

赤前IV八枚田遺跡

第18図版



A-1号住居跡、A-20号土坑跡



A-1号住居跡、A-20号土坑跡、埋土堆積状況



A-1号住居跡カマド付近



A-1号住居跡、鍛冶炉跡



A-20号土坑跡

第19図版



A-3号住居跡埋土堆積状況



A-3号住居跡鉄製品出土状況



A-4号住居跡



A-4号住居跡鍛冶炉断割り



A-5号焼土遺構

第20図版



A-6号製鉄遺構埋土堆積状況(1)



A-6号製鉄遺構検出状況(2)



A-6号製鉄遺構検出状況(3)



床面段状遺構



鍛冶炉断割り



焼土遺構III?



焼土遺構II?



焼土遺構IV



A-7号住居跡



B-1号、B-2号住居跡

赤前IV八枚田遺跡

第22図版



B-11号製鉄遺構埋土堆積状況



B-11号製鉄遺構、B-12号住居跡

赤前IV八枚田遺跡



B-11号製鉄炉跡



炉内の石組と鉄滓



検出状況（北東から）

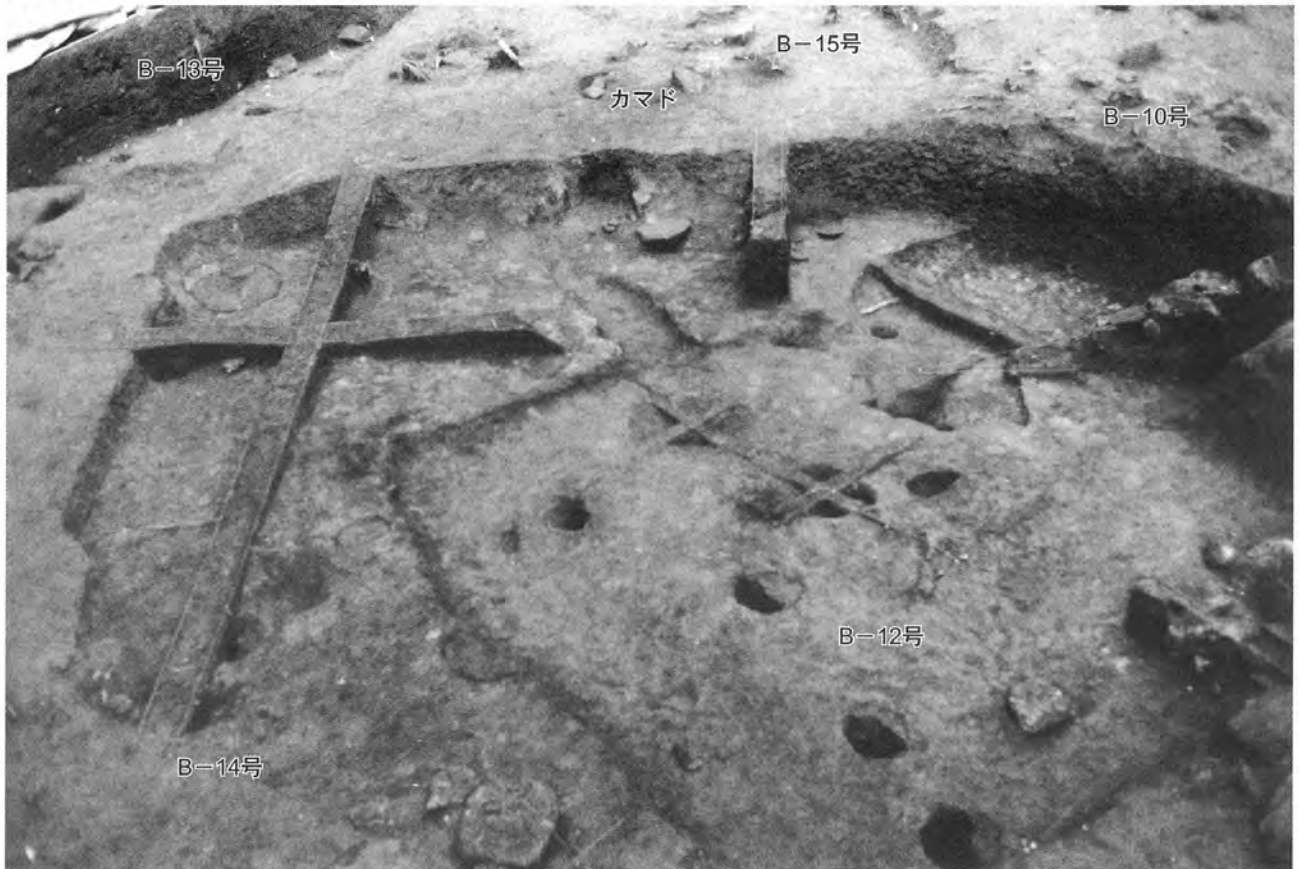


炉内の石組と鉄滓



完掘状況

第24図版



B区遺構の配置、B-12号、B-13号、B-14号住居跡、B-10号土坑跡（南から）



B-13号住居跡、B-17号土坑跡

第25図版



A-19号土坑跡



A-19号土坑跡から出土した小刀



A-16号土坑跡



A-21号土坑跡



A-34号土坑跡



A-31号、A-32号土坑跡



A-53号土坑跡



B-16号土坑跡

第26図版



B-6号土坑跡貝ブロック出土状況



B-8号、B-10号土坑跡、B-9号道状遺構

赤前IV八枚田遺跡



A-9号溝跡



A 1、2区全景

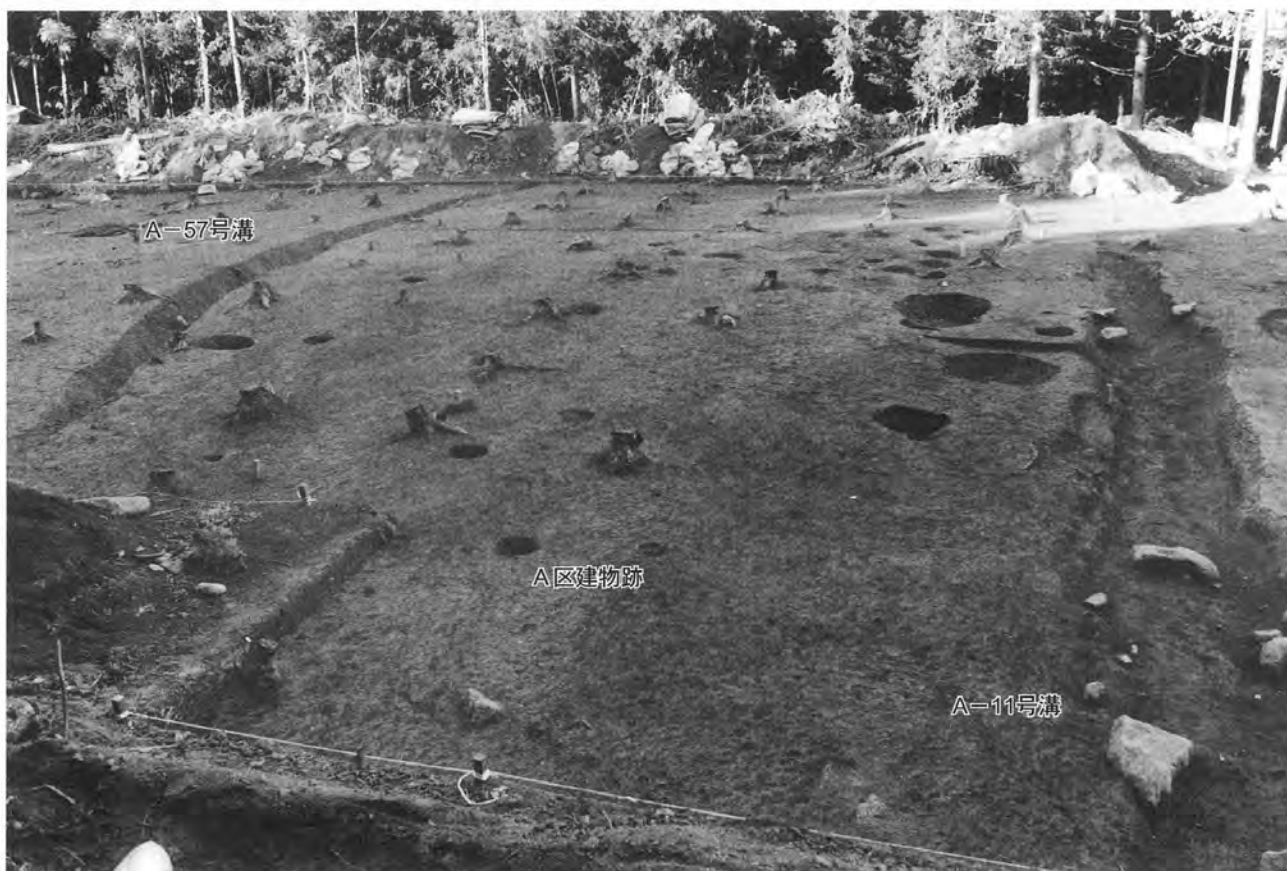
赤前IV八枚田遺跡

第28図版



A-53土坑

A-57号溝跡



A-57号溝

A区建物跡

A-11号溝

A区中央部A区建物跡、溝跡

赤前IV八枚田遺跡



A区全景



A区全景（北から）

赤前川遺跡

第30図版



B区遠景



B区遺構検出状況

赤前川遺跡



B-4号住居跡



B-6号土坑跡



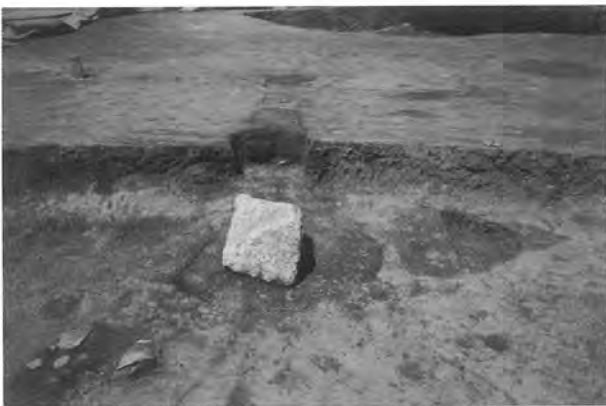
B-5号土坑跡

第32図版



旧カマド

B-1号住居跡



旧カマド



カマド



埋土堆積状況



床面土坑から出土した刀子



B-2号住居跡



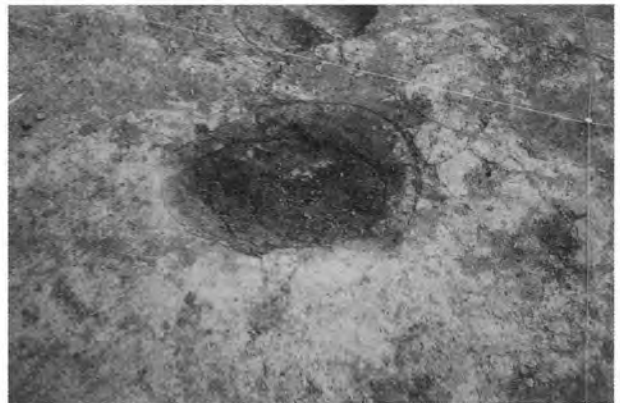
住居跡全景（西から）



カマド

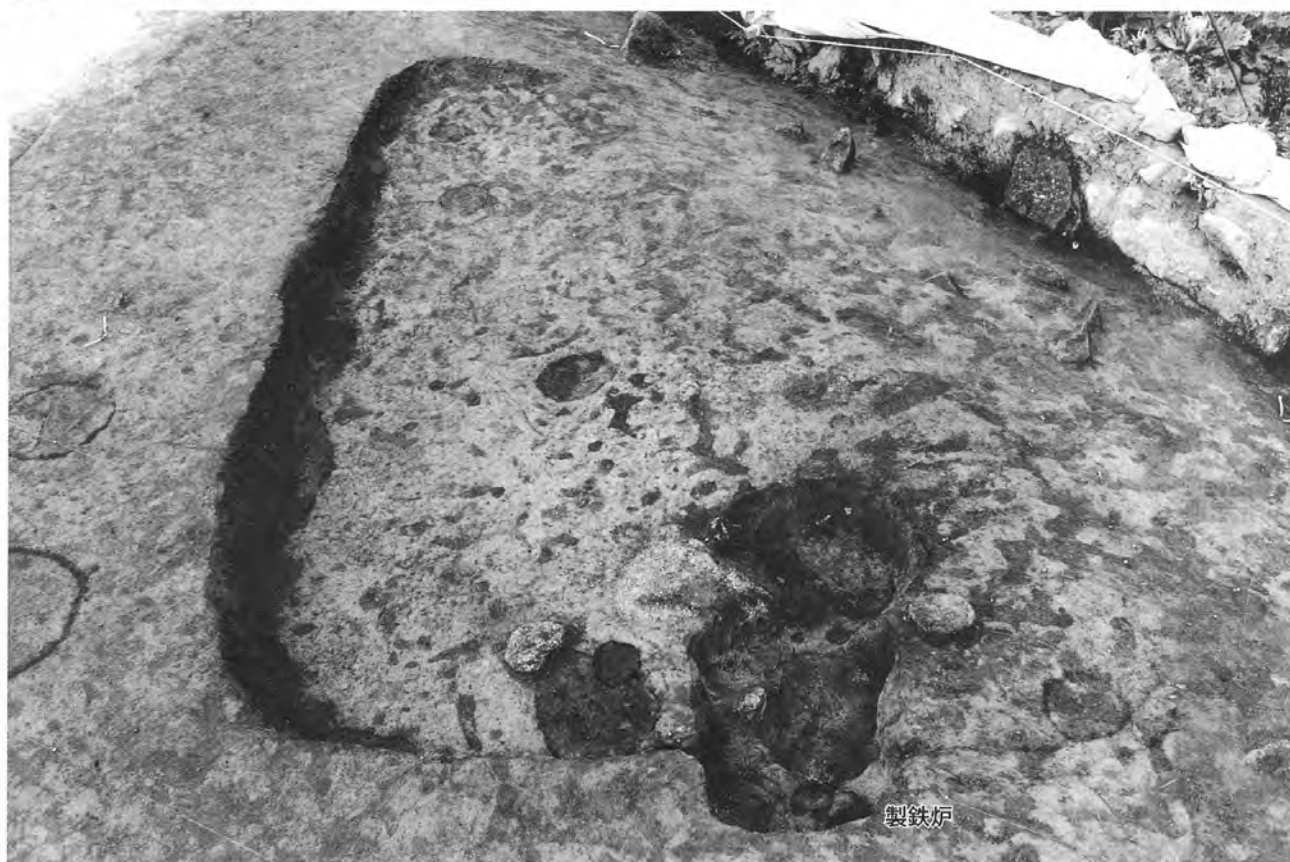


埋土堆積状況



鍛冶炉跡

第34図版



B-2号製鉄遺構



埋土堆積状況



製鉄炉 (南から)



製鉄炉 (東から)



製鉄炉埋土堆積状況



B区東の土坑群



▲地元の小学生の遺跡見学会▶



第36図版



C区全景（北から）



C-1号陥穴状遺構

赤前川遺跡



D区全景（南から）



D区全景（北から）



D-1号道状遺構

第38図版



B-1号住居跡



B-1号住居跡



B-1号住居跡



B-1号住居跡



D-2号住居跡



D-2号住居跡



D-2号住居跡



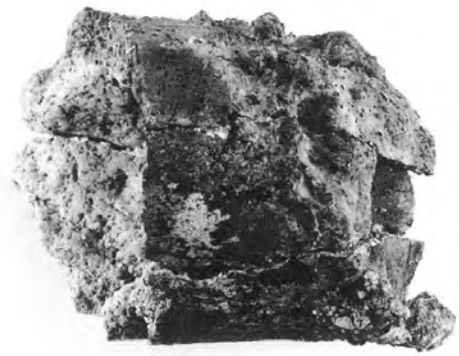
D-2号住居跡

第39図版



1

E-1号製鉄炉跡



4

E-1号製鉄炉跡



6

E-1号製鉄炉跡



1

E-2号住居跡



1

D-1号住居跡



2

D-1号住居跡



3

D-1号住居跡



6

D-1号住居跡

第40図版



D-1号住居跡



D-1号住居跡



D-1号住居跡



D-1号住居跡



D-1号住居跡



D-1号住居跡

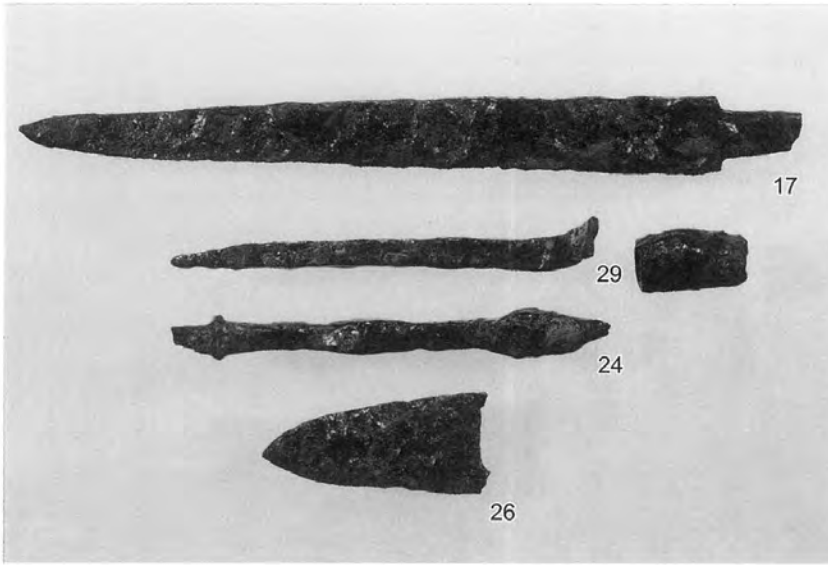


D-1号住居跡

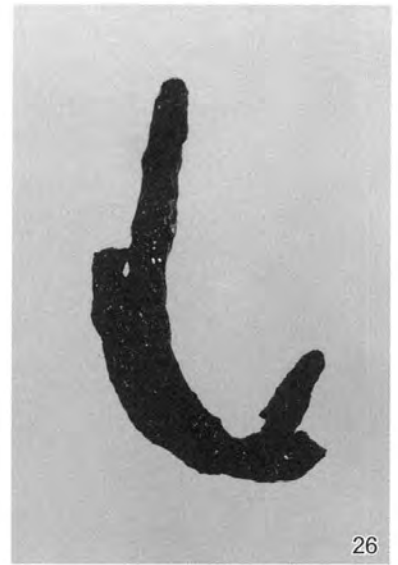


D-1号住居跡

第41図版



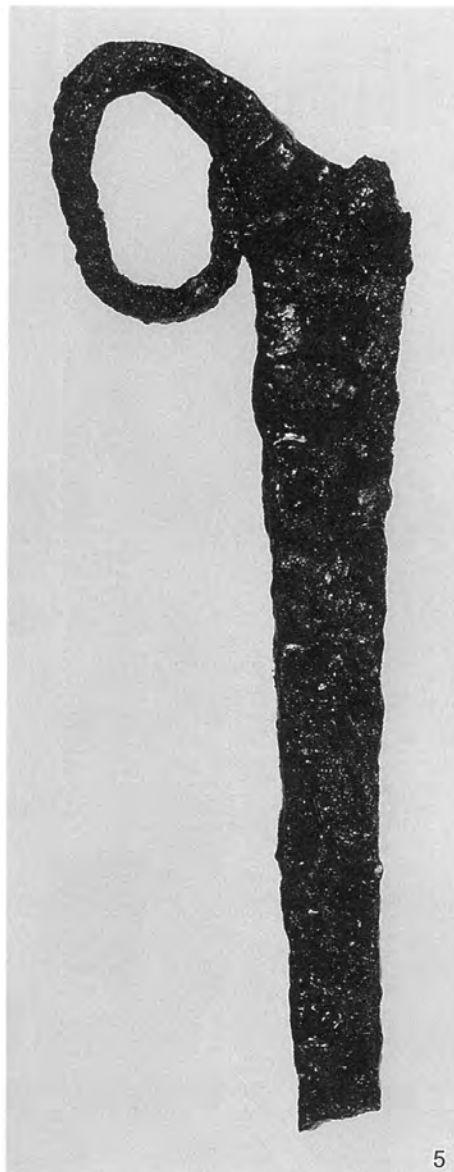
A-1号住居跡 (赤前V)



B-12号住居跡 (赤前IV)



A-2号住居跡 (赤前V)



A-3号住居跡 (赤前IV)



B-12号住居跡 (赤前IV)

赤前IV八枚田遺跡、赤前V柳沢遺跡

第42図版



B-15号住居跡

1



B 2区遺物包含層

29



B-8号土坑跡

16



B-14号住居跡

1



B-14号住居跡

12



B-14号住居跡

5



77

63

B区遺構外出土遺物

第43図版



B-1号住居跡



B-1号住居跡



B-2号住居跡



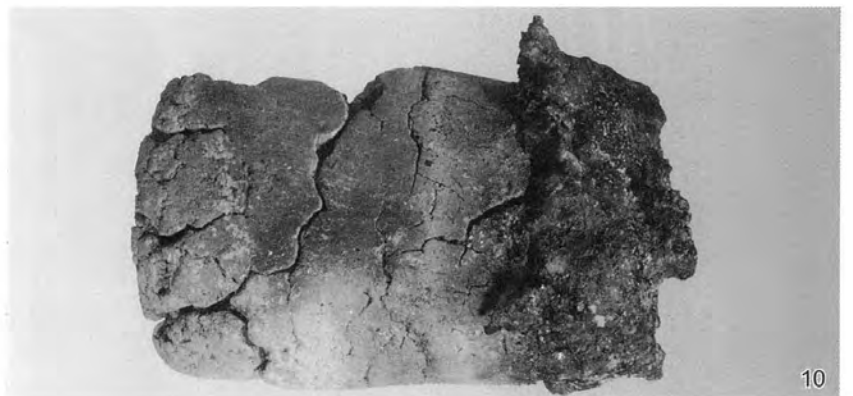
B-2号住居跡



B-1号住居跡



B-1号住居跡

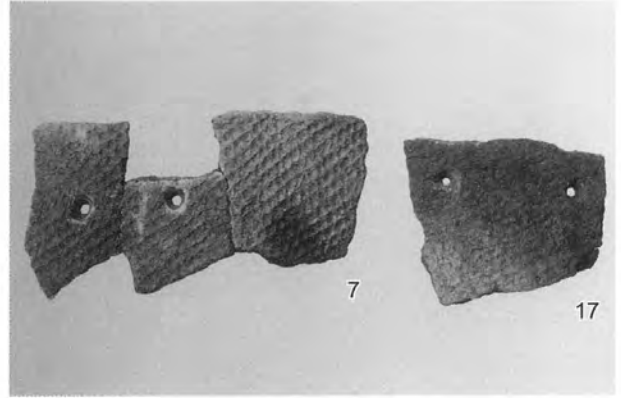


B-3号製鉄炉

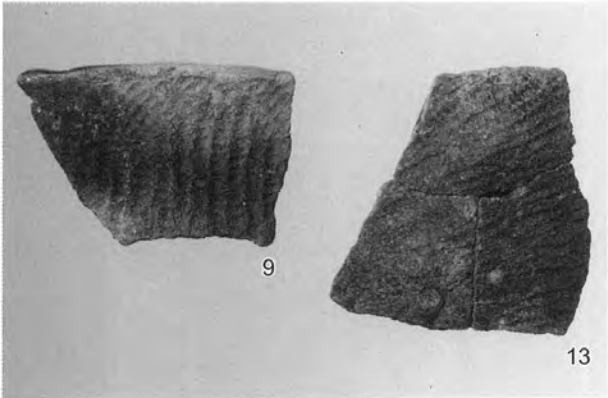
第44图版



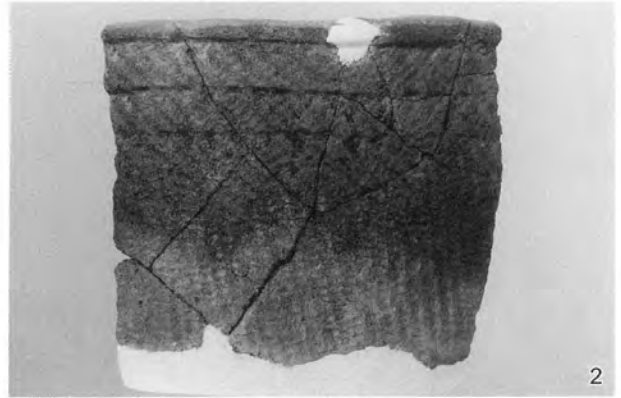
A区遺物包含層



A区遺物包含層



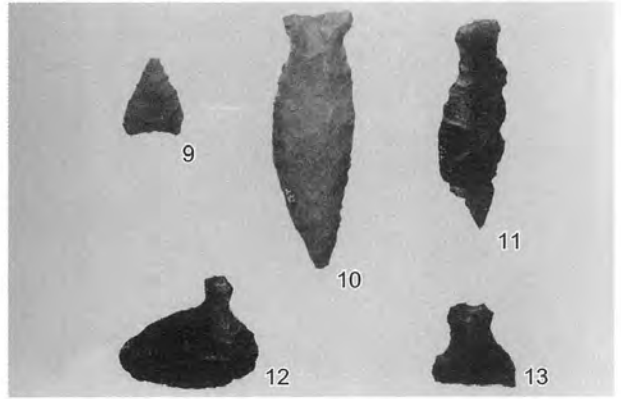
A区遺物包含層



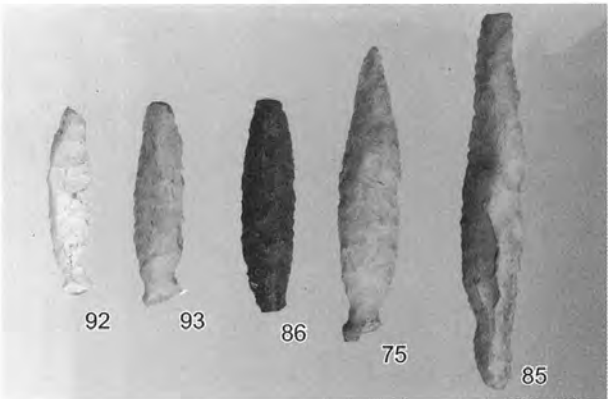
B-5号土坑跡



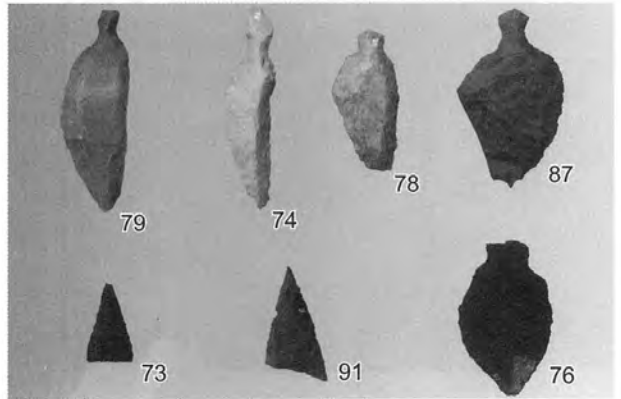
C区



B-4号住居跡



A区遺物包含層



A区遺物包含層

報告書抄録

書名	小堀内Ⅲ遺跡、赤前Ⅲ遺跡、赤前Ⅳ八枚田遺跡、赤前Ⅴ柳沢遺跡、赤前Ⅵ釜屋ヶ沢遺跡							
副書名	宮古市水産課津軽石環境整備事業関係							
巻次								
シリーズ名	宮古市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	NO.53							
編著者名	阿部 豊							
編集機関	宮古市教育委員会							
所在地	〒027-8501 岩手県宮古市新川町2番1号							
発行年月日	平成11年3月31日 (1999.3.31)							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
小堀内Ⅲ	宮古市大字 赤前第14地 割字小堀内 17-1ほか	03202	LG54-0142	39-35-23	141-55-16	19930802～ 19931119 19941005～ 19941226	560 1950	道路建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
小堀内Ⅲ	集落	奈良	竪穴住居跡 製鉄炉跡 土坑跡	土師器の坏と甕、須恵器、鉄製品（刀子、紡錘車など）、羽口、土製品（紡錘車）、鉄滓				

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
赤前Ⅵ釜屋 ヶ沢	宮古市大字 赤前第13地 割字釜屋ヶ 沢24-1ほか	03202	LG54-0160	39-35-8	141-55-10	19930802～ 19931119	1020	道路建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
赤前Ⅵ釜屋 ヶ沢	遺物包含層	江戸 平安		平安土師器の坏と甕、須恵器、陶磁器、煙管				

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
赤前Ⅴ柳沢	宮古市大字 赤前第12地 割字柳沢27 -1ほか	03202	LG54-0089	39-35-0	141-55-0	19941005～ 19941226 19950609～ 19950831	1200 608	道路建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
赤前Ⅴ柳沢	集落	奈良 平安	奈良、平安の竪穴住居跡、 土坑跡	土師器の坏と甕、須恵器、鉄製品（刀 子）、オニグルミ				

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
赤前Ⅳ八枚 田	宮古市大字 赤前第11地 割字八枚田 40-2ほか	03202	LG54-1008	39-34-50	141-54-56	19950715～ 19951226	1980	道路建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
赤前Ⅳ八枚 田	集落	平安	竪穴住居跡、建物跡、製 鉄炉跡、大溝跡、 土坑跡	土師器の坏と甕、須恵器、鉄製品（刀 子）、羽口、鉄滓			大溝を伴っ た集落	

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
赤前Ⅲ	宮古市大字 赤前第11地 割字八枚田 92ほか	03202	LG54-1025	39-34-31	141-54-43	19970605～ 19970822	930	道路建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
赤前Ⅲ	集落 遺物包含層 (縄文前期)	縄文前期 平安	縄文前期と平安の竪穴住 居跡、製鉄炉跡、土坑跡、 陥穴状土坑跡、道状遺構	土師器の坏と甕、須恵器、鉄製品（刀 子）、羽口、鉄滓				

—宮古市埋蔵文化財調査報告書53—

赤前Ⅲ遺跡 赤前Ⅳ八枚田遺跡 赤前Ⅴ柳沢遺跡
赤前Ⅵ釜屋ヶ沢遺跡 小堀内Ⅲ遺跡

—宮古市水産課津軽石環境整備事業関係—

1999.3

発行 岩手県宮古市教育委員会
〒027-0081 岩手県宮古市新川町2番1号
TEL 0193 (62) 2111

印刷 花坂印刷工業株式会社
〒027-0081 岩手県宮古市新川町1番2号
TEL 0193 (62) 3125(代)

